
死のクリスマスイブ

けせら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死のクリスマスイブ

【Nコード】

N6197Z

【作者名】

けせら

【あらすじ】

十年前に世界各国の首脳が集まり「世界統一宣言」が出された。それにより世界から戦争がなくなり人々は平和に暮らすようになった。だが、戦争の皆無、医学の進歩のため人口の増加は世界の大問題となっていた。国々は宇宙コロニー計画、海上人工大陸計画など独自の計画によって人口問題をクリアしようとしていた。日本もまた独自の政策を打ち出した。「特権者優遇計画」だった。毎年クリスマスの時期に一週間、国が指定した特権者、特命者を指定し、特権者に特命者や市民を殺害させるものだった。クリスマス間近の日

曜、風間克行のもとに特権者指定の通知が届けられる。

死のクリスマスイブ・1

—

十二月 十日（日）

クリスマスまであと二週間と迫っている。

今年は週末と重なることもあつてか、例年以上に街は盛り上がりを見せていた。気象庁の予報によると、ちょうど日曜のクリスマス・イブには雪が降るらしい。

街は十一月も半ばになると早々とクリスマスソングを流し、店先にはサンタクロースやクリスマスツリーを形取った商品が並び年末の一大商戦を繰り広げる。いまやクリスマスは正月以上に国民あがての一大行事となっていた。

風間克行はベッドのなか休日朝を、そして街の騒々しさを嫌気がさすほど十分に感じ取っていた。部屋は二時間も前から十分に暖まりベッドのなかは蒸し暑くさえ感じられるほどになっていた。そのベッドのなかで克行は毛布のなかに頭を突っ込み、光や音によって眠りを妨げられるのを避けようと試みていた。そうしておいて、しばらくの間暗闇のなかであくまでのんびりといういろいろなことを考え巡らせた。

（今年の正月は田舎で過ごすことにしよう）

（ボーナスの残りで何を買おう）

（年賀状を早めに書いておかないと）

どうでもいいことを考えることで頭をゆっくりと目覚めさせるつもりだった。しかし、その暗闇のなかにまでジングルベルが侵入してきた。

克行の住むマンションは商店街に面しており、嫌でも街の様子は聞こえてくる。すでにジングルベルは克行が目覚めてから数えても

二十回は鳴り響いている。目覚めの音楽としては少々賑やかすぎる。克行にとってクリスマスなどはどうでもよかったし、マスコミやデパートに勝手に煽動されるのも嫌だった。子供の頃からサンタクロースが嫌いだった。おそらくそれは風邪をひいて病院に行った時、そこに置いてあった雑誌に載っていたマンガの影響だろう。そこには豊かな白い髭を生やし、真つ赤な服と帽子を被った体格の良いサンタクロースが左手にナイフを、右手にイバラの鞭を持って二タニタを気味の悪い笑みを浮かべている姿が描かれていた。そして、別のページにはそのイバラの鞭でトナカイの背を血が出るまで打っている姿があった。その夜、熱にうなされている彼の夢のなかにその姿が現れたことは言うまでもない。

まったく、どうしてあんなものばかりが毎年騒々しく鳴り響くん
だ？

克行はうんざりしながら毛布のなかから頭を出すとやっと目を開
き時計を見つめた。

時計の針は十時を回っている。

約束は午後一時だ。十二時にここを出れば間に合うだろう。

五十嵐麻美から電話があったのは昨夜の三時過ぎで、克行はその
時ちょうど眠りにつきそうになった時だった。彼女は相変わらず夜
に強いところをしっかりと教えてくれた。

——ごめんね、私ったらいつもこの時間に目が覚めちゃって……明
日休めるんでしょ。午後からでいいからいっしょに映画でも観に行
こう。

（ひょっとするとあれは夢だったかな？）

もしそうだとしたらそれほど楽なことはない。しかも、ここ一週
間の間、風邪で微熱が続いていて、やっと昨日になって熱がさがっ
たばかりだ。麻美に会うのも三週間ぶりで克行も会いたい気持ちは
あったが、今は少しでもゆつくりと休んでいたかった。

今年も終わりに近づき完全週休二日制も有名無実になっている。
克行の務める会社は決して大きな会社ではない。どこにでもあるよ

うな中小企業で大きなメーカーなどからの依頼によって、システムの設計や開発を行うことを主としている。それでも年末になると決算を睨んだ会社の上司や、正月明けを見越した顧客の注文によりこの時期が一番忙しくなる。

克行は手を延ばすとテレビのリモコンのスイッチを押した。買ったばかりの大型のステレオテレビは部屋の狭さなど気にならないようにまだ半分眠っている克行に対し情報の提示を行い始めた。どことなく会社の上司に似ている年配のアナウンサーがニュースをぶつきらばうに読んでいる。

朝から会社を思い出すようなそのアナウンサーの顔に克行はほんの少し嫌悪感を持った。特にその上司とは常に気が合わずに何度言い合いをしたことだろう。そのたびに『いまにその頭を叩き割つてやるからな』と心のなかで密かに毒づくのだった。

それでも克行はチャンネルを変えようとはせずに、ぼんやりと目覚し替わりにそのつくったような声を聞いていた。

——次のニュースです。

突然、アナウンサーの声が重みを帯びたような気がして、克行はまだ少し眠い目を開けるとテレビに耳を傾けた。

——今年もまた「特権者優遇計画」が実施されることになり、先日、特権者が決定されました。特権者に関しては内密に特権者に内示される予定になっています。

では次のニュースです。

アナウンサーは早々にそのニュースを打ち切ると次のニュースへと話題を移した。

そうか……今年もやってくるのか。

克行は憂鬱な思いにかられた。

「特権者優遇計画」

それは五年前政府が発表した究極といえる人口制御政策であった。今や人工増加は深刻な問題となり、十年前に世界各首脳による「世界統一宣言」によって一切の戦争放棄が誓われるに至って、人口

の増加は誰の目にも人類最大の問題になっていった。各国はその問題に頭を悩まし、それぞれ独特の解決手段を取っていった。ロシアのコロナ計画、アメリカの海上人工大陸計画などが次々に発表されていった。日本も一時期は小子化によって人工が激減した時期があったが、養育費保護などの政策も影響し、今では再び人工は増加しつつあった。そんななか日本政府は一つの人口削減計画を打ち出した。それは毎年ある特定の一週間の間、国や県、市などが一定の特権者を指定し、指定された特権者は市が選び出したリストを中心に自由に六名を削除——つまりは殺害することを許可するというものだった。そのリストに載る人々は俗に「特命者」と呼ばれていた。その多くは百歳を越える老人や犯罪を犯した者で構成されていた。ただ、それはあくまで市が選定した候補リストであり、特命者リストに含まれない一般市民が、時折は特権者までが殺害されることもまれにあった。

全国で何名の特権者が選ばれるのか、また、何名の特命者、一般市民が殺害されるのか、それは一切伏せられていたがそれでもかなりの人口削減につながっていることから見て、その一週間の間、相当の数の殺人が行われていると見て相違なかった。

マスコミは政府の弾圧によりほとんどそのことに関し触れることは出来ず、国民のほとんどはその悪魔のような政策を身近に感じることはなかった。だが、克行のように偶然その殺人行為の現場に居合わせたことのある人も決して少なくはなかった。

（くそ、つまらないことを思い出してしまった）

克行は一瞬感じた不快の思いをすぐ断ち切るように、ベッドから抜け出ると窓辺に近づき、外の様子を見下ろした。

厚手のコートを着こんだ主婦や男たちが忙しげに行き交っているのが見える。ここ二、三年は暖冬が続き、地球の温暖化が例年以上に騒がれていたが今年の冬はオゾンホールも例年より狭く、珍しく寒さが厳しいらしい。環境対策がうまくいっているということだろうか。

克行はそつと窓を少しだけ開けた。天気は良く、暖かそうな日ざしが街を覆っているが、それでも肌を刺すような冷えた外の空気が暖まっている部屋の空気を犯すかのように飛びこんでくる。克行はその冷たさにすぐに窓を閉めた。

ピンポーン！

突然、玄関の呼び鈴の音が部屋のなかに響き渡った。

「はい！」

克行はパジャマ姿のまま玄関まで行くと、レンズから外をそつと覗いた。若い郵便屋が寒そうに足踏みしながら立っている。その帽子の下からはアルバイトであることを証明するように黄色に染めた髪がのぞいている。

克行はチェーンを外すとドアを開けた。

「書留です、印鑑お願いします」

郵便屋は無愛想なまま趣味の悪いうすい紫色の封筒を差し出した。克行が急いで印鑑を取ってきて差し出し出された書類に印鑑を押すと、郵便屋は何も言わないまま黙って次の配達へと早足に進んで行った。

克行はドアを閉めると鍵とチェーンをしっかりとかけてから部屋へ戻った。「世界統一宣言」以来、外国人が増えこの日本も欧米なみに治安が乱れてきている。特に麻薬が昼間でもあちこちで取り引きされるようになり、警察の手にもあまるようになってしまっている。ということがよくテレビでも取り沙汰されるようになってい。そして、それが一つの原因ともなり、強盗、空き巣などが多発しており、克行でなくてもこのくらいの用心は今では当然となっている。克行は部屋に戻ると改めてうすい紫色の封筒を眺めた。克行の想像どおりその封筒は市役所からのものだった。

（なんだろう……）

市役所など選挙の時以外はまるで関係のないと思っていた克行は

不思議な面持ちで開封した。なかにはたった一枚の白い通知だけが入っていた。

だが、その通知を読んでいくうち克行は自分の顔からずっと血の気がひいていくのを感じていた。

『風間克行様

このたびは誠におめでとうございます。

今年も再び「特権者優遇計画」が実施されることにあいなりまして。今年はみごとあなたが特権者として市の指定を受けることと決定し、取り急ぎ連絡させていただきます。

なお、詳しいことにつきましては十二月十一日（月曜）、市役所内にてご説明させていただきますのでお忙しいなか申し訳ありませんが、午前十時までに身分証明書、印鑑をお持ちのうえお越しくださいますようお願いいたします。

市長』

克行には一瞬それが、自分自身の死亡通知書のように思えた。

なぜ自分が特権者なんか選ばれたのかわからなかった。

克行はしばらく通知を手にしたままぼんやりと考え続けていた。治ったはずの風邪が振り返したように体がかつかと熱く、そして全身がだるく感じていた。今眠れば間違いなくイバラの鞭を持ったサントクロースに出会うことが出来るだろう。

これはあくまで噂だが「特権者」というのはかなり市や国にとって模範的な市民、国民と認められた人物でそのほとんどは公務員が多いとのことだった。

都内の小さなコンピュータ会社に務める若干二十六歳の克行が特権者を選ばれるなどこれまで夢にも思わなかった。

（それなのに、今年は俺が特権者として人を殺すことになる……）
もちろん、特権者というからにはあくまでも権利であって放棄す

ることが出来ることになっているということは聞いていた。だが、その反面権利を放棄した者が、翌年は逆に特命者として選考されるという噂もまた克行は聞いたことがある。いずれにしてもそんな権利を望んでいる者は少ないはずだ。

テレビでは昨年からのアメリカの冷害によって米の供給量が需要を遥かに下回り、米価が以前国内だけでまかっていた頃の3倍にも跳ね上がるだろうというニュースをアナウンサーが深刻な顔で伝えていたが、今の克行にはそれはあまり重要なものには聞こえなかった。

（どうしたら……）

克行は麻美との約束の時間に遅れることにも気づかず、ただ呆然と立ちつくしていた。

死のクリスマスイブ・2

二

待ち合わせの時計台の下には、麻美だけでなく多くのカップルたちの姿を見ることが出来た。そのなかでも麻美は一際目をひく存在のように思われた。それともこれはその場に存在しているカップル全てがお互いをそう思っているのだろうか。

「どうしたのよ、あれほど遅れないように言っただでしょう」

麻美は三十分ほど遅れて待ち合わせの場所に現れた克行を見るなり怒ったようにふくれてみせた。丸い童顔に流行にとらわれないショートカットの髪、それに紺のコートが手伝い、とても二十四歳には見えない。以前にも学生と間違われたと言って喜んでいたこともあったほどだ。

五十嵐麻美とつき合うようになってからすでに二年がたとうとしていた。麻美は人材派遣センターに登録されており、克行がよく伺う顧客先に彼女が派遣されていたことをきっかけに知り合い、つき合うようになった。

麻美の全てを克行は愛していた。今では克行にとって最も大切な人ということが出来る。ただ一つ難点をあげるとすれば、それは麻美が飼っている猫のことかもしれない。どこから拾ってきたかわからないような黒猫のルシファー。決して猫が嫌いなわけではないが、あの野性を離れ人間に媚びて生き、それでいて人の顔を見るとベッドの下へ潜り込むような陰しさが克行には妙に気に入らなかった。あのルシファーの青い目を見るたびに心の奥底を覗かれるようなそんな不気味さがあった。

今、麻美のそばに当然ルシファーはいない。それでも気分はあまり良いとはいえなかった。麻美の顔を見れば心もなごむのではないかと思っていたが、心のなかに広がった暗雲はそう簡単に晴れては

くれなかった。

「ごめん……」

軽い鬱病にかかってしまったかのように、克行は暗い顔で頭をさげた。特権者優遇計画のことが頭から離れない。

「どうしたの？」

麻美はその克行の様子に、心配そうに克行の顔を覗き込んだ。

「い、いや……」

克行は麻美に特権者に指定されたことを隠すつもりだった。なぜだか、そのことが麻美に知られれば二人の仲が終わるようなそんな気がしたからだ。

「でも顔色が悪いわ。風邪、治ったんじゃないの？」

「大丈夫だよ。さあ、行こう。映画に遅れるだろう」

すると麻美は――

「あ、実はそれ嘘なの。本当は三時半から。きっと克行のことだから遅れてくると思って早めの時間を伝えといたの。だから本当はまだちよっぴり時間があるの」

そう言って克行のジャケットの袖をそつと摘んで、いたずらつ子のような笑みを浮かべた。

「酷いな。そんなに遅れちゃいないだろう。時間までどうするんだ？」

「どこか喫茶店で休んでいきましょう。そうすればちよっぴいね。克行もそのほうがいいでしょ？ 映画までは元気になって、ちゃんと観られるようになってね」

麻美は克行の体にもたれかかると、克行を引っ張るようにして歩き出した。克行はそんな麻美を見つめながら、自分が特権者に指定されたことを麻美が知ったらどう思うだろうとしきりに考え続けた。

そんな克行の元氣のない様子に、麻美は口にくそ出さないものの密かに不安なものを感じているようだった。

二人は麻美の言うとおりに喫茶店で少しの間時間をつぶすと映画

館へと足を運んだ。最近、仕事のほうがあまりに急がしすぎて好きな映画を観ることもなかったので、克行にとっては映画館に足を運ぶのも久しぶりだった。だが、映画を観ながらも、どうしても克行は今朝の通知のことを忘れることが出来なかった。スクリーンと自分の間に常にあの白い用紙に印刷された文字がちらついて見える気がした。

『——今年のみごとあなたが特権者として——』

そんなもの俺は望んじやいない。

映画を観ている間中、克行はこれから自分がどうなってしまうのだろうという不安に取りつかれていた。

「克行、どうしちゃったの？ やっぱりなんだか今日はいつもと様子が違うわ。何かあったの？」

映画が終わったあと入ったレストランで、麻美はまじまじと克行の顔を見つめた。すでに六時を過ぎ、外は暗くクリスマスシーズンにだけ光る街路樹に付けられたイルミネーションが美しく街を彩っている。

「そうかな……べつに何もないよ。最近忙しかったからちょっと疲れてるだけさ」

克行は麻美が不思議がるのを避けるようにつぶやくと食後のコーヒーに手をのばした。実際に自分の今日の態度がいつもと違っていることは克行も気がついていていた。けれど、それを隠そうにも今の克行には隠しきれなかった。それほどまでにあの通知は克行の心をしめていたのだった。

（どうしてあんな一枚の通知のために俺はこんなに苦しまなきゃいけないんだ！）

不安で微かに苛立っていた。

「それならいいけど……仕事そんなに忙しいの？ 来週はともかく、再来週はちゃんと予定空けといってね。仕事で会えないなんてこと言わないでね」

克行の心を解きほぐすそうとするかのように麻美はしきりに冗談

めいた口調で喋り笑顔をみせる。

「再来週？ 何かあったつけ？」

「やあね。冗談のつもり？」

「え？」

「クリスマスじゃないの」

美しい夢を見る少女のような口ぶりで麻美はつぶやいた。けれど、そのつぶやきさえも克行の耳には恐ろしい呪文のように聞こえ思わずギクリとした。その日こそが「特権者優遇計画」のメインともいえるフィナーレとなるのだ。人々はクリスマスの華やかさに心を奪われ「特権者優遇計画」などのことなどまったく忘れ去り、そして知らず知らずに何人もの特命者たちが凶弾に倒れることになる。

まるで――

（鼠取り！）

このクリスマスのきらびやかな光が餌になるわけだ。今更ながらにクリスマスを利用する国のやり方に腹がたった。

「そうだね。もうすぐクリスマスなんだね」

弱々しく呟く克行を不思議そうに麻美は見つめた。

「どうしたの？ 本当に今日は変よ。クリスマスに嫌なことでもあるの？」

「いや、そうじゃないけど。ただ、今日部屋を出るときにちょっと嫌なニュースを見たんだ」

「嫌なニュース？」

「特権者優遇計画さ」

さりげなく言った克行の言葉に、さすがに麻美も少し表情を曇らせた。

「そう……そうね、もうすぐその季節だったわね」

特権者優遇計画のことを知らない者は世の中に誰一人としていないだろう。だが、誰もが極力口に出さないようにつとめているし、実際にはその当日まではほとんどの人たちが忘れてしまっている。また、もし口に出すことがあったとしても、単なる話題の一つとし

て喋るだけで、決してそれに対しての不平不満を語ろうとはしない。いつどこで誰がその話を聞いているか、そしてまたいつどこで自分が特命者リストに載るか分からない。そんな恐怖が知らず知らずのうちに心を支配しているのだ。克行も麻美も昨年まではそんな中の一人に過ぎなかった。

「何人くらいが対象になるんだろうな」

克行の何気ない言葉に麻美はびくりと体を震わせた。克行自身その言葉が特権者に対するものなのか、それとも特命者へのものなのかわからなかった。

「やめてよ、怖くなっちゃうじゃない」

そう言った麻美の顔が克行には少し青ざめているように見えた。

無理に笑顔をつくろうとする麻美が愛らしく見えた。

克行はそんな麻美の顔を見つめながら、ふとつぶやいた。

「もし僕が特権者に選ばれたとしたら……どうする？」

言ってしまうのか？ 言っても少しも心の重みもとってしまいたい。克行の心の中にそんな衝動が走った。

「克行が？」

麻美は驚いたような目で克行の目をじっと見つめた。その目はひどく怯えていた。コーヒーに砂糖をいれようとする彼女の手がぴたりと止まった。

「例えばの話だよ」

「例えば？」

「そうさ、実際にそんなことあるわけないだろう」

麻美の怯えたような態度に克行は真実を語るのを避けた。あえて麻美に伝える必要はない。ほんの一週間のことだ。麻美を不安にさせる必要などない。何とか自分一人で全てを解決してみせる。

「やだ、そんな冗談言わないでよ。そんな話しても仕方ないわ。またいつもみたいに知らないうちに過ぎてゆくわよ。もうやめましょ、その話は」

麻美は再び笑顔をつくると話題を別のほうへもっていった。

（俺だってそう思いたい。だけど、今年だけは去年までのようには
いかないんだ）

克行は麻美の話に耳を傾けながらも心はいつまでも離れることが
出来ないでいた。

死のクリスマスイブ・3

三

十二月 十一日 (月)

「あなたたちは非常に大きな任務を与えられたのです!」

市長は特別会議室の演壇に立ち、大きな体を震わせながら演説を続けている。暖房がやけに効いているせいか市長は体中から汗をふきだし、それはまるで鯨が潮を吹いているように見えた。

克行はそんな市長の姿を眺めながら、子供の頃に深夜のテレビで観た「白鯨」という映画を思い出していた。

特別会議室には内側からしつかりと鍵がかけられ、市の関係者と特権者以外は出入りが許されないようにされている。学校の教室程度の特別会議室のなかには克行を含めて、三十名ほどの特権者が長机を前に座っている。ただし、実際にはここ以外の場所でも同じような説明会がされており、全ての特権者がここにいるとは限っていないかった。ほとんどの者がその市長のつまらない演説にあきあきしたような顔をしながら市長の演説が終わるのをじっと待っていた。

克行はこれが終わりしだいに会社へ行くつもりで、いつものようにベージュのスーツを着て出席していた。もちろん会社へは遅れる本当の理由を伝えてはいない。体調がすぐれないため、病院に寄ってから出社すると既に連絡済だ。

「この政策はこの日本を、そして世界を救済するために設けられたものです。つまり、あなたたちは世界を救済する者として選ばれたのです!」

ヤニで黄色くなったような歯を剥き出しにしながら、市長のお世辞にもうまいとはいえない演説は続いた。

(よくこれで選挙に通ったものだ)

克行は冷やかな目で市長の姿を眺めていた。多少の緊張感はあるが、不思議とそれほどコチコチになるほどではなかったし、昨日通知をもらった時ほどの不安も感じてはいなかった。特権者といってもしょせんただの権利に過ぎない。権利を放棄することで翌年すぐに特命者にされるというのも、根も葉もない噂かもしれない。克行はなるべく楽観的な考え方をするように務めた。ただ、市長の演説を聞いているうちに体のネジがきしんでくるような感覚に襲われていた。そこで、克行は出来るかぎり市長の声を聞かないように心がけながらそつと他の特権者たちを盗み見た。

スーツ姿の四十過ぎのサラリーマン、まだ大学生らしい若者、いったいどんな方法で選んだのだろうと思うほどさまざまな人々が集まっている。

みんな、どんな思いでここに集まっているのだろうと克行は思いめぐらせた。だが、どんな思いであろうとここに集まった者たちはみな、殺人者となる可能性を持っていることだけは確かだ。もちろんそれは合法的なものとしても、それでも人を殺すという行為に違いはない。

ここににいる人たちは皆本当に人を殺すことになるのだろうか。

窓際の前の席に座っている若者が市長の演説に抗議するつもりなのかあからさまにあくびをした。だが、市長はいつこうに臆した素振りもみせず、淡々と演説を続けている。その市長の態度に以前聞いた噂を思い出していた。

——あの市長はずうずうしさだけで選挙に当選したのさ。あいつが市長になりたい一番の訳は特権者優遇計画を自分の思いのままに操りたいからなんだ。それにな、ここだけの話だが特権者の数は国から指定されることになってるんだ。けど、毎年決まって市から指定される特権者はそれよりも一人少なくなってる。なぜかわかるか？つまり、あの市長が自ら特権者になるってことだ。

（なるほど……）

克行は改めて市長を観察した。あの時はまさかと思ったが、この

市長ならばありえる話だ、と克行は市長の狂喜とも言える熱意のある演説を聞き思った。

「この世界を救って下さい！ 人々を救って下さい！ それが出来るのはあなたたちだけなのです！」

突然、市長の叫び声とともに演説が終了した。誰一人として拍手をしようとはしなかったし、市長もまたそれを期待しているようではなかった。

市長が満足そうに演台から下りると、すぐに傍らで待機していた市職員の一人が入れ代わった。

「では、これより「特権者優遇計画」を実施するにおいて、規則、注意等について説明をさせていただきます」

牛乳瓶の蓋のような分厚い銀斑の眼鏡をかけた職員は、そう言うてから一度特権者たちをぐるりと見渡した。気のせいかなその目は克行のところではほんの一瞬だけ止まったように思えた。その姿は一種独特な不気味な雰囲気を持っていた。

「まず、みなさんがたの席の前に置かれた封筒を開けて下さい」

市職員の指示に従い特権者たちは自分の前にある封筒に手をかける。

克行もみんなに習い封筒を手にとった。封筒の膨らみで封筒の中身は想像がついていた。紙包みでくるまれた拳銃がそのなかから姿を現す。実際に取り出してみるとそのずしりとくる感触が妙に生々しい。もちろん拳銃を手にするのは初めてのことだ。

「みなさんが手にしているのは今年使用されることになったK-9-6Mという型の拳銃です。これは毎年、ある限定された数だけ国によってこの特権者優遇計画のために作成されたもので、これにあう弾丸も支給されるものしかありません。以前にも特権者として登録され弾丸を残されているかたもいるかと思いますがそれらは使用出来ませんのでご注意ください。弾丸は後ほどみなさんが退出する時に各々六発づつ支給します」

まるでテレビショッピングのコマーシャルでもするようにあっさ

りと市職員は説明し続けた。

「この拳銃ですが、これは実に簡単な操作で実に正確かつ十分なほどの威力があります」

そう言うのと職員は突然、サンプル用の拳銃を構えたと部屋の隅に用意された人形の頭めがけ引き鉄を弾いた。弾けるような火薬の音と共に弾丸が放たれ、人形の頭を吹き飛ばした。その爆音に特権者たちの何人かがびくりと肩をすばめた。

「実際にはこのように人の頭を吹き飛ばすほどの威力はありませんが、それでも殺傷能力は十分にあります」

（つまりそれだけ簡単に人が殺せるということだろう）

克行は心のなかでそう罵った。

「次に規則について説明します。封筒のなかにさらにもう一つ黄色い封筒がありますので出して下さい。ありましたか？それが今年みなさんに配布される「特命者リスト」です。決して他の人には見せないようにして下さい」

さすがに手が震えた。自分の手のなかに、これから最優先で殺される人々の名簿があるのだ。

「特命者は一人につき、およそ五人の特権者のリストに名前を載せられています。同一の特命者に対して五人の特権者ということで行時にダブルではないかと危惧されるかと思いますが、一人の特権者のリストには三十人の特命者が名前を連ねているのですから、そうそうダブルことはありません。もし、自分のリストに載っている特命者が無事、この世から削除されましたら皆さんのリストでもこまめに削除して余計な手間のかかるようなことを避けるようにして下さい。なお、これは言わずとしたことですが、このリストの中身についての口外は一切禁止します。もしも、それを破った時にはその人にはしかるべきペナルティが与えられることになります。厳重に注意して下さい。また、その他の規則についてですが――」

市職員はさらに続けた。だが、克行の頭のなかにはさらなる規則の説明よりも、特命者リストのことが頭にひっかかっていた。特権

者のほとんどはすでに封を開け、なかのリストを取り出して見ている。なかには何が楽しいのか笑みを浮かべている者さえいる。

克行は封筒を手にすると思いきって中のリストを取り出した。ざらざらとしたあまり良質とはいえない白い紙に印刷された名前が縦に並んでいる。克行はその名前の列を読みながら、自分の顔から血の気がひいていくを感じた。

（なぜこんな……こんなことって……どうなってるんだ！）

今にも叫び出したいようなそんな苛立ちにも似た恐怖感が克行を襲った。まるで自分一人だけが群れから取り残され、どこか遠い世界に消え去ってしまうようなそんな感触に包まれているような気がしていた。

克行は震える手で必死にリストを押さえながら回りの特権者たちの行動を見回し、それからもう一度視線をリストへ向けた。

そこに書いてある名前の半数は、克行の見知った者たちだった。会社の同僚、近所の老人、そして……そして何よりもシヨックだったのはそこに恋人である五十嵐麻美の名前があったことだった。

楽観的に考えようとしていた気持ちなど遠くへふつとんでしまい、代わりに大きな恐怖が押し寄せていた。全身の毛穴から汗が吹き出している感じがした。

克行はその欄を何度も何度も見直した。ひょっとしたら見間違いないかと思い、同姓同名の別人であることを祈った。しかし、そこに書いてある名前に間違いはなく、住所、そして職業ともに麻美本人と認めるほかなかった。

（なぜ……なぜ麻美がリストのなかに……なぜだ？）

克行は運命を呪った。自分の手のなかに恋人の命がある。しかし、もつと恐ろしいのは麻美の名前の入ったリストをあと少なくとも四人の特権者が握っているということだ。もし、克行のリストにだけ載せられているのなら麻美に危険はない。だが、克行以外にも四人の特権者が麻美を狙うことになる……。しかも、麻美の名前の載ったリストを持っているのが今ここに集まっている者たちだけとは

限らない。特命者リストはあくまでも政府からの依頼でしかなく、特権者には実際には対象を自由に選ぶことが出来るのだ。

(どうしたら……俺はいつたいどうしたらいいんだ……)

克行の頭のなかに麻美の姿がちらついた。麻美の愛らしい笑顔、あの笑顔がこの世から消える……。そう思うたびに克行の心はかきむしられるような苦しみに襲われた。

「あんた、大丈夫かい？」

隣に座っていた三十過ぎの男が克行の顔を覗き込んだ。だが、その顔は決して心から克行のことを心配してはいない。ただの興味本位でしかないことはすぐにわかった。克行は慌ててリストを封筒のなかに突っ込んだ。

「い……いえ……」

「あんた、今年が初めてなんだろう」

男はにやりと笑って言った。その男の落ち着いた素振りに克行は不思議そうに男を観察した。

黒いダブルのスーツに黒のネクタイ、まるで葬式に行くときのような格好だ。

「俺は立花勇作ってんだ。よろしくな」

男は名乗って左手を差し出した。

「え？」

「えっじゃないよ、ただ名乗ってるだけだ。別に特権者同士が名乗りあっちゃいけないって規則はないだろ。さあ、握手だ」

立花は克行の手を取ると無造作に握手した。それは握手というよりも一方的に克行の手を振り回しているというほうが近かった。

「で、あんたは？」

「風間です。なぜ僕が初めてだとわかったんですか？」

「そんなの一目でわかるさ。そんな拳銃おもちゃを握って震えてるなんて、初めてに決まってるじゃないか」

「あなたは何回目なんですか？」

「俺かい？ 俺は三度目さ」

立花は自慢げに答えた。

「そうですか、それじゃ拳銃のほうも慣れてるんですか？」

「慣れてるよ。けど、俺はもともとそういう仕事なんでね。慣れるのが当然なんだ」

「仕事？」

「警察官なんだ」

「警察官？」

克行はどきりとして立花を見返した。人々の治安を守るべき警察官が殺人者の予備軍として克行の目の前に座っている。そのことに克行は不気味な感じを抱いた。

「変かい？ 警察官が人を殺すのは。だが、特権者優遇計画ってのは別にどんな仕事をしていようがそれなりの資格がありやあ特権者になってもいいものなんだぜ。警察官だろうが医者だろうが、それこそ政治家だろうが……」

立花はヒヒヒと薄きみ悪く笑うとじろりと辺りを見回した。「見なよ、現にあつちのは医者だぜ。それにあつちのは学校の教師とくらあ」

立花は一人一人克行に説明していく。克行もそれに合わせて一人一人顔をじっくりと眺めていった。やけに神経質そうな者もいれば、自分の置かれた立場など気にも止めていないような態度でぼんやりと窓の外を眺めている者もいた。だが、ここに集められた特権者たちはどこか、一種独特な雰囲気を持っているように克行は感じた。（このなかに麻美の名前の入ったりリストを持っている者がいるかもしれない。ひよつとするとこの男が……）

克行は思いをめぐらせ、一人一人の顔をしっかりと覚え込むように心がけた。

「どうだい、こうやって見てるとなかなか面白いだろう。俺なんかここに来るだけでもう嬉しくなっちゃう」

「嬉しい？」

「そうさ。なんといつても天下御免で人を殺すことが出来るんだぜ。

そんな楽しいことはないじゃないか。それに人間、死を間近にすると心が表に出るのさ。普段見ることの出来ない人間の浅ましさがつくり眺めることが出来る。こいつぁ、どんな芝居よりも面白いぜ。赤の他人が死ぬのにどうして躊躇する必要がある？」

「けど、特命者リストには――」

「特命者リストには自分の知らない人間しか載っていない。もちろんリスト以外の人間を殺すのも特権者の自由だがね」

克行は立花の言葉に一瞬啞然とした。

「それ、本当ですか？」

「何が？」

「本当に知らない人の名前しか載らないことになってるんですか？」

「そりゃそうさ。いくら何でも顔見知りの名前は載ってないだろう。そんなことをしたらさすがに殺しをためらう奴も出てくる。もちろん俺は別だがね。なんだ？ あんたのリストには知り合いの名前でもあるのかい？」

「……い、いえ」

克行は口ごもりながらも答えた。自分のリストだけがなぜ他の特権者たちと違うのかそれはわからない。だが、この男に克行の置かれた立場を知られたくはなかった。

「なら問題はない。一人くらい顔見知りが入っていたところで三十人のうちの一人だ。気にすることなんかない。もし、他に殺したい奴がいるなら別にリストに載ってなくなつて構わない。殺つちまえばいい。ただ、そうなると来年は特権者になりそこなうかもしれないがね」

立花の言葉はまるで市の圧力そのものに感じられた。克行は言葉を返すことも出来ず汗ばんだ手でリストを握りしめていた。

死のクリスマスイブ・4

四

全ての説明が終わったのは十一時を少し回った頃だった。市長の演説分だろうか、予定よりもほんのわずかながらオーバーしている。特権者たちは皆それぞれ茶色の封筒を片手に市役所を後にした。

克行は足取りも重く、ゆっくりと会議室を出た。誰かにリストのことを問いただしたかった。だが、そんなことが出来るはずもないし、聞くことも怖かった。

（「だから何の問題があるというんです？ あなたは特権者でこの女は特命者選ばれた。あなたはこの女を殺さなければいけないんです！」）

もしそんなことになったら……。

会議室から市役所のロビーまでは十六段からなる階段四つと二十メートルたらずの廊下でつながっている。そのあちらこちらに大理石のテーブルが置かれ、その上に花が飾られている。

（何て嫌味な……）

克行はその花全てをひっくり返して歩きたい衝動に刈られた。花は今日に限ってか全て真っ赤なバラで統一され、その色は克行にどす黒い血の色を連想させた。

克行はなるべくその花から視線を逸らしながら、とぼとぼと出口の方向へと歩いて行った。頭の中は今カバンのなかに入っているリストのことについてになっている。ふと、どこからか誰かを呼ぶ声が聞こえてきたような気がした。だが、そんなことなど今の克行にはどうでもいいことに思えた。

「克行！」

声はもう一度克行の耳に届き、克行もやっとそれが自分と呼ぶ声だということに気づいた。振り返るとベージュのスーツを着た若い

女性が走り寄ってくるのが見えた。その姿に克行は思わず驚きの声をあげた。

「涼子……」

三浦涼子とは大学時代に一度つき合っていたことがあったが、卒業以来一度も会っていなかった。

「久しぶりね」

涼子は軽快な足取りで走り寄ると懐かしげな視線を克行に向けた。長い髪がさらりと肩口で揺れている。

「どうしてこんなところにいるの？」

克行は涼子を見つめて言った。初めて見る涼子のスーツ姿がやけに大人っぽく感じられた。

「働いてるのよ」

「働いてる？　ここで？」

克行は驚いて涼子を見つめた。涼子はもつと野心家だったはずだ。役所で事務員をやっているということは涼子には似合わないように思えた。

「そうよ。私らしくないかしら」

克行の心を読んだかのように涼子はクスリと微笑んだ。「それよりも克行こそどうしてこんなところにいるの？」

「……」

克行は何と言っているかわからず目をキョロキョロさせた。その克行の様子にさすがに涼子も気づいたようだった。

「まさか……克行が……？」

「ああ……」

克行はなるべく涼子の目を見ないようにして頷いた。涼子もまた市の職員だということが克行の心を暗くしていた。涼子もまた、そんな克行の心中を察したのか言葉を選ぶかのように視線を動かして誰にも見られていないことを確認するように周囲を見回した。それから、思いついたように克行の目を見据えると言った。

「ねえ、克行、今時間ある？」

「時間？」

「うん、ちょっとつき合つて欲しいの。どっかでコーヒーでも飲みながら話でもしない。克行と会うのも久しぶりだしね」

その言葉の裏に克行は涼子が何を話そうとしているのかすぐにわかった。

「いいよ、少しくらいなら。おまえのほうはいいのか？　まだ仕事じゃないのか」

「もう十一時を回つてゐるわ。もうすぐお昼じゃない。どうせお役所仕事だからさほど忙しくもないし、それに他の仕事と違って仕事に期限がないようなものよ」

涼子はそう言つて笑つた。その笑顔に克行は彼女の暖かい心づかいを見てとれた。

克行と涼子の二人はそのまま市役所を出ると少し市役所から離れた喫茶店に入った。市役所の近くの店には入りたくないと言子がい、克行もまた同じように思つたからだ。ただ、その涼子の言動は克行にはひどく危険なように見えた。

涼子はそこでコーヒーとサンドイッチを、克行はコーヒーだけを頼んだ。まださっきのことが頭にこびりついていて、とても食事をする気にはならなかった。

「それにしても本当に久しぶりね」

涼子は改めて克行の顔をじつと見つめ直した。その潤んだ瞳はつき合つていた頃とまったく変わつていない。それだけに克行はその涼子の眼差しがつかく感じられた。涼子と別れたのは彼女のことを嫌いになつたためではなかった。ただ、まだ若かつた克行にとって涼子のひたむきな愛が重荷に感じられたのだ。

「……うん」

「それで？」

克行の思いを察したかのように涼子はすぐに話題を変えた。

「……うん」

どう話していいものか克行は迷つた。

「特権者に選ばれたんでしょ」

「先週通知が届いたんだ」

「どうして克行が選ばれたんだろう」

涼子はまじまじと克行を眺めた。

「俺にもさっぱりわからない。確かに俺は刑事事件を起こしたわけでもないし、市や国に反することをやってるわけじゃない。でも、別段模範市民ってこともないと思うんだが――」

「そうね。本来なら――というより、去年、私が委員をやった時なら克行は決して特権者になんか選ばれる立場じゃなかったと思うんだけど」

「委員をやってた？」

「そうよ、去年だけだけどね。ちょっとしたお手伝いみたいなものよ」

軽く笑って答える涼子の様子に克行は時間の流れをひしひしと感じた。

「それじゃ選定方法が変わったのか？」

「さあ……」

涼子は一つサンドイッチを取り上げ口に運んだ。

「おまえはどうして今年は特権者計画実行委員にならなかったんだ？」

「つまらないのよね……」

「つまらない？」

「そう、私は国の中枢で働きたかったの。いろいろ手を回したんだけど駄目だったの。だから仕方なく市役所に入ったんだけど。特権者優遇計画って国からの指示によるものですよ。うまくいけばどこかの国家機関に入れるんじゃないかと思って志願したの。でもやってみたら全然そんなチャンスもなかったわけ」

「それじゃ辞めればいいじゃないか」

克行はインスタントじゃないかと思えるほど粉っぽいコーヒーを口にしてから言った。すると涼子はいとも簡単に答えた。

「うん、私も今それを考えてる」

あまりに簡単な返事に克行は驚きの目を涼子に向けた。

「本当か？」

「本当、もうほとほとあんな市役所なんか嫌になっちゃった。別に仕事が嫌いなわけじゃないの。仕事は楽だし給料だって悪くない。ただ上司とうまういかなきゃ先だって見えてるようなもんでしょ」

「そう……」

「でも辞めるって決めたら楽になっちゃった。やっと私も自由になれるわ。ただ——」

涼子は突然表情を厳しくした。

「ただ——」

「心残りが一つ出来たわ」

「出来た？」

「克行のこと」

「俺の？」

「克行が特権者に選ばれるなんて……まったく思いもしなかった」

「そんなおまえが心配するようなことじゃない。いくら特権者に選ばれたからって何もその権利を絶対に使用する必要はないんだ。特命者にならないだけ良かったんだ」

克行は自分の心のなかにある不安すらも吹き飛ばすよう、わざと明るく振舞おうと試みた。だが、涼子はいっこうに表情を崩そうとはしない。それどころかますます表情を固くする。

「本当にそう思っているの？ 本当にそれで済むと思っているの？」

「どういうことだ？」

「克行が特権者に選ばれるなんてどこか間違ってる。今年の特権者優遇計画は去年とはまるで違う」

涼子の目は真剣そのものでさっきまでの表情とはまるで違っていい。克行は突然、思いもしない恐怖にさらされているような気持ちになった。

「それじゃ、おまえは俺が特権者に選ばれたのはどんな意味がある

って言うんだ？」

克行は声を潜めて尋ねた。「特権者」という言葉を発するたびに自分自身に何か悪いことが起きるような気がしたし、さらに店のウェイトレスや客に聞かれたくなかった。

「それがわからないのよ。だからこそかえって不安になる。そもそも「特権者優遇計画」なんてものは間違った政策よ。それが毎年のように行われる。しかも国民のほとんどが知っているようでまるで知っていない。そんなものの裏にまともなものが潜んでいるわけないでしょう。それに私がそう思うのはもう一つ理由があるの。実はこれは噂なんだけど、特権者優遇計画の上でクーデターみたいなことが起きたらしいの。もしかしたらそれが影響しているのかもしれないわね」

確かに涼子の言う通りかもしれない。克行は特権者に選定される通知をもらってから得体の知れない不安にかられていたが、涼子の言葉を聞きその不安の姿が一部見えたような気がした。

「これを見てくれないか」

克行は涼子に全てを打ち明けようと思い、今日手渡された書類をテーブルに出した。

「これって特命者リストじゃないの」

「そうだ、こいつは俺が受け取ったリストだ。よく中を見てくれ。俺は今日同じ特権者に選ばれた男から少し特命者について聞いた。その男が言うには特命者というのは特権者にとってまったくの第三者的な人間が選定されていると言うんだ。つまり知り合いがリストのなかにいるはずがないって」

「その通りよ。まったく知らない人間ばかりというわけじゃないかもしれないけど、それでも直接的な知り合いと思われる人間はリストのなかには入れないことになってるわ」

「ところが、俺のリストのなかに入っている特命者の半数ほどは俺の直接的な知り合いなんだ」

「何ですって？」

思わず涼子が驚きの声をあげ、その声に店にいた人々の視線を集める事になった。涼子はすぐに声のトーンを低くして喋り始めた。

「知り合いが？ そんなはずないわ。有り得ない」

「本当なんだ。その有り得ないことが、俺のリストのなかには起こってるんだ。同姓同名ってことも一瞬考えた。だが、全員調べたわけじゃないが住所や職業、電話番号、どれを見てもそれは俺の知っている人なんだ」

克行の心のなかに麻美の姿があった。自分の持つ特命者リストのなかに麻美が入っている。そんな悪夢のような出来事から早く逃れたかった。

「……やっぱり何か間違ってる」

涼子の目がぼんやりと遠くを見つめるようになっていた。

「涼子？」

「いいわ」

突然思い起こしたように涼子の視線は克行を捕らえた。

「どうしたんだ？」

「三日だけ待ってちょうだい。その間に私が調べてみる」

「調べる？」

「ええ、おそらく今年も特権者優遇計画に関する資料は、パスワードくらい変わっていても去年と同じディスクに入っていると思うわ。調べるくらいわからないわ」

「だけど、おまえ今年は実行委員からはずされただろう。そんなことしても大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。少しくらいディスクのなかを見たってバレやしないわよ。それにバレたところで何てことないわ。どうせ市長に恨まれたところで特命者リストに加えられるだけじゃない」

冗談交じりに涼子は言った。克行は驚きの目で涼子を見た。しかし、涼子のほうはまったく動じることなくニッコリ笑うとおもむろにバッグを開いて中を見せた。バッグの奥に何か黒い金属の固まりが見えた。

「それ……」

「スタンガン、FBC2X、克行も名前くらい知ってるでしょう」
克行もそのスタンガンのことだけは知っていた。見たことはないが聞いたことはある。三年も前に売り出されたものだが、売り出されてすぐにある事件にこのスタンガンの名前が出たことがある。事件そのものはどこにでもある婦女暴行事件だった。深夜、帰宅途中のOLが近所の大学生に襲われそうになったというものだった。だが、結末は他のものとは違っていた。襲われそうになった女性がこのスタンガンを持ち歩いていたのだ。スタンガンは通常のものよりも三倍もの電流が流れるようになっており、さらにその電流の発せられる部分はバネ仕掛けで目標に向かって十メートルは飛ぶようになっていた。あいにく夏の暑い時期で大学生はTシャツ一枚という姿だった。その裸同然の心臓部分にスタンガンは噛みつき、一気に電流を放電したのだ。大学生は一瞬のうちに硬直状態になり、騒ぎに駆けつけた住人によって救急車で運ばれたがそのまま目覚めることはなかった。あまりにも強力なそのスタンガンはその事件で社会的な問題にもなったが、その反面女性の強力な味方として人気を得ることになった。結局、スタンガンは改良され通常のもの二倍程度の電流に押さえられることになった。

今、涼子の持っているものは改良後のものではなく、旧式のもののように克行には見受けられた。

「おまえ、いつもそんなもの持ち歩いてるのか？」

「いつもじゃないわ。特権者優遇計画を実施期間中だけ、職員には皆これが配られることになっているの」

「何のために？」

「市で選んだ特権者に逆に命を狙われないためよ。私もまだこんなもの使ったことはないけど。いくら何でもこいつを使うことにはならないでしょう」

「本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫、そうすれば克行がなぜ特権者に選ばれたのか調べられる」

「それならもう一人調べて欲しい人がいるんだ」

「誰？」

「特命者リストにある五十嵐麻美、彼女がなぜ特命者になったの調べられないかな」

言い出しづらかったがそれでも言わないわけにはいかなかった。

危惧した通り麻美の名前に涼子の顔がこわばった。

「誰なのこの人？ ひょっとして克行の恋人？」

「……うん」

二人の間に一瞬冷たい空気が流れた。一瞬、涼子がきつく唇を噛んだのが見えたが、それでも何も深くは聞こうとはしなかった。

「いいわ、そのリスト、今夜にでも私のところにファックスで送って」

涼子は克行から視線をそらすとポケットから名刺を取り出すとその裏に自分の携帯電話の番号と、ファックスの番号を書き込んだ。

「頼むよ」

克行はその名刺をクリップで特命者リストにはさむと書類といっしょに封筒のなかに入れた。

死のクリスマスイブ・5

五

克行がマンションに戻った頃にはすでに昼を過ぎていた。市役所に寄った後、そのまま会社へ向かうつもりでいたが、今ではそんな気持ちも失せてしまっていた。自分の持つ特命者リストのなかに、会社の人たちも数名載っている。彼らにどう対応したらいいかわからなかった。それに何よりも拳銃を持ったまま仕事をする気にはならない。

克行はコートを着たままダークグレイのカーペットへ腰を降ろした。まだエアコンがきいていないために、部屋の空気もカーペットもひんやりとしている。

克行はバッグのなかから書類を出してテーブルの上に広げた。拳銃の入った包みがコトリと音をたてて落ちる。

そつと包みを開くと黒く真新しい小型の拳銃が姿を現した。見た目は玩具の拳銃と変わらないのに、実際に握ってみるとそのずしりとくる重さで、それが玩具などではないと改めて実感させられる。弾倉にはまだ弾は装填されていない。試しに拳銃を操作してみると思った以上に扱いが簡単に出来ていることに驚いた。説明書のようなものが一枚封筒に入っていたがそれを読まずとも扱うことは出来そうだった。

見ると小さな透明のプラスチックのケースに金色の弾が六発、綺麗に並べられて入っている。一つ一つには丁寧なナンバーがふられている。克行の弾丸にはTR13-TX-60001から60006までのナンバーが刻まれている。このナンバーによって、誰が殺したものが判断するためなのだろう。

（まるで小学校の時の無記名アンケートと同じだな）

克行は心のなかで嘲った。

克行が今でも憶えている小学校の時のアンケート。それは教師が子供たちに無記名だということをくどいほど説明した後、結局は席順ごとに並べて回収されるという卑怯な手段のものだった。そしてそれは子供たちが秘密にしておきたいものに対してほど行われた。もちろんそれが実行出来たのは低学年のうちだけだったが、それでも克行はそのからくり気づいたとき教師に対して強烈な不心感を抱いたことを今でも憶えている。

克行はケースのなかから一つ取り出し、試しに一発だけ弾倉に装着してみた。ガチャリという音で弾倉が拳銃の中心に吸いこまれてゆく。まるでそれを待つていたかのように。この型の銃は外側からは弾の有無を判断することは出来ない。

何の気なしに部屋の隅の花瓶に狙いをつける。ふと、妙な感覚が心のなかに走る。そして、同時に今まで知らなかった自分が眠りから醒めるようなそんな不安が湧き上がる。

克行の瞼にヘラヘラ笑いながら楽しげに拳銃を乱射する男の姿が蘇った。

寺泉とか、泉谷とか、確かそんなような名前だったと克行は記憶している。

昨年の冬、克行が特権者優遇計画を初めてこの世のものと実感した時だった。深夜、仕事の帰りに克行は駅のホームで最終より二、三本前の電車を柱に寄りかかるようにしながら待っていた。ホームには克行と同じように仕事で疲れ今にも眠りこみそうにしている中年のサラリーマンや、デートの帰りらしいカップルがベンチに座りながら話をしている。少しして克行は泥酔状態でふらふらとホームの端から端を歩いている男が目に入った。男は電車を待つ人々に一々何かをつぶやきながら、ただふらふらと歩いていた。たいがいの人たちは男が何を言おうと何をしようと無視して構おうとはしなかった。男はベンチで身を寄り添わせているカップルにも同じように近寄り何かをつぶやいた。それはたんなるカップルに対する冷やかしのものだったのかもしれないし、あるいは女性に対して卑猥な言

葉でからかったのかもしれない。どちらにしてもさほどたいしたことでないことだろうと克行は見ていた。しかし、それに対し青年はからかわれたことに怒りを覚えたのかすつくと立ち上がり、そして泥酔している男に対して怒鳴り始めた。

「おまえには関係ないだろう！ どっか行け！」

青年の声は離れた場所にいる克行にさえ聞き取ることが出来た。周りの人たちはやれやれとばかりにぼんやりと横目でちらちらと見ている。

青年は二度、三度男を突き飛ばし男が黙っているとジロリと睨つけさつさと彼女のいるベンチへと戻って行った。

アナウンスが聞こえ電車が入ってくることを伝えている。

誰もこれで酔っ払いと青年との争いは終わったのだらうと思った。青年もすっかり深夜に出会った酔っ払いのことなど忘れてしまったかのようにベンチから立ち上がり入ってくる電車に合わせるようにホームで二人立っている。しかし、酔っ払いは真っ直ぐに背を向けている青年の背後につかつかと近寄ると何か黒いものをポケットから取り出し青年に向けた。

ズガン！

克行の目に、一瞬スローモーションのように写し出された。

青年の体はつんのめるように軽く前に浮き上がり、重量の法則に従いそのまま電車のはいつてくるレールの上へと落ちていった。

電車の急ブレーキ。

女性の叫び声。

そして、男のヘラヘラとした笑い声。

聞こえるはずのないもの、聞こえなければいけないものが交差しあいごちゃごちゃになって克行の耳へ届く。

男は青年を撃ったことで自制心を失ったのか、それとも酔っ払っていたことでもともと失っていたのか、触覚を失ったアリのよう

うろつろとつろつき、至る所に拳銃を乱射しはじめた。当然のように誰も男を止めようとはせず、逃げ惑うだけだった。克行も例外ではなくただ驚くばかりで何をすることも出来なかった。結局男は拳銃に装填されていた全部の弾丸を撃ちつくし、それでも撃ち足りないのか弾丸の入っていない拳銃を力チリ力チリと鳴らしているところを鉄道警備員に取り押さえられた。

男が特権者でそれがわかりしだい釈放されたということを、克行は翌日の朝のニュースで知ることになった。

本来、特権者優遇計画で犠牲（国に云わせれば受刑）になった者は被害者として扱われない。そのためマスコミでも事件として発表しない。しかし、この時はあまりにも事件が大きすぎたためにほんの二、三分だけが放送されることになった。それでもキャスターが淡々と、事件のことを報じた後でこれは事件ではないという意味のことを付け加えた。

男の名前は忘れてしまったが、男の顔だけは忘れることが出来ないでいる。

（今度あの男がどうなったのか涼子に調べてもらおう）

今の自分の姿がああ男の姿にだぶるようなそんな嫌なイメージが克行の頭を霞め慌てて弾丸を取り出すと銃をテーブルの上に投げ出した。

拳銃は軽く二、三回テーブルの上をクルクルと回ると銃口を克行のほうへ向けてピタリと止まった。それはまるで

（「おまえが撃たないのなら、俺がおまえを撃つてやるぜ！」）
と言っているようだった。

克行はすぐに銃をもとのように紙包みに包みどこにしまおうかと思索した。部屋には克行しかないのだから、どこへしまっても良かったのだがそれでも出来るだけ目につかない場所へ、そしてすぐに何かあったら手が届き忘れてしまうようなことがないところへ置いておきたかった。部屋の家具といったらほとんどが棚の類いで引き出しのあるようなものは一切見当たらない。部屋を見渡した結果

克行はベッドの引き出しへしまうことに決め、その一番奥へ拳銃を突っ込んだ。

（これで拳銃はいい、あとは……）

克行の目に市役所からよこされたいくつかの特権者優遇計画に関する書類が目についた。一番上に黒い厚手の表紙のついた特命者リストがある。

克行は恐る恐る手をのばし、もう一度リストを開いた。今度は市役所で見た時よりも一人一人じっくりと確認していく。確認のうえ別人であればいいと何度も思いながら確認していく。けれど、克行の祈りは通じることなくやはりその多くは克行の知った人々の名前だった。そのなかでも何よりも麻美の名前がひときわ大きく克行には見えた。そしてそれは他の特権者にも同じように麻美の名前が特に目立って見えるのではないかという錯覚さえも引き起こした。

（五人、俺をいれて五人の特権者が麻美の名前の入ったリストを持っている）

そのことが何よりも心配だった。もし、自分のリストだけに麻美の名前があつたなら何の心配をすることもないだろう。来年特権者を外されることを、最悪の場合自分の名前が特命者リストに載ることを覚悟すればいいだけの話だ。麻美に銃を突きつけられるよりも自分に銃を突きつけられたほうが数倍気楽でいられるだろう。

（だが、今年銃を突きつけられてるのは俺じゃない。麻美なんだ）

克行の心のなかには暗く、重々しい影が広がっていた。例えばそれが参考リストとはいってもリストに載っているのと載っていないのとは大きく違ってくる。

（何とか救えないだろうか）

克行は書類を袋から出し、その規則や条文を読み始めた。そのなかから麻美を救う手段をなんとか捜し出したかった。しかし、そこに書いてあるのは本当に簡単な今日あの分厚い眼鏡をかけた市職員が喋った以外のことは一切載っていなかった。確かに憲法のように

細かく規則が載っていたところで裁判に持ちこむことが出来るわけもなく、市に麻美の名前をリストから削るように進言することも出来ないだろう。一つだけ特命者のリストからの削除という項目があったが、それはまったく話にならない。特命者リストから外される条件は唯一その当事者が特権者優遇計画の直前に死を向かえた場合、または他の特権者によって受刑になった場合だけなのだ。いずれにしても特命者の未来にあるのは死だけしかない。一週間逃げ続けられればいいなどという考えも基本的に無意味な考えだ。なぜなら特命者リストに名前が載ったことは発表されるわけでもなく、また特権者が特命者に伝えたとその特権者は処罰（内容は不明）されることになっている。

（処罰？）

克行の心にある一つの思いが走った。

（処罰？ そんなものくらいで麻美が救えるのなら……。それに特命者全員は無理だとしても麻美だけならば伝えたところで市役所にばれることだってない。そうだ、麻美に特命者リストに入っていることを伝えて一週間特権者から逃げればいいんだ）

それはごく単純な考えかただったが、暗闇のなかを暗中模索してきた克行にとって一筋の光となって未来を照らしているように思えた。

R R R.....

突然、携帯電話の電子音が部屋中を満たした。部屋はすでに暖まり少し暑くさえ感じ出している。克行は思い出したようにコートを脱ぐとベッドへ投げ出し、その手で上着のポケットのなかから携帯電話を取った。

「はい」

——風間さんですか？

会社の後輩である磯崎和歌子の声だった。

「ああ」

——体、大丈夫ですか？

「体？」

——医者に寄ってから出社するって言ってましたけど。休まれるんですか？

磯崎和歌子の言葉に克行は具合が悪いと嘘をついたことを思い出した。時計を見るともう一時を過ぎている。

——もしもし……あの、そんなに悪いんですか？

克行の下で働いていることもあってかその声は本当に心配しているようだった。

「いや、そんなこともないけど……でも念のため今日は休ませてもらうよ」

実際に熱があがってる気がした。

電話をしてきたのが彼女でよかったと克行はほっとしながら答えた。彼女の名前はリストのなかに載ってはいない。今日はリストに載っている当事者とはまともに話が出来そうになかった。

——何か用事ありますか？ 仕事のことで何か。

「そう……特に思いつかないな。この前頼んだプログラム、明日までに仕上げられるかい？」

——はい、大丈夫です。あ、西崎さんに変わりますか？

同僚の西崎の名前に克行はびくりと身構えた。西崎の名前はリストの十三番目に載っている。電話の向こうで電話が微かに西崎に送られる気配がした。

「いや、いいよ。別に用事はないから」

克行の言葉で西崎の出る気配が消える。

——そうですか。他に何か？

「ないよ、明日は出社するよ。それじゃ、明日」

——はい、お大事に。失礼します。

「さよなら」

克行は静かに、けれど素早く切った。

死のクリスマスイブ・6

六

十二月 十二日 (火)

駅から歩いて約五分、そのオフィスビルの七階に克行の務める会社がある。

そのビルにあるのは克行の会社ばかりでなく、他に五社ほどがビルを借りていて、そのためかあまりセキュリティは厳しくなく、誰でも自由に出入り出来る。克行の会社では七階から九階の三つのフロアを借りている。社員数は約二百人、このビルではその半分ほどが働いており、他の社員たちは皆顧客先での勤務が多い。

九時十五分、克行はいつもよりも少し遅く出社した。今ではフレックスタイムの導入は常識のようにはなっていない。もちろん克行の会社も導入してはいるが、克行の会社の場合顧客との密接した打合せなどが頻繁なためそうそう遅く出社するわけにはいかないため、社員のほとんどが九時までには出社するようになっていた。

「おはようございます」

オフィスに入るとすでに仕事に入っていた社員たちが顔を見上げた。

「おはよう」

克行は出来るだけ視線を避けるようにしながら自分の席へと歩いていった。克行のいるフロアは若い社員たちで占められ、管理職以外は克行と同年代か年下の者が多かった。

「よう、体大丈夫か？」

席へつくとすぐに向かいの席の西崎が声をかけた。西崎とは同じ年に入社し、その後ずっと同じ課で働いてきていた。日焼けしたその顔はスポーツマンらしさを誇示しているようにも見えた。

「たいしたことないよ」

「良かった、今おまえに倒れられちゃ大変だから」

西崎はそう言って笑った。その笑いすら今の克行には苦痛に感じた。

（おまえの命は今、危険にさらされてるんだぞ）

そう忠告してやりたかった。だが、そんな忠告が出来るはずもなく、それどころかなぜこの男が特命者リストに載せられるのだろう、と好奇心すら覚えた。

実際、特命者リストのなかに登録されている人たちのなかに克行の知っている人たちは何人もいるのだが、なぜその人たちが特命者リストに登録されているかそれがまったく克行にはわからなかった。「あ、そうだ……風間、おまえのことを部長が呼んでたぞ」

「部長が？」

「おまえ何かしたのか？」

西崎は冗談めいた口調でそう言うと、克行の答えを待たずにすぐに仕事に戻った。それは今の時期まったく当たり前の動作で克行も気にならなかった。それほど皆仕事に追われているのだ。

オフィスの一番奥の部長席を見ると、部長の桜川が克行の社に気づいた様子でこちらを見ている。

部長の桜川登は今年ですでに七十八歳を向かえている。八年前高齢化社会により政府は年金支給年齢をついに八十歳以上と決めた。その影響で企業の定年年齢も引き上げられたために桜川は今でも現役として働き続けている。すでに頭は剥げ上がり、残っている髪もほとんどが白く変わっている。

克行は所せましと並んでいる机のわきの通路を通って部長の席へ歩いていった。足がやけに重く感じる。

「やあ、体の具合はどうかね？」

克行が近づくと桜川は相手を探るような目で言った。

桜川の名前は特命者リストに入っている。

（なぜ、部長が？）

克行は不安になった。桜川が知っているのではないかと克行は危惧した。これまでも体調を悪くして休んだことがなかったわけではない。だが、そんなこと今まで尋ねられたことなど一度もなかった。それどころかこれまで桜川とは口をきいたこともほとんどなかったからだ。

「……ええ、もう大丈夫です。けど……なぜです？」

「ああ、いや……」

克行の問いに桜川は言い難そうに目をそらした。

「どうかしましたか？」

「いや……べつに……ただ会社も今だいぶ忙しくなってるんで体でも悪くしたんじゃないかと思ってね。君、昨日休んだろう。大丈夫かね」

その言葉の様子に克行は、桜川がもつと別のことを聞きたいのだと察知した。それは克行が最も知られたくないことだろうということとも。

（部長は昨日何があったか知ってる……でもなぜ？）

克行は当惑した。もちろんそれは克行の想像でしかないし、桜川が知っているなどということ信じたくもない。だが、桜川の不可思議な言動は克行の心を揺り動かした。

「風間君？」

桜川の声に、克行は我にかえった。

「は、はい」

「君、本当に大丈夫かね？」

「ええ、もちろんです」

克行は平静を装った。

何かが起こったのはその日の夕方だった。克行はあの後何も考えないように務めた。特権者優遇計画のことを一切忘れ、仕事だけに意識を集中した。

だが、一本の電話が鳴ったことで事態は急変した。

——やあ、風間さんかい？

一瞬克行には誰からの電話なのかわからなかった。

「どちら様でしょう？」

克行の頭のなかを顧客先の人たちの顔がいくつも横切って行く。

だが、どれもその声に該当するものはなかった。

——俺だよ、俺、立花だ

克行の頭のなかが真っ白になった。

「立花……」

——そうだ、昨日市役所で会ったろう。忘れちゃったわけじゃないだろう

もちろん憶えていた。特権者に選ばれることを唯一の楽しみとしている警察官。克行は一瞬自分が過去に大きな犯罪を犯したことがある人間に思えた。これは刑期を終えて出所した受刑者が昔刑務所で知り合った受刑者に会うのに似ている。ほんの少しの間忘れかけていた計画のことが一気に蘇ってきた。

「……なんでしょう？」

克行は周りの社員に気づかれないようにしたが、それでも声はやかに重々しく変わってしまった。はす向かいの席の磯崎和歌子がちらりと克行に視線を向ける。

——今日、何時頃仕事終わるんだい？

「え？」

——ちよつと会えねえかなあ

「なぜですか？」

——聞きたいことがあるんだ。それにせっかく知り合えた仲間じゃないか。少しくらいつきあってもいいだろう。俺、今日非番なんで暇を持て余してるんだ。

「仲間」その言葉がなおさら克行の心を重くした。

「今どこにいらっしゃるんですか？」

——あんたの会社のすぐそばさ

克行はどきりとした。そういえば先日はただ名前を教えただけで

克行がどこに勤めているかを教えたつもりはなかった。もし、教えただところで大手の会社と違ってすぐにわかるようなものでもない。それなのに立花は昨日の今日でもう克行の職場まで電話をかけてきている。

——おい、どうしたんだい？ 会ってもらえるのかい？

「は、はい。それじゃ——これからどうですか？」

——これから？

「ええ、三十分くらいならいいです」

——かまわんよ

「それならロビーで待っていてもらえますか。すぐ降りて行きます」
——待つてるよ

プツリと電話が切れる。

克行は少しの間茫然と電話を見つめていたが、やがてしかたなく立ち上がった。本来ならば二度と会いたくない相手だ。しかし、もし今日会えないと言ったところであの男はきつと明日、明後日また連絡してくるだろう。それに、なぜあの男が克行に会いたがっているのかその理由も気になった。あの男は「仲間」などという感情で動くような男ではない。もっと何かあの男にとって大事なことがあるのだろう。

克行がロビーに降りると立花がソファに座ってのんびりと煙草を吸っているのが見えた。

「よお」

立花は克行を見て軽く手をあげ立ち上がった。昨日と同じ上下黒いスーツを着こんでいる。

「お待たせしました。さあ、こちらへ」

克行は事務的な口調で、立花をうながして地下へ歩き始めた。地下には三件ほど喫茶店が入っており、よく顧客との打合せはそこで行われていた。本来、会社のそばで特権者優遇計画に関連する行動はとりたくなかったが、それでも立花と二人でどこかで話すというのは気がすすまなかった。何よりここならばあまり時間とらずに

済むと考えた。

克行は喫茶店のガラス窓からなかを覗き、知り合いがないのを確かめてからなかに入って行った。

克行たちは奥のなるべく周りに人がいないところを選んで座った。

「なんでしょう」

克行はウェイトレスにコーヒーを頼んだ後さっそく立花に尋ねた。

「何か聞きたいことがあったんでしょ」

「まあな」

立花はとぼけるような感じできょろきょろと周りを見渡した。

「それならどうぞ、仕事の都合であまり時間がないんです」

「そうかい、それじゃてつとり早く済まそうか……あんたの会社に桜川って部長さんいるよな」

「桜川部長？」

突然出てきた桜川の名前に克行はどきりとした。だが、次の瞬間その意味を悟った。立花の特命者リストにも桜川の名前が載っているのだ。

「いるだろう？」

「ええ——でも、なぜです？」

克行はわざととぼけて聞いた。

「いや……どんな人なのかと思ってね。それで出来たら……」

ウェイトレスがコーヒーを運んできて立花は言葉を切った。立花は砂糖もクリームもいれないままコーヒーをすすったが、熱かったらしくすぐに口を放した。

「出来たら——なんですか？」

克行はこちらから立花をうながした。

「写真をね……」

写真、その言葉ではつきりと立花の特命者リストに桜川の名前があることを確信した。特命者リストには特命者の住所や勤務先は載っていても写真は出ていない。立花は桜川を殺すために写真を手に入れたがっているのだ。だが、立花もさすがにそのことを表に出す

つもりはないようで言い難そうに見える。

「写真ですか？」

克行はあくまでとぼけることにした。そしてとぼけながらどうするべきかを考えた。

「どんな人が写真が欲しいんだ」

立花の目がギラギラと克行を見つめる。その目には克行を通して桜川に対する殺意が明らかに読み取れた。

「あいにくですが」

「ないのかい？」

「今手持ちのものはありませんね。ただ一ヶ月か二ヶ月待ってもらえば手にいれることは出来ると思います」

克行は考えたあげくそう答えた。さすがに自分の知っている人間を矢面にさらすようなことはしたくなかった。克行の答えに立花の表情が曇った。その目からはまだ殺意は消えてはいないが、とりあえず一歩踏み誤ったというような表情に見えた。

「そうか……」

立花はカップを持つといっきに飲み干した。もうぬるくなっているのかと克行も一口飲んでみたがまだそれほど冷めたわけではなかった。

「俺は行くよ」

立花は金をテーブルに置くと不機嫌そうに立ち上がった。克行の一言ですでに別の方法と考えはじめているのだろう。

「待ってください」

克行は慌てて呼び止めた。

「なんだい？」

「いったいなぜ私の会社がわかったんです？ 私は名前しかあなたに教えていません」

立花は克行の質問ににやりと口をまげた。

「俺の職業教えたらう」

背筋が凍るような思いがした。この男ならば桜川の写真もすぐに

手にいれることだろう。立花はもう克行のことなど忘れてしまったかのように一人ですたすた早足で行ってしまった。

克行は立花が出て行くのを立ち上がりその場で見送り、立花が見えなくなるともう一度座り直した。おそらく、立花はこんなことで桜川を狙うのをやめたりはしないだろう。

なぜだか、立花とはもう一度どこかで会わなければいけないような気がした。

死のクリスマスイブ・7

七

十二月 十四日 (木)

涼子から会社にいる克行に電話があつたのは木曜の夕方だった。涼子の口調から彼女がひどく興奮していることが読み取れた。

克行は夜、涼子に会おうと言つたが、涼子は外で会おうとした克行の意志に反してマンションに来ると言い張つた。確かに事が事だけに外で話すよりもマンションのほうが良いかもしれないと、克行は涼子の言葉に従うことにした。

克行は駅からマンションまでの道順を教え、涼子の来る時間に合わせ早めに仕事を終わらせ帰宅した。帰宅したのは九時過ぎだったが、どうやって入ったのかすでに涼子は克行の部屋に上がりこんでいた。

「どうやって入ったんだ？」

「ごめんね、妹だつて嘘ついて管理人さんに鍵を開けてもらったの」
涼子は悪びれた様子もなく驚く克行に笑いかけた。お人好しともいえる管理人の杉本老人の顔が思い出された。麻美に比べればずっと大人びて見える涼子が克行の妹などと本当に信じたのだろうか。

すでに部屋はファンヒーターによつて暖まっている。まるで何度も訪れているような雰囲気だ。涼子は部屋でくつろいでいた。その涼子の様子に克行は大学時代に同棲していた時のことを思い出した。
「ずいぶん早かつたんだな、こんなに早く来るとは思つてなかつたよ」

「べつに構わないわ。仕事、急がしいんでしょ」

「十二月にもなるとさすがにな。おまえもう何か食つたのか？ 何か用意しようか？」

「食事はもう済ませたからいいわ」

「それで、何かわかったのか？」

克行はすぐに特権者優遇計画のことに話を移した。あまり個人的な話を涼子と続けたくはなかった。いまさら涼子とよりを戻すつもりもない。

「ええ」

涼子は仕方無いという素振りでバックのなかから書類をいれるような封筒を取り出した。その真剣な眼差しにいつしか克行の表情も堅くなっていった。

「悪い情報か？」

けれど涼子はその質問には答えようとはしなかった。

「これを見て」

涼子は青と赤に分けられた数枚の書類を克行に突き出した。

「これは？」

「青い用紙のほうは今回の特権者優遇計画で特権者に任命された人たちのマスター・リスト。そして、この赤いほうが特命者のマスター・リスト。今日、役所の端末を叩いてリストにしてきたの」

どちらの書類にもびっしりと名前や住所、年齢などいろいろな情報が並んでいる。

「それで？」

「そのなかには克行の名前はないわ」

克行は驚いて涼子を見つめた。

「ない？」

「そうよ、しかももう一人。頼まれていた五十嵐麻美さん、彼女の名前もないわ」

「特命者リストに？」

「特命者リストにももちろん特権者リストのほうにも。ただし、不思議なことに各特権者への特命者の割り当てを行った後のファイルには、はっきりとあなたの名前も彼女の名前も載せられている。しかも、もう一つ不思議なことがあるの。各都道府県毎の特権者、特

命者の人数は国が決定し、各市毎の数はその県が決めることになっているわ。今回、うちの市に割り当てられた特権者の数は百八人、都道府県ごとに割り当てられた特命者は六千二百六十四人。問題なのはこの中身なの。このなかには克行も、そして彼女も含まれてないの」

「どういうことなんだ？ 俺には何がどうなってるのかわからない」

「そうね。ただのミスってことも考えられるわ」

「ミス？」

「特権者優遇計画を実施するそれまでの過程のほとんどがコンピュータ処理で行われるわ。マスターからそれぞれのファイルへの振り分け、そして特権者への通知。全てがコンピュータに簡単な指示を行っただけ。だけど、一箇所だけコンピュータ以上の処理を事務員がやらなければいけない部分があるわ。それぞれの特権者への特命者の指定。そこで事務員がコンピュータに対する指示を一特権者毎に行われることになっているの」

「そこでミスが？」

「役所では今九十パーセントほどの情報はコンピュータ処理されるの。当然、市の住人の情報もコード化されファイルにある。特権者優遇計画にもそのファイルは参照という形で使われるの。おそらくその時、オペレータが誤ったコードを指示した」

「指示を間違った？ オペレータのミス？ そんなことで彼女の名前が特命者リストに載らなければならなかったのか？」

克行は思わず大声を出した。

「まあ、待つて」

「待て？ 命が危険にさらされたんだぞ。ミスなんて言ってるのか？ 明日にでも役所に行って彼女の名前を削除させる」

「無理よ」

涼子の声に克行はびくりとした。それほど涼子の声には緊迫した雰囲気があった。

「なぜだ？」

「そんなことが出来るようなところならそんな単純ミスをやらかしたりなんかするわけがないじゃない。ミスと言っても一度リストに載ってしまったものを取り消すことなんか出来るわけないわ」

「……」

まったくその通りだった。特権者とか特命者とか選定はされているが、結局のところそれは人工削減の手段というだけで国にとつて特権者が特命者リストに載っていてても特命者が特権者リストに載っていないもいっこうに構わないのだ。

「それに……」

やや間があつてから涼子はさらに付け足した。「今度のことが本当にミスかどうか……それもまだ判断出来ない」

「なぜだ？ マスターファイルに載っていないかつたんだ。ミス以外何が考えられるっていうんだ」

克行はなかばやけになつて吐き捨てた。

「実は毎年通常のファイル以外にシークレットファイルが設定されることになっているんだけど――」

「シークレットファイル？」

「ええ、文字通りそのファイルの中身は役所のなかでも限定された人間しか見ることが出来ないようになってるの」

「つまり実行委員会のメンバー？」

「もつと限定される。役所のなかでもおそらくあれを見ることが出来るのは市長をいれて三人くらいしかないと思う」

「そんな秘密にしなければいけないものっていったい何が入ってるんだろう」

「さあ……けどひょつとしたらそのなかにあなたたち二人の名前が突然現れた原因が隠されてるかもしれない」

「見れないのか？」

涼子に危険を押しつけることになると知りながらも克行は聞かずにいられなかった。

「見ようと思えば……」

涼子はそう言っただけで微笑んだ。その笑顔に克行は涼子が初めからそのつもりだということに気がついた。

「見るつもりなのか？」

「もちろん。克行の恋人の命がかかっているんだもの。そのくらいのこととしてやらなきゃ。それに私自身もかなり興味があるの」

ぎゅっと固く拳を握り涼子ははつきりと言った。その姿に一度はシークレットファイルのなかを知りたいと思った克行も、涼子がかにかひどく危険な道を歩き出そうとしているようで心配になった。

「危険じゃないのか？」

だがすでに涼子はもう心を決めてしまっているようだった。

「大丈夫よ、克行だってコンピュータには詳しいからわかるだろうけど実際にシステムを管理している人とシークレットファイルを見ることが出来る者とは違うの。だから、よほどしっかり管理してなきゃ私がシークレットファイルを覗き見たところでばれやしないわよ」

その涼子の言葉に克行もそれ以上言おうとは思わなかった。実際にどんなに危険だとしてもそのシークレットファイルを見ることが麻美の命を救えるかもしれないからだ。

「気をつけてくれ」

克行は一言だけ告げた。

「わかってる。私だってまだ死ぬつもりないわ。他に何か私に出来ることない？」

「もう一つ調べて欲しいことがあるんだ。以前、駅のホームで乱射事件を起こした特権者のことを憶えているか？」

「泉谷のこと？」

「そう、そんな名前の男だった。なぜ知っているんだ？」

「私だって去年は委員会のメンバーだったのよ。そのくらいのこと知っているわ」

「そうか……その男がああ後どうなったか調べられないか？」

「死んだわ」涼子は即座に答えた。

「死んだ？」

「今日、計画のことを調べているうちに過去の記録が目についたんだけど、その男のことも記録に書かれていた。あの事件を起こしてから二ヶ月後に青酸カリで自殺してたわ」

「自殺……」

「でも、本当に自殺かどうかはわからないけどね」

「わからないって？」

「国にしてみればこの特権者優遇計画のことをあまり表沙汰にはしたくないのよ。だからこそマスコミにも圧力をかけている。そんな時にあんな事件でしょ。ひょっとしたら殺されたのかもしれない」
「……」

涼子の言葉に克行はぞっとした。

「ああ、そうだ」

涼子は思い出したようにつぶやいた。それは多少芝居がかったもので、実のところ涼子が今日克行を訪ねた一番大きな理由がそこにあったようだ。

「どうしたんだ？」

克行は涼子の言葉にどきりとして彼を見つめた。どんな形であれ、今役所に務める涼子の言葉は驚かされる。

そんな克行を満足気に眺めてから涼子は内ポケットから四つ折にされた一枚の用紙をばいとテーブルの上に投げ出した。

「はい、お土産よ」

「土産？」

克行は涼子の表情に注意しながらその用紙を広げた。

用紙には5人の名前と住所、電話番号などの各自の情報が載っていた。おそらく市の住民ファイルからのコピーなのだろう。その5人のなかには克行自身の名前、さらに克行の仕事上の知り合いが二人、そしてあの立花の名前までもあった。

「これは……？」

おそろるおそろる克行は訪ねた。立花の名前があることでそれが非常

に重要な意味のあることは察しがついている。

「わからない？」

いたずらっぽい目で涼子は克行を見た。

「まさか……」

克行ははっとした。

「そう、そのまさか。あなたの大事な彼女の名前の入ったリストを持つ者の名前よ。そいつらが彼女の命を握ってるわ」

あなたの大事な、その部分に力を込めて涼子は言った。

「これが……」

克行は改めて用紙を見つめた。さっきにも増してそこに書かれた名前が大きく見えた。何よりも立花の名前のあることが克行の心に暗い影を落としていた。

（役所で声をかけられたあの時からそういう運命だったのかもしれない）

あの立花の狂ったようなにやついた笑いが脳裏に蘇ってくる。

「私のほうもいろいろと麻美さんを救う手段は考えてみる。だけど、最後の手段としてはあなたの持つ権利を使う以外ないかもしれないわね」

すでに涼子の顔からはあのいたずらっぽい笑みは消えている。

「ああ」

克行自身そのことはとてもよくわかつているつもりだった。もし涼子が調べてくれていなくてもそれでも何とかして麻美を狙う特権者を消し去るつもりでいたのだ。

「拳銃は？」

「え？ ああ、あるよ」

克行はベッド脇の引き出しの奥から包みに包んだままの拳銃を取り出した。その拳銃の保管場所に涼子は不満を覚えたような目と言った。

「あと二日で特権者優遇計画が始まるわ。明日からはつねに銃を持ち歩くようにして。へたすると特権者のほうが特命者に命を狙われ

る可能性だつてあるのよ」

「特権者が？」

「過去に偶然自分が特命者として登録されていることを知って、その特権者を殺したという例が二、三件あったって話を聞いたことがある。無理もないわ。誰だつて殺されるよりは殺すほうがまだいいと思つてゐるのよ。克行も氣をつけたほうがいいわ」

「殺されるよりも殺すほう……か。確かにそうかもしれないな」

克行はうつむいてつぶやいた。

「え？」

「殺されるよりも殺すほうがいい。その通りだ。俺だつてこんな立場じゃなければ、配られたのがこんな特命者リストじゃなく、まったく知らない奴らの集まりだったならきつとそう思えただろう。誰だつてそうだ、誰だつて死にたいなんて思つてゐる奴なんているはずがないんだからな」

心のなかでまだ形になつていない不形成な気持ちまでもが激流のように克行の口から漏れた。それはまったく嘘偽りのない今の克行の気持ちだった。

「そんなこと考えちゃだめよ。今はただどうやって乗り切るかだけを考えなきゃ」

「考えてる、考えてるさ。けど、おまえからこの彼女の命を握つてゐる奴らのリストをよこされた瞬間から俺の頭のなかにはこいつらをどうやって、いつ殺すか、そんなことばかりが浮かんできてるんだ。俺もあいつらと同じだ。人を殺すことを楽しんでゐるあいつらと変わりのないんだ！」

「……克行……」

涼子の手が克行の左手にそつと触れた。その感触に克行ははつとして顔をあげた。涼子の顔がすぐそこにあった。忘れていた学生時代の二人の姿がそこにあった。

——私、克行のことを忘れない。

別れ際に言つた涼子の言葉がふつと脳裏をよぎつた。

愛してる。

愛してる。

愛してる。

心がああ頃へ引き戻される思いがした。

克行は必死にそれを否定しようとした。全ては終わったことだ、過去のことだと思いこもうとした。だが、出来なかった。

涼子の赤い唇が克行の唇に触れた瞬間、克行はほとんど本能的に涼子の体を抱きしめていた。やわらかなその感触はああ頃を彷彿させるのに十分だった。

死のクリスマスイブ・8

八

坂本伸一・三十九歳

K I N I C 株式会社 係長

旭台衆応 2 - 5 - 7

0 5 2 1 4 - 3 3 6 4 - 1 5 4

ランク・C

富士川義幸・二十八歳

私立川越高校 教員

境八日町牛込 6 5 - 7 - 3

0 6 5 2 8 - 1 4 7 3 - 5 8 1

ランク・B

波川稔・四十二歳

I M M 技術研究所 課長

石沢亜栗 4 2 - 8 8 3 - 1

1 0 5 7 1 - 2 0 1 0 - 1 1 2

ランク・C

立花勇作・三十一歳

港橋警察署勤務

穂墨区高城 8 - 6 9 - 4 4

2 1 0 2 - 5 8 6 0 - 3 2 3 6

ランク・A A

風間克行・二十六歳

KCS株式会社

八坂区背能85-5-67

0137-5671-4207

ランク・C

碓井正隆・十九歳

八野倉大学二年

石鷹区駆詰42-44-82

メゾンWATASE202号室

0150-8884-2956

ランク・C

乱れたベッドに寄りかかりビールを飲みながら、克行はベッド脇にある電気スタンドの小さな明かりで涼子の置いていったリスト（「殺人者リスト」、涼子と克行の二人はこの麻美の命を握る克行を含めた六名のリストをそう呼ぶことに決めた）に見入っていた。

気のせいかほのかに涼子のつけていた香水の香りが、まだベッドに残っているように感じられる。ほんの少し麻美にたいして後ろめたさを感じていた。

おまえは自分の恋人が危険にさらされようとしているのに何をやっているんだ？ それともこのまま麻美のことなど忘れてしまっただけ涼子とよりを戻すつもりか？

まだ涼子の白く豊かな乳房の感触が、そしてあの時の彼女の声もまたはつきりと記憶に残っている。

（早く忘れてしまえ！）

涼子とのことはどうせ、一夜のことに過ぎない。そもそも、このまま涼子とよりを戻す気持ちなどまったくくないのだ。

——愛してるわ……私が克行を守ってあげる。

帰り際に耳元で囁いた涼子の声が頭に響き、克行は頭を押さえた。忘れるんだ！ 今考えなきゃいけないのは殺人者リストのなかに

ある特権者からいかにして麻美を守るかということだけだ。

克行はいつきに飲みかけのビールを飲み干すと、再びキッチンの冷蔵庫のなかからもう二罐取り出してきた。アルコールの力で全てを忘れ去ってしまいたかった。すでに四罐、飲み干しており、かなり酔いがまわってきているのは自覚しているが、それでもまだ足りないように思えた。無意識のうちに指でカタカタとテーブルを小刻みに叩いていることに気づいた。煙草が吸いたかった。銘柄などはなんでも良い。とにかく煙草を口にしたい欲求にかられていた。三年前にやめて以来ずっと口にしていない。以前ならば買い置き煙草がいつもどこかにあったのだが、今では微かな煙草の匂いすらしていない。かといって今から買いに行くわけにはいかない。情けないことに、彼はアルコールにまるで強くなかった。これから煙草を買いに行こうとすればおそらく幾段も連なる階段を一階まで無事に下りることはとても危険な賭けになるだろう。もし無事に自動販売機まで行ったとしても帰ってこられる保証はない。克行はじつと我慢し、煙りの代わりにアルコールを体のなかに流しこんだ。ビールで足りなければとっておきのウイスキーを開ければいい。

（それにしても……）

何か強い意志によって自分の運命が決められているようなそんな不安を克行は覚えていた。

先日は自らの会社の上司や同僚、そして恋人の名前を特命者リストのなかに発見し、今日は協力会社の上役、顧客先の課長の名前を特権者リストに見つけることになった。KINIC株式会社の坂本IMMの波川がそれだった。二人とも一年くらい前から仕事を通じて知り合い、現在でもよく仕事で顔をあわせる。坂本にいたっては今日も電話で話をしたばかりだ。

（彼らが特権者だったなんて……）

自分の回りの人間関係がほんの二、三日の間にぼろぼろと崩れ去って行くような感じがした。

もう一度特権者リストを見つめてから克行はおもむろにビールの

罐を開け、半分ほどグビグビと飲んだ。アルコールが体のなかで暴れているのがわかる。このままのペース飲み続ければ、一時間後には確実に胃に納まっているものは全て外へと放出されるだろう。それがわかっていても、克行は飲み続けることを望んだ。

逃げ出してしまいたい……

このまま麻美のことも特権者優遇計画のことも全て忘れて逃げ出せたならどれほど楽になれるだろう。なによりも今回の特権者優遇計画は危険すぎる。それは涼子に言われるまでもなく、麻美の名前をリストに見た時から克行にも本能的に感じていた。なぜだか自分が特権者優遇計画の全ての中心に位置しているようにさえ思えた。

この特権者優遇計画には何者かの大きな意志が働いている。それが国家の意志なのか、それとももっと別の誰かの意志なのかそれはわからない。だが、それでも大きな意志が働いて克行に「死」という素敵なプレゼントを送ろうとしている。

イバラの鞭を持ったサンタクロースのプレゼント。この年齢になって再び現れた悪夢のサンタクロース。特権者というそりに引かれ、袋のなかには多くの「死」が入っている。爽やかな笑顔を振りまいてサンタクロースは言うだろう。『年に一度のクリスマス。サンタクロースからのプレゼントをさあどうぞ』それからおもむろに袋を開けて黒光りする拳銃を取り出す。そして、爽やかな笑顔はそのままに拳銃を乱射する。

それはあまりに馬鹿げていて、見ている人々はショーだと思って喜ぶだろう。ああ、何て素晴らしいクリスマス、何て愉快なクリスマス。それが現実だとわかつているのはサンタクロースとそりを引いている特権者たち、そして殺された人々。

今年は自分もそのショーに加わろうとしている。

（忘れてしまえ！）

それなら本当に忘れてしまうか？ 麻美のことなど過去のことと葬ってしまうか？ そして麻美が無事に生き延びたことを知ったならばまた戻ってくればいい。おまえなら出来るじゃないか。涼子に

やったことをやればいいんだ。

ちくしょう！

再びビールにしがみつき、一気に残りを飲み干した。そして、すぐに次のビールへ手を延ばす。いよいよもって世界は回り始め、体は克行に警告を促す。克行はその警告を快く無視した。

克行は自分を含めた殺人者リストを改めてまじまじと見つめた。文字がふにやふにやと踊って読める。

しかし、何よりもその殺人者リストのなかで目をひいたのはあの立花勇作の名前だった。しかも彼の特権者としてのランクはAA、つまり最も優れていると評価されている。涼子の話ではランクAの特権者でも数人いるだけでAAというのは涼子も初めて見たと言っていた。そんな男を克行は相手にしなければいけないのだ。

俺はあいつに勝てるのか？

克行はふと立花の姿を思い描いた。警察官として十分なまでにがつちりした体、そしてあのどこか神経質そうな身のこなし、まともにやりあつて勝てるとはとうてい思えなかった。ただ一つ克行が有利な点といえば立花がこれほどの特権者優遇計画に対しての情報を得ていないだろうということだけだ。しかし、それでも克行にはあの男の死体の姿を想像することは出来なかった。

あいつが麻美を狙わないことを祈るだけだ……

全てのものを投げ捨ててでも麻美を守りたいと克行は思った。そのためならばどんなことをしてもいいと本気で思った。もし、立花が部長の命を狙うならばそれを手伝つてもいいと、いや、会社の人間全ての命をくれてやつてもいいとさえ思った。

「麻美……」

克行はぼんやりと宙を見据え、麻美のことを思った。

麻美はどう思うだろう。俺が特権者となったことを、そして彼女が特命者として俺のリストに載ったことを……

告げたくはなかった。だが、そんなわけにはいかない。麻美のためにも、そしてこれからのためにも彼女に話さなければいけない。

アルコールがまわり朦朧とする意識のなかで彼女のことをなんとなくでも守ってみせると克行は誓った。

時計の針はすでに午前二時をまわろうとしている。

死のクリスマスイブ・9

九

十二月 十七日 (日)

冬にしては暖かい風がそよそよと頬に触れる。公園は冬だというのに、それでも日曜になるとカップルや親子連れが姿を現す。

克行はベンチに座り、じつとその平和そうに見える光景を眺めていた。その頭のなかは当然のことのように麻美のことを、そして今夜から始まる「特権者優遇計画」のことで占められている。

先日の夜以来涼子からは何の連絡もない。克行のほうからも彼女に連絡はしていない。連絡しづらいということもあったが、どちらかというと全面的に涼子を信頼していた。彼女が連絡してこないということは何の情報も得られないということだ。そのため克行は新たな道を模索しようと試みることにした。

公園の中心にある花時計がきっかり午後一時を示した時、一人の男が克行のいるベンチに向かって歩いてくるのが見えた。

男は克行を見定めると人なつこい笑顔を浮かべ軽く手をあげた。

「やあ」

克行もまた軽く左手をあげてみせた。右手はしっかりとコートのポケットへいれられ拳銃を握っている。

「久しぶりだね」

藤井和弘はそう言っただけで克行の隣へどつかと腰をおろした。記者である藤井とは三年前の冬に会社の仲間に誘われるままに行ったスキ―場で知り合った。克行よりも二つ年上だが見た感じはそれよりもずっと年上に見える。

「仕事はどう？ 忙しい？」

「ああ、例のごとくさ。俺たちは常に忙しく常に暇だからね。忙し

いのは能力がある証拠、暇なのは無能な証拠だ。世間にやさんざん悪口を言われてるがね」

『アウトサイド』という藤井が記事を書いている雑誌のほとんどはアイドルのゴシップ記事が中心で、彼も常に年端もいかないアイドルたちを追いかけている。

「あんたはよっぽど忙しいって言いたいのかい？」

「その通り。その証拠に俺は三日前にこの日本に帰ってきたってわけだ。それで？ その忙しいこの俺をこんな寒い公園に呼び出したわけを教えてもらおうか」

相変わらず人なつこい笑顔を見せながら藤井は言った。

「あんたのその笑顔を消してしまうかもしれない話だよ。へたすれば青ざめることにもなるかも」

「おいおい、冗談よせよ。俺のこの笑顔は生まれつきでね、俺が青ざめるとしたら俺の書いた記事がもとで雑誌の売れ行きがこつぴどく落ちこむってことだぜ」

「いいや、残念ながらそんな話じゃないよ。俺があんたと話をしたいのは「特権者優遇計画」のことなんだ。あんただって知ってるだろ」

克行はわざと明るいい口調で計画のことを口にした。藤井の顔から笑顔が消えたが、それはほんの一瞬のことだった。

「一応はね」

「どのくらいのことを知ってる？」

「さあねえ……どちらにしても俺の専門外の話だな。なぜだい？」

「なぜマスコミはあの政策について何も報じようとしないのかと思っ
つてね」

「不思議なことを聞くね。マスコミがそいつについて報じないことに何が問題があるっていうんだい？ それに「特権者優遇計画」、そいつは君にどんなふうに関わっているっていうんだ？」

藤井は何かを疑うようにちらりと克行の顔を見た。克行はその目に彼がすでにある考えに達していることを悟った。

「俺は今、最低でも六人あの世へ送り出すことの出来るものを持っているっていうことだよ」

ちらりと克行のポケットの膨らみを見て、さすがに藤井の顔からあの人なつこい笑顔は消え去った。だが、それほど驚いたような顔を見せなかった。

一瞬の沈黙の後、藤井はふうつと一息溜め息をついた。

「そういうことか……ちなみにそいつは最低六人じゃなく最高六人をの間違いじゃないのかい？」

「そうだね……」

いや、あくまでも最低六人なんだよ。と心のなかでつぶやきながらもあえてそのことには触れようとせずに素直に頷いた。克行が考えていることを全て伝える必要はない。

「それで俺に何をしろって言うんだ？俺に「特権者優遇計画」の問題性を記事にしろって言うのか？このゴシップ専門の記者にそいつをしろって？」

「べつにあんたにやってくれとは言っていないよ。ただ、それをやってくれる人を紹介して欲しいって言うてるんだ」

「同じことだ」

「なぜだ？なぜあんたたちはそれほどまでに避けようとするんだ？」

「君は考え違いをしているよ。マスコミはそれほど正義感が強いわけじゃない」

「それでもマスコミは常に政治のスキャンダルを報道しているじゃないか？以前、どこかの雑誌で「特権者優遇計画」のことを取り上げていたことがあった」

「俺も読んだ記憶があるよ。そういう物好き——いや、確かに正義感のある記者もいるだろうね。けど一人じゃ何も出来やしないよ。ちよつと手を出してみてもどこからか圧力がかってそれで終わるさ」

「圧力が？それが怖いのか？」

「怖いね、だが、記事にしないのはそれだけの理由じゃない。確かにうちの雑誌でも政治家のスキャンダルは記事にするよ。たいして深い傷にならない程度のスキャンダルにね。本当に政治家をつぶそうなんて考えて記事を書く奴なんかはいないよ。その証拠に決してそれらは彼らの命取りになることはないだろう。それにそんなスキャンダルは民衆が望むことだ」

「それじゃ——」

「君が言っているものを民衆は望んじやいないよ。民衆が望んでいるのはあくまでもいい自らの楽しみを満足させてくれるスキャンダルだ。政治家の汚職事件だってそうさ。政治家が裏で企業から金をもらっていることなんか、俺たちが報道する必要もなく誰でもがわかつていることだ。それでもバカな政治家がとんでもないミスをやらかす。それで俺たちがとりあえず報道し、民衆はとりあえず怒る。そして満足する。それだけのことなんだ」

藤井は軽く肩をすくめてみせた。

「そんな……そんなものでしかないっていうのか？」

「そうさ、うちの雑誌がよく売れるのはそういうわけさ。必ず毎週、どこかの可哀相な人々の記事が載る。過労で旦那を亡くした哀れな未亡人。血液感染によってエイズにかかって余命いくばくもない少年。そいつを読むやつらは一様に可哀相にと涙を流す。だが、心のなかじゃその哀れなやつらと自分とを比較しているのさ。私たちは大丈夫、私たちはずっと幸せだってね。人間なんて身勝手なもんだ。それにマスコミには大前提があるんだ。読者を不安がらせないことだ。例えば二、三年前から突如降って湧いた障害者たち。国は原因不明と発表しているが事実が違う。しっかりと原因究明されているんだ。だがその原因が問題だ。なんとその原因を作りあげたのは我が国には今やどうしようもない輸入品なのさ。アメリカ産の農薬だらけの米やオレンジ。しかし、そいつを発表するわけにはいかない。農薬のついていない米やオレンジなど世界のどこを捜したってありはしないからだ。確かに日本にもまだほんのわずかながら農家は存

在している。けど、しょせん日本人全てを支えることなど出来るはずがないんだ。一九九六年に米の輸入開放が間違っていたとしてもそんなことを今更言えるはずがない。知ってる奴らだけが注意するだけなんだ。マスコミなんてそんなものさ。正義感ぶっているだけで本当はみんな金のために記事を作りあげてるんだ」

「あんたはそれで――」

「恥ずかしいのか？ 思わずそう言いそうになり克行は口をつぐんだ。そして藤井も克行が何を言おうとしたかは察したようにほんの少し視線をさけてうつむいたが、それほど気にした様子はなかった。

「確かに特権者に選ばれた君にとってそいつは非常に大きな問題で、政策が間違っていると感じてしまっても仕方がないことだと思うよ」同情するように藤井は言い、それからもつと驚くことを彼は口にした。「だが、俺は「特権者優遇計画」がそれほど間違った政策だとは思っちゃいないんだ」

「なんだって？」

克行は思わず驚きの声をあげた。「間違っていない？ 何を言ってるんだ？」

「まあ聞けよ。確かに君が感じていることはよくわかる。たとえば人工削減計画とはいえ人殺しをやるのは間違いだと言うんだろ。しかし、現実にはこの日本、いや世界中には人間がゴミ屑以上に存在しているんだぜ。そいつをどうやって解決しようって言うんだ？ 見なよ、あの光景を」

藤井はそう言って顎をしゃくりあげた。花時計の向こう側に二、三歳くらいの子供を背にした白髪の老人がのんびりと散歩しているのが見て取れた。

「あの小さな孫……いや、曾孫かもしれないな。いずれにしてもあの爺さんは子供を背にしょっている。君にはあの光景がどう見える？」

「実に平和的な光景だと思うね。まさか、子供が爺さんの頭に拳銃

を突きつけていなければだけど」

投げやりに克行は答えた。藤井が何を言おうとしているのかわからなかった。

「なるほど、拳銃を突きつけていなければか。それなら大丈夫さ。あの子はすっかり寝むつちまつてる。平和的光景だろう。しかし、現実にはどうだろうな」

「現実には？ 何を言ってるんだ？」

「現在の老人と子供の比率を知っているかってことだ。今はまだそれほどじゃないが、あの子供が俺たちくらいになるころにはあの子供は一人で老人を十人くらい養うことになるんだぜ。つまり現実にはあの爺さんが子供の背におぶさってるってことさ」

やつと藤井が何を言おうとしているのかがわかった。

「だから「特権者優遇計画」は許されるって言うのか？」

「必要悪って言葉を知っているだろう。例えば――」

「あんたの例え話しはたくさんだ！」

「そう言うなよ。俺は君よりも計画についても世界の現状についても知ってる。アメリカじゃあ人殺しをゲームとして楽しむことが法律で許されるってことを知ってるか？ いかに歩き続けていられるかそれがゲームの内容だ。健全でないのは歩けなくなった時に頭を一発吹き飛ばされるってことだ。生き残れるのはただ一人、それ以外は皆殺される。まだ企画段階だがすでに何十人もの子供たちがそのゲームへの参加を望んでいる。そいつをどう思う？」

「そいつらは狂ってるんだ！ それとも罰ゲームの中身を嘘だと思っているかのどちらかなんだ」

「そうだろうね。日本人の多くが「特権者優遇計画」が実際に行われていることを信じないようにね。いずれにしても日本の政策なんてかわいいもんだ」

「つまりあんたは俺に『平気で人殺しをやったのける』と言ってるのか？」

「そうは言っていないよ。ただ俺たちマスコミが動かない理由を教

えてあげただけだ」

（同じことだろう）

克行は暗い気持ちで思った。このまま「特権者優遇計画」が始まればきつとそういうことになるだろうと予想していた。それは自分でも認めたくない予想だった。

「いずれにしてもあんたは動いてはくれないわけだ」

克行は藤井に麻美のことを話すのをやめた。藤井は麻美のことくらいで考えを変えるようなことはしない。あくまで客観的な見方が出来る男だ。

「悪いけどね」

そして藤井はゆっくりと立ち上がった。「力になれずに申し訳ないが、恨まないでくれよ。君とはいつまでも仲間でいたいんだ」

「大丈夫、断わられた腹癒せにあんたをターゲットにしたりはしないよ」

「その点は信頼しているよ。それにいくら君が俺を狙おうとしても、あいにく俺は今夜にはハワイ行きの飛行機に乗っている。そして帰ってくるのは正月あけだ」

「またガキ相手に遊んでくるのかい？」

「そうだ。俺だってあんなガキどもをカメラ持って追い回すのは嫌だが、それでも奴らは金になるんでね」

「がんばってくれ」

克行は精一杯笑顔をつくってみせたが、それはあまりうまくはいかなかった。藤井は来たときと同じように軽く右手をあげて去って行った。

藤井が立ち去ったあと、視線は無意識のうちにさっきの老人の姿を捜していたが、すでに家路についたのか見つけることは出来なかった。

それでも俺は認めたくない。いや、認めるわけにはいかないと思った。克行はベンチに座り込んだまま、麻美に今夜どう伝えたらいいものかと頭を悩ませていた。

死のクリスマスイブ・10

十

緊張感で手の平が汗をかいている。

一秒、また一秒と時間が近づいている。

「どうしたの？ この前から克行変だよ」

心を探るような眼差しで麻美が不思議そうに克行を眺めている。

だが、その目は決して克行の心の全てを見抜いてはいない。ほんの少し克行の様子がいつもと違うことに気づいているにすぎない。それは克行にとつて救いでもあり、苦痛でもあった。

克行はそんな麻美の言葉にまた時計を振り返った。

十一時三十二分。あと二十八分で特権者優遇計画が始まる。

話さなければいけない。

もともとそのつもりで今夜麻美の部屋を訪れたのだ。いずれは話さなければいけないと思いつつ一週間が過ぎてしまった。藤井を通じてマスコミを動かし、「特権者優遇計画」の問題点を世間に訴えかけることで麻美を救うことが出来るのではないかと考えたが、その考えは打ち破られた。

彼女に伝えなければならぬ。

——このリストの中身についての口外は一切禁止します。もしもそれを破った時にはその人にはしかるべきペナルティが与えられることとなります。

ペナルティ？ 今更いたいどんなペナルティがあるっていうんだ？

「やっぱり今日の克行、どっか変よ。どこか上の空で………いったい何を考えてるの？」

克行も明日仕事があるんでしょう。いくら日曜だからって、いつも日曜の夜は早めに帰っちゃうじゃないの。それに先週だって、連

絡してもぜんぜんいないんだもの。どうしたの？」

麻美はベッドに腰かけ、黙って座っている克行をじっと見つめた。答えられるはずがなかった。麻美と言葉を交わすだけで涼子とのことがばれそうな気がして電話にすら出ようとしなかったのだ。ベッドわきのテーブルの上に読みかけの手紙が広げてある。

「手紙……誰から？」

つい話題をそらした。

「これ？ 父さんからよ。この前、届いたの。ちょっと思い出して読んでただけ」

麻美はそう言って即座に手紙を片付けた。そういえば麻美の父親は国家公務員という話を聞いたことがある。麻美も少しは特権者優遇計画について知っているのだろうか。

克行は再び言葉を搜すようにぐると部屋を見回した。

でっぷりと肥えた黒猫のルシファーは克行を見るなりいつものようにベッドの下へ潜り込み、それでもその青い目でじっと克行を観察している。まるでいち早く克行の心のなかを察しているようで克行はぞっとした。

「麻美……」

やっと克行は口を開いた。

「何？」

麻美が身を乗り出した。

「明日からのこと知ってるだろ」

「明日？」

一瞬、麻美の顔が硬張る。彼女も心のどこかに特権者優遇計画のことがひっかかっていたのだろうか。

「特権者優遇計画のこと」

「……あのこと……でも、それがどうかしたの？ 私たちにはいっさい関係のない話よ」

「そういうわけにいかなくなった。実は……今年、俺も特権者として選ばれたんだ」

克行の言葉にさすがに麻美の顔が白くすつと透き通っていく。目は何が起こったのか見定めるかのようにきよきよと動き、薄い紅い唇は微かに震え、その場を補う言葉を搜している。

その麻美の仕種から彼女がいかに驚いたか克行には想像出来た。そして、その彼女の驚きは克行の予想をはるかに上回るものでかえって克行はどうしていいかわからずただ、じつと麻美を見守った。しばらくの間、二人とも口を開こうとはしなかった。

通りを横切る車のエンジン音が手に取るように聞こえてくる。

十一時四十三分。あと十七分。

やつと麻美が口を開いた。

「なぜ……？　なんで克行が……？　どうしてなの？」

「わからない……」

「でも——！」

「いったい何がどうなってるのか俺にもわからないんだ。先週の日曜の朝、突然通知が届いたんだ」

「先週の日曜？　それじゃ、この前会った時に？」

「そう、あの朝だ」

「なんで言ってくれなかったの？」

「責めるような目で麻美が言った。」

「こんなこと誰にも言いたくなかった。当然だろう。特権者なんて言い方をしてるけど、実際には人殺しのことだ。黙っているつもりだった」

「克行も……人を殺すの？　特権者選ばれたって言っても、どうしても人を殺さなきゃいけないってことないはずよ。人を殺さなくても済むんでしょ」

哀願するような麻美の言葉に克行は胸が痛くなるような感じがした。やはりもう一つのこと話さなきゃいけない。そうすることが麻美のためだ。

「そりゃ、そうだけど。噂じゃ、権利を破棄すると来年は俺が特命者リストに載ることになるそうじゃないか」

「そんなの嘘よ！　お願い、計画のことなんか忘れて！」

「それだけじゃないんだ！」

「それだけじゃない？　どういうこと？　まだ何かあるの？」

麻美の手がぎゅっときつくシーツを握りしめる。

「……俺の持つ特命者リストのなかに……その……」

「何なの？」

「君の……麻美の名前があるんだ」

「……私の……名前？　克行のリストのなかに？」

さつきより麻美の驚きは大きくはないように克行には見えた。ただきつく下唇を噛み、鋭い視線で克行を見つめている。

「麻美……」

「それで……克行はどうするの？」

「え？」

「私を……殺すの？　特権者優遇計画が始まるまであと——十二分、そのために今夜私のところにやって来たの？　もう拳銃は持っているの？」

克行から視線をそらすことなく麻美は挑戦するような口ぶりで言った。

「——まさか！　俺がなんで麻美を殺さなきゃいけないんだ！」

思わず克行は立ち上がり怒鳴った。

「俺はおまえのことを愛してるんだ。俺がおまえのことを殺すわけないだろう！」

「克行……」

「俺はおまえのことを守りたいんだ。ほら、この通りほかのおまえを狙う奴らのリストだってある。こいつらを殺してでもおまえを守ってやる！」

克行はポケットのなかから殺人者リストを取り出した。

「リスト？」

「ああ、こいつだ。ここに載っている俺を含めた6人が麻美の名前に入ったリストを持っている」

リストを麻美に手渡すと彼女は驚いたようにリストと克行を見比べた。

「どうして？ どうして克行がこんなものを持っているの？」

「……市役所に勤めてる友人が調べてくれたんだ」

涼子の名前を口に出すのは避けた。先日の夜のことを思い出され、克行は心のなかで小さく麻美に詫びた。

「友達？……その人、計画に関わっているの？」

「去年、実行委員になったらしい。けど、今年は一切関わっていない。月曜に特権者全員を集めての説明会があったんだが、その帰りに偶然会って、事情を話すと調べてくれたんだ。そいつが言うには今回の特権者計画にミスがあったんだらうって。だから、麻美の名前がリストに載ったんだらう」

「ミス？」

「ああ、まったく馬鹿げてる。そんな市役所のミスなんかで人の命がむざむざ危険にさらされるんだからな！」

克行はうろろと部屋を歩き回りいらだちを押さえようとした。

「克行……」

少しの間、麻美はリストをじっと見つめて何やら考えこんでいたが、やがて克行を見つめつぶやいた。

「え？」

「克行はどうするつもりなの？」

克行にはその麻美の姿が意外にも冷静に映っていた。

「だから……おまえを——」

「私を守るって言ったけど、いったいどうやって私を守ってくれるの？」

「……」

麻美の言葉に克行は言葉を詰まらせた。ポケットに忍ばせてある拳銃が一瞬鉄の固まりのように重たくなる。

「特権者優遇計画が終わるまで一日二十四時間ずっと私についててくれるの？」

克行は再び麻美の前に座り込んだ。

「いや……実際に計画による殺人が一番多いのはクリスマス・イブからクリスマスにかけての二日間らしい。だから、その二日間さえ外出しないようにしていればおそらくそれほど危険なことはないだろう」

「でも完全に安全じゃないわ」

その通りだと克行は思った。現に立花のように特権者優遇計画に生きがいを感じているような奴もいる。

「ああ……」

「克行……」

じつと麻美の目が克行の目を見つめる。どこか不安気でその不安が克行に何かを訴えている。麻美がその瞳の奥に何を考えているのか、それを想像するの怖かった。

十一時五十四分。

「心配するな、麻美のことは俺が守ってやる。誰にもおまえのことを殺させたりしない。誰にもだ……」

ぎゅっと麻美の体を引き寄せ力一杯抱きしめる。涼子とはどこか違うぬくもりが伝わってくる。

そうだ、俺が愛しているのは涼子じゃない。麻美なんだ。

克行は改めて麻美への愛を認識した。そして、彼女のことを命をかけても守ろうと決意していた。その克行の決意をはっきり受け止めたのか麻美は克行の腕の中で大きく頷いた。

時計の長針はついに短針に追いついた。

今、特権者優遇計画が始まる。

死のクリスマスイブ・11

十一

十二月 十八日 (月)

オフィスは今日も変わりなく動いている。

あの日以来、部長の桜川から特権者優遇計画について尋ねられることもない。おそらくこの社内にも克行の知らない特権者や特命者がいることだろう。だが、誰一人として決してそんなことを口にしようにしない。皆、特権者優遇計画のことなど忘れてしまっているのだろうか、それとも密かに探りあっているのかもしれない。克行はそのことに不気味な怖さを感じていた。

けれど今、自分に直接的に関係しない者たちに関わっている暇はない。今の克行にはどこで誰が殺されようとまったく無視することの出来る自信があつた。

克行はこれからやるべきこと、言うべきことを頭のなかで繰り返した。

(やるしかない！)

何度も自分自身に言い聞かせたことだ。

そのことは特命者リストに麻美の名を見たときからたえず頭のなかにあつた。だが、いつもそれは現実離れしていることのように思えてしかたなかった。しかし、昨夜麻美と会ったことで克行の心も一つに決まつた。

特権者を殺す。麻美の名の入った特命者リストを持つ特権者たちを殺す。それが麻美を守る最も有効な手段なのだ、という考えが強い決意として克行の心のなかにはつきりと表示されていた。

克行は電話を自分の机に寄せると、外線発信のボタンを押した。

慎重深く相手先の電話番号をダイヤルしてゆく。

——はい、I M Mでございます。

いつもの女子事務員の声が電話口から聞こえてくる。

「K C Sの者ですが、いつもお世話になっております。おそれいりますがシステム課長の波川さんいらっしゃいますでしょうか？」

——少々、お待ちください。

女子事務員の声が跡絶え、電子音が音楽を奏で始めた。克行はじつと汗ばむ手で受話器を握りしめながら電話口に波川が出てくるのを待った。やがて、ぷつりと電子音が跡絶えた。

——はい、お電話変わりました。

波川の声だ。

「もしもし、風間です」

——なんでしょう。

「今度のシステムのことでちょっとお話したいことがあるんですが、今週時間ありますでしょうか？」

声がうわづるのを押さえるように克行は事務的に仕事の話を切り出した。

——今週ですか？ 何か問題でも起きたんでしょうか？

そう、大きな問題が起きている。しかし、それは仕事じゃない。それを解決するためには何としてもあんたに会わなきゃならないんだ。

「いえ、問題というほどのことでもないんですが、システムの概要がまとまりましたので、それをチェックしていただきたいと思いますして……」

——そういうことでしたら、風間さんにお任せしますよ。私が見てもねえ。そうだ、うちの菅原君、彼ならあなたも知っているし、彼とではどうだろうか？

波川ののりくらりとした答えが帰ってくる。いつもそうなのだ。いつもシステム開発が始まる時にはそう言って他人任せにし、いざシステムが出来上がる頃にいくつも難題を持ちこむのだ。だが今度は逃がすわけにはいかない。今度のミーティングはこれまでのよう

に代理の人間では役に立たない。波川自身でなければならぬのだ。
「いえ、今回だけは波川さんでないと…… K I N I C の坂本係長も出席していただくようお願いしてますので」

もちろんまだ坂本には連絡はいれていない。だが、そう言うことによつて波川に逃げることの出来ないものだという気持ちを持たせることは出来る。それに、坂本にもこれから連絡して必ず出席させるつもりなのだ。

波川と坂本、彼ら二人を除いては今度の打合せは何の意味も持たない。そうだ、あくまで二人同時でなければならぬ。

——坂本さんか……それじゃ、行かないとねえ。

「いつがいいでしょうか？　なるべく早いほうがこちらとしては都合がいいんですが」

そうだ、殺るならば早いほうがいい。それだけ麻美の危険が少なくなる。

——そうですね。明後日、水曜の午後ならお会い出来ますけど。

二日後、その期間がもどかかった。

だが、涼子が持つてきてくれたこれまでの「特権者優遇計画」の統計によれば最も殺人が行なわれるのは最終日であるクリスマスイブ。平日に行なわれる可能性は極めて低かった。

「水曜ですか。わかりました。それでは水曜の午後そちらにお伺いいたします」

——よろしく。

「よろしくお願いいたします。それでは失礼いたします」

立て続けに言葉を発し、克行は電話を切った。会う日が決まった今、いつまでも長話をしている必要はなかった。

「どうかしたのか？」

その声にふと顔をあげると不思議そうに克行を見つめている西崎の目とあった。

「いや……なぜ？」

「だって、今回のシステムは始まったばかりで設計書だってまだ完

全にはまとまっていけないじゃないか。あんなものを見せるために波川さん呼び出したんじゃないか、かえって文句言われるんじゃないのか？」

西崎はパソコンを叩く手を休め克行に尋ねた。

「設計書がまとまってからじゃかえって遅いだろう。概要はだいたいままとまってる。あれだけ出来てれば叩き台にはなる」

克行は心を読まれないように注意しながら反論した。

「そりゃ、そうだけど……おまえ、いつもだったらもう少しまとまっってから打合せに入るだろう。それにあんまり上の人間じゃかえって開発の邪魔になるって坂本さんなんてむしろ避けようとしてたじゃないか。何で今度に限って——」

「少しやり方を変えてみただけだ。それよりおまえに頼んだ資料、大丈夫なんだろうな。明日までには終わらせてくれよ」

西崎に追求されるのを恐れ克行は冷たく突き放した。

「藪蛇だったな」

西崎はそんな克行の気持ちを知るはずもなく、明るく笑い飛ばすと再びパソコンのキーボードを叩き始めた。

（そうだ、藪蛇だ。おまえは黙って見てればいい。水曜を過ぎればおまえも現実を知ることが出来る）

現実。まだ西崎は自分の名前が特命者リストに入っていることを知らないのだろうと克行は想像した。知っていればそうやって笑っていられるはずがないのだ。

「殺人罪」

確か西崎の特命者になった理由にはそう書かれていた。

（いったいこいつが誰を殺したというんだろう？）

無言でパソコンに向かう西崎を克行はぼんやりと見つめた。

西崎とは入社した頃から同じ課でずっと働いてきた。仕事の能力はもとより、プライベートのこともかなり西崎については知っているつもりだった。だが、殺人を犯すような危険な一面だけはこれまで見たことがない。いつも温和でどちらかというとトラブルをまと

める部類の人間だと思っている。その西崎がこともあるうに殺人罪で特命者リストに名前を載せられている。

（これもミスだろうか？）

克行は自分自身に問いかけていた。出来ることなら西崎のことも救ってやりたかった。だが……

「西崎」

克行はふと西崎に声をかけた。

「なんだ？」

「おまえ、人を殺したことあるか？」

馬鹿な質問だと思った。そんなことを聞いて何になるのかと自分で自分をあざ笑った。けれど、実際に聞いて見たかった。「殺していない」という答えを聞きたかった。

西崎はそんな克行をあっけにとられたようにぽかんとして見つめていたが、やがて、にわかに笑い出した。しかし、その笑いが西崎の顔から遠ざかった時、西崎の顔からは笑いは消え去り変わりにこれまでに見たこともなかった悲しみに包まれたような顔が残った。

「何でそんなこと聞くんのだ？ おまえ、何か知ってたのか？」

「え？」

その西崎の答えに克行はうろたえた。

「誰かに聞いたのか？ 噂なんて変な風に飛び回るからな」

西崎はそう言うってから回りを見渡した。幸い近くの席には誰もいない。時折離れたところにあるプリンターの音がフロアに響くのがやけに大きく聞こえる。社員の多くは客先に出払っているのだ。

「噂？」

自然、克行の声も小さくなる。

「噂を聞いたんだろ。俺と彼女のこと」

「彼女って？」

「おまえも知ってたろう、笹野加代子と俺が付き合ってたってこと」

「笹野加代子？ ああ、あの受付の子か」

以前、克行と西崎が一緒にしていた仕事先の受付嬢を克行は思い

出した。そういえばその後、西崎と彼女がつき合っているというのを西崎本人から聞いたことを思い出した。

「そう、ちょうど去年の今頃かな？ あの間からつき合い始めたんだ」

「彼女がどうかしたのか？」

「死んだんだよ」

「死んだ？ いつ？」

「今年の八月」

「八月？ それじゃ——」

今年の八月。その頃克行は自社に来ることは少なく、ずっと客先で仕事をしており、西崎ともほとんど会社の誰とも会ってはいなかった。ただ、西崎が車で事故を起こしたということだけは噂で聞いたことがあった。

「そうだ、あの時の事故でだ」

「けど、おまえはたいしてケガもなかったって聞いたぞ」

「俺はな。だいたい事故の原因がスピードの出しすぎとか、酔っ払い運転とかそんなものじゃなかったんだ。信号待ちをしているところに前に止まってたトラックの後ろに積んであった鉄材が転がり落ちてきたんだ。しかも、運悪く彼女の座っている助手席めがけ突っ込んできたんだ。俺はガラスの破片をあびただけ。ところが彼女は即死だった」

「そうだったのか……」

「ただ、彼女の親がうるさくてな。知らなかったか？ 彼女、市会議員の娘だったんだ。しかも一人娘とくれば殺されたと思うのも無理はないけどな」

「議員の娘？」

「ああ、俺はあんまり政治家なんて知らないけど知ってるやつらに言わせりやかなり有名ならしいぜ。おそらくそのへんから俺が殺したって噂が出たんだろう」

西崎は暗い視線をずっと落とした。

「悪かった……」

克行もまた何と書いていいかわからずに言葉を切った。
克行の心のなかに新たな思いが広がりとつあった。

死のクリスマスイブ・12

十二

その夜、帰宅後克行は夜遅くまで特権者優遇計画のそれぞれのリストを食い入るように眺めていた。

特権者リスト、特命者リスト、そして克行に関わっている殺人者リスト。これらのリストがもたになって次々と人が殺されてゆく。しかも……

（しかも、あんなことで……）

西崎の悲しげな眼差しが思い出される。

——彼女は即死だった。

おそらくリストにある「殺人罪」というのはその事故のことを言っていることに間違いないだろう。

特権者には選ばれるのは国にとって、というよりも政治家にとって都合のいい人材。そして、特命者には選ばれるのはそれに反する人たち。

そんなことが許されていいのか。

おそらく政治家である父親が娘の敵討ちのつもりで特命者として西崎を登録するように手を回したのだろう。西崎だけじゃない。特命者リストに載っている者たちも皆、罪を犯したわけでもない普通の人々だ。それなのに一部の者たちに不快に思われるだけで殺されなければいけない。

克行はしだいにやり場のない怒りにかられていくのを感じた。

R R R……

十二時を過ぎた頃、突然電話が鳴り出した。その電子音の響きに克行はびくりと身をすくめた。それはどことなく悪魔の呼び出し音

のように思えた。この電話をとった直後悪魔が俺の耳に囁きかけるんだ。「おまえの魂をよこしやがれ」って具合にだ。そして克行の感じた予感はあるがち間違ったものではなかった。

「はい、風間です」

——もしもし、特権者優遇計画委員会のものですが。

それは一日の終わりに特命者の死を伝える市役所からのものだった。今夜から一週間この電話に悩まされることになるだろうことを克行は知っていた。どこか神経質そうな尖った声。あの牛乳瓶の底のような眼鏡をかけた職員の顔を克行は思い出した。

「……はい」

（こんな時間まで働いてるのかい？ 人の死を伝えるのはそんなに楽しいのか？）

心のなかで克行はあの男を皮肉った。奴の尻には黒い尻尾がはえているに違いない。そして頭には……

——本日、除名者が記録されました。あなたのリストからの削除をお願いします。

「削除者？ もう？」

滑稽な悪魔の格好をさせた職員の様子は消え、克行の脳裏に自分の見知った人たちの顔が浮かんだ。しかし、電話の声はそんな克行の動揺など構う様子もなかった。

——名前を呼びあげます。あなたのリストからの削除者は特命者ナンバー0024・笠木義治。以上です。

電話はそれだけでぷつりと切れた。

削除者、つまり殺されたのは一人だけ、しかも克行の知らない人物だった。克行はほんの少しほっとしながら自分の持つリストに印をつけた。彼らの死は滅多なことがない限り殺人事件としても一般のニュースとしても伝えられることがない。もしニュースとして伝えられることがあるとすれば、それは克行が以前出会ったような狂喜の事件だけだ。そのことを考えるとニュースとして出ないのはむしろ平和な証拠といえる。

そうだ、これが今の平和なんだ。

この人はなぜ殺されなければならなかったんだろう。六十一歳と書かれた男の欄を見つめながら克行はやりきれない思いにかられた。クリスマスを前に孫たちへのプレゼントを買いこみ、それを手渡すことを楽しみにしていたのかもしれない。それともクリスマスのことなど意識することなくただ毎日を過ごしていたのかもしれない。いずれにしても「特権者優遇計画」などというものが頭にあったはずがない。おそらく自分自身わけがわからないまま、ひよっとすると「特権者優遇計画」そのものを知ることもないままに殺されたのかもしれない。突然、拳銃を突きつけられ、死を予感する間もなく死に恐怖することもなく殺される。昨日まで何事もなく暮らした人も一晩が過ぎれば一枚の紙切れのために冷たい屍に変わっている。あまりに簡単すぎる死じゃないか。

（ごめんだな、俺はそんな死にただだけは嫌だ）

それならどんな死にかたが望みだ？ 麻美のためなら死ぬるか？ 麻美を守ると決意していながらも、それでも彼女と接することが怖くなってしまっている。麻美の不安な視線がいつも疑い深く克行を見ているように思えて仕方無い。

疑心暗鬼。克行の心にも麻美の心のなかにも小さな鬼が生まれている。麻美に計画のことを伝えて以来そのことがひしひしと感じられていた。

（無事に生き残れたとして俺たちはこれまで通りやっていけるだろうか）

冷たいものが心を走る。まるであり地獄に落ちてしまったようだった。決して這い上がることも出来やしない。

克行は自分の持つリストと特命者マスターリストを比較した。そして、それぞれの特命理由を見ていった。だが、どれも漠然としたものばかりで具体的な理由は書いてはいなかった。ただ、約半分をしめているのは「高齢」という二文字で、これだけは克行にもどうということか想像出来た。今や世界一の高齢化社会となった日本。政

府は今、なんとかしてこの問題をクリアしようと躍起になっている。この特権者優遇計画もおそらくそれが大きな一因となっているのだろう。

部長の桜川には「反逆罪」となっていた。克行は先日、桜川を思い出した。桜川は何かに脅えているようだった。自分が特権者として登録されていることも想像していた、そんな素振りだった。

いったい部長は何をやらかしたんだ？ 部長にも聞いてみるべきだろうか？

それが危険な考えだということは自分でもわかっていた。

意味もなくそんなことを尋ねれば、おそらく克行が特権者として選ばれたことに桜川は気づくだろう。そして、逆に桜川の名前が特命者リストにあることを追求されるに決まっている。その結果起こるのであるということを十分予想出来る。しかし、今年の「特権者優遇計画」の流れを調べる意味でも桜川が特命者選ばれた理由を知っておくというのは非常に大切になってくる。

それならば明後日のことが過ぎてからでも遅くはない。

その後ならば克行が特権者選ばれたということは仕事を通じて克行を知る人間ならば皆に知れ渡ることだろう。そのなかには当然、桜川もいる。

明後日、克行は同じ特権者である坂本と波川の二人を殺害するつもりでいる。二人とも特権者として麻美を殺す位置にあるからだ。その二人を消すことにより麻美の危険も一部消すことが出来ると克行は信じていた。

俺は本当に人を殺せるんだろうか。

自分が置かれている立場が未だに信じ切れない気持ちがあった。

死のクリスマスイブ・13

十三

十二月 十九日 (火)

涼子から電話があつたのは火曜の夜。克行がマンションに帰りついたのは十一時を少し回った頃だった。帰りつくと克行は何よりも早く、明日のための準備を始めていた。

——克行？

携帯電話を取ると克行の耳に、慌てている様子の涼子の声が飛びこんできた。

「ああ、涼子か？　どうかしたのか？」

——あのことについてだけ……

あのこと。すでに涼子からの電話というだけで特権者優遇計画のことだということは予想出来ていた。

「そのことについて、俺も話したいことがあるんだ。特命者のなかに会社の同僚がいるんだが、そいつが特命者リストに載せられた理由がわかったんだ。それは——」

——克行！

西崎のことを話そうとする克行を涼子が制した。それはまるで克行の言うことがすでにわかっているかのようだった。その声に克行はただならぬものを感じ取った。

「どうしたんだ？　何かあつたのか？」

——もう忘れて欲しいの。

「なんだって？」

意外な涼子の言葉に克行は耳を疑った。

「忘れろってどういうことなんだ？」

——特権者優遇計画のことにはもう首を突っ込まないで！

強い口調で涼子は繰り返した。

「そ、そんな……首を突っ込むな？ 今更何言ってるんだ？ だいたい好きであんなことに首を突っ込んでるわけじゃない。それはおまえだってわかってるだろう。俺は特権者選ばれたんだぞ。日曜に突然通知をよこされ、市役所に呼ばれ拳銃を渡され——俺がそんなことを望んだと思ってるのか？ わかってるのか？ それに——」

（それに明日はそのせいで人を殺さなければいけないんだ）

その一言が漏れそうになり、克行は慌てて口を噤んだ。いくら涼子といえどもそのことはまだ言わないほうがいい。テーブルの上のせてある拳銃にちらりと視線を向けた。

しかし、涼子の口調はやはり変わらなかった。

——克行の気持ちはわかるわ。でも特権者選ばれたことなんか忘れて欲しいの。特権者の権利を放棄しても構わない。とにかく自分を守ることで考えればいい。それ以外は何も考えないで。

「おまえ、何を言ってるんだ。何かあったのか？」

思いもよらぬ涼子の言葉に克行は焦りを感じていた。

——何でもないわ。とにかく忘れて。それが克行にとって一番いいのよ。

「そんなことが出来るわけないだろう。俺が特権者選ばれてるだけならともかく、麻美が特命者選ばれてるんだぞ」

——麻美さんのことは私の任せて。

「任せる？ 馬鹿なことを言うな。理由もわからず今更手をひけるもんか！」

「……」
「涼子！」

——たぶん、あの人は大丈夫だと思う……

言葉の一つ一つを確かめるように涼子は言った。まるで克行に知られたくないことがあるかのようだ。

「何だって？」

——あの人は大丈夫。あの人が特権者に殺されることはないわ。

「何でそんなことが言えるんだ？ おまえ、何かわかったのか？」

——い、いや……そうじゃないけど。

涼子の声がどこかたどたどしい様子に変わった。何かに脅えている？ いや、違う。いずれにしても何かを隠している。

「涼子！ いったいどうしたんだ？」

——何でもないわ！ いい？ あの人のことを本気で守りたいなら、なおさら計画のことを知ろうとしないこと。計画が終わるまで、そして終わってから今後いっさい計画には関わりあわないで。私ももう調べるのをやめるわ！

脅えをはね飛ばすような口調で涼子は怒鳴り、克行の耳を貫いた。だが、そんなこともいっこうに気にすることなく、克行はますます受話器を耳に押しつけた。

「何かわかったんだな？ いったい何がわかったんだ。麻美が殺されないってそれはどういうことなんだ？」

——何もかも忘れて！ 私が今日言ったことも、これまで調べたことも全て特権者優遇計画に関することは忘れて！ そのほうがあなたのためよ。私ももうあなたに連絡はしない。あなたもしばらくは私と会わないようにして！

最後の言葉にありつただけの強さをこめて涼子は電話を切った。

克行は思いもかけぬ涼子の言葉に、しばらくの間受話器を置くことも忘れ茫然と考え続けていた。

いったいどういうことだ？ 特権者優遇計画のことを忘れる？

麻美は殺されない？

いったい涼子は何を考えているんだ？ いったい何があったというんだ？

どう考えてもわからなかった。

涼子は今年の特権者優遇計画にミスがあったのだろつと言った。そのミスのために麻美の名前が特命者リストに記載されることになったのだろつとも言った。特権者優遇計画についてのシークレット

ファイルがあり、そのファイルを調べてやるとも言ってくれた。あれはつい先日のことだ。そして、今日涼子は手のひらを返したように計画のことを忘れるという。麻美が殺されることはないという。シークレットファイル？

先日、涼子が言っていたシークレットファイルの存在がふと頭をよぎった。もし、涼子がシークレットファイルを覗いたとしたら……。

克行の心のなかに真っ黒な雲が広がり始めた。

もし、克行の考えが正しければシークレットファイルのなかには驚くほどの重大な何かが隠されていたことになる。しかも、それは克行や麻美にも関わってくる可能性すらあるのだ。

いったい何が隠されていたんだ？

克行はツーツーと鳴り続けている受話器を見つめた。こちらから電話してみようとボタンを押した。発信可能の長い発信音が受話器から聞こえてくる。

だが、ダイヤルの途中で克行は思い止どまった。

おそらく今、電話したところで涼子は教えてはくれないだろう。

彼女の性格を克行はよく知っている。一度口に出したことをそう簡単に変えるはずがない。

克行は携帯電話を置くと、その手に拳銃を握んだ。

（明日のことはやめたほうがいいんだろうか……）

決心が鈍っていた。そもそも自分が人を殺すということ自体が現実離れしているようにも思えた。もしやっただとしてもそれが成功する可能性など極めて低い。

だが、すぐに克行はその考えを打ち捨てるように強く頭を振った。臆病にならないほうがいい、へたに臆病になるとそれこそ失敗する。

それは明日の計画を実行しようと決めたときからずっと思っていたことだ。戸惑いは戸惑いを生み、その戸惑いが最終的に失敗を伴う。それはどんなことでも同じことだ。しかも今回、失敗は許され

ない。

麻美を救えるのは俺しかない。

克行は自分自身に暗示をかけた。暗示をかけることによってぐらつく決心を食い止めたかった。それに「死」という大きな危険が自分たちを包んでいるのは事実だ。涼子の言葉に裏づけがされない限り、まるつきり信じることなど出来るはずがない。そしてそれはそのまま麻美の危険が消えていないことにつながる

克行は弾倉を外すとケースから弾丸を取り出し一発づつ丁寧に装填していった。全部で六発、ナンバーの掘り込みである弾丸は全て拳銃のなかに装填された。弾丸が装填されることによって拳銃がなおさら重くなっていくような感じを克行は覚えた。

立ち上がって窓に向かって構えてみる。

自分の姿がガラスに映って見える。思わず怖くなってベッドに拳銃を投げ捨てた。それは自分を襲う恐怖ではなく、まったく逆のものだ。自分自身の心のなかにある殺意に対しての恐怖だった。心のどこかで人を殺す欲望が芽生えそうな気がした。

（違う……そんなつもりじゃない）

克行は懸命に自分の心に反発した。

死のクリスマスイブ・14

十四

十二月 二十日 (水)

I M Mはもともとはテレビやビデオに使われる電子部品を製造してきた。しかし、五年ほど前からパソコンや大型コンピュータなどに使用される半導体にも手を出し、今や大手メーカーと肩を並べるほどの力になってきていた。その原動力になってきたのがI M M技術研究所であった。

I M M技術研究所は本社からの技術員を含め約五十名ほどで、本社の片隅にある小さな七階建てのビルのなかにあった。その一部にシステム課が存在している。

克行がそこを訪れたのは午後二時近くなってからだった。

あまり早く訪れては不自然になるのではと意識的に着くのを遅くしたのだ。何よりもK I N I Cの坂本が到着していなければ波川と二人で時間を待たなければならぬ。それだけは避けたかった。

波川のいるシステム課、課長室は四階にある。

克行は受付で入館証を受け取り、階段で四階まであがっていった。エレベーターは備わってはいたがそれは備品の運搬用に使われており社員のほとんどは階段を利用していた。普段は面倒くさいと思える階段が、今日は一段一段をあがっていくことによって心が引き締まって行くのを克行は感じた。

四階には波川のいる課長室と資料室、そして会議室がある。会議室は一部ガラス窓になっており廊下からもなかの様子を見ることが出来る。会議室はそれほど広くはなく、約十五名から二十名ほどが入れるように作られている。中央には楕円を描くように長机が並べられている。

克行が着いた時、波川は会議室の一番奥である窓のすぐ近くの席にいた。すでに坂本も着いており二人で話しこんでいた。どうやら二人の趣味であるゴルフの話題らしい。二人がそろっていることに克行はとりあえずほっとした。

二人は克行を見つけると立ち上がった。

克行は部屋に入るとゆつくりとドアを閉めた。

「どうもお忙しいなか申しわけありませんでした」

階段をあがりながら何度も何度も頭のなかで繰り返したセリフを口にした。どんな言葉であろうと相手に不信に思われてはいけない。そんなことがあれば全て駄目になってしまう。何よりも自分の決意が揺らいでしまうようで怖かった。

二人はそんな克行に別に不信を抱いた様子はなかった。

「いえ、とんでもない」

坂本はにこやかに笑いかけた。

株式会社KINICのシステム開発部係長である坂本とは二年前、克行が坂本のもとで行われているシステム開発を手伝ったことで気に入られそれ以来いくつかの開発を二人で行ってきた。

坂本も今年四十歳になるが、今でも人事管理や営業管理に留まることなく開発にも携わっている。

「今日はどういう用件でしょう。確か設計の概要についてということでしたが……。それにしても我々三人だけで？」

波川がほんの少し怪訝そうな顔をした。いつもは研究所の作業着を着ていることが多いが今日は坂本が来ているせいか紺のスーツで身を固めている。太った体がやけに窮屈そうに見える。

「ええ、あくまでも概要についてですから……」

克行は波川に向かうような形で椅子につくとすぐに書類を鞆から出した。

「しかし、私が見てもわかるかねえ。他に誰か呼んだほうがいいんじゃないかね」

「いえ、今回は波川さんだけで結構です。この三人で話したほうが

かえって正直に話せるでしょう」

（逃がすものか。ここまでできてしまったんだ。もうやめることは出来ない）

いつもは笑い飛ばしてしまえる波川の言葉に、今日は怒りがこみ上げるのを克行は感じた。

克行の心のなかに殺意が広がっていく。そんな殺意を押し包むように克行は仕事を押し進めた。雑談をするほどの余裕はなかった。

自社でコピー済みの書類の束を波川、坂本の二人に手渡す。書類のほとんどがそれほど重要でない、これまで話し合われてきたものが書かれているだけのものだった。おそらく書類を読み終われば、そのことに二人も気づくことだろう。だが、書類を全て読ませるつもりなどなかった。

二人が書類に目を通しはじめる。あとはいつ計画を実行するか、それだけだ。装填済みの拳銃がポケットのなかで克行の殺意の実行を待っている。

（殺せるのか？ 本当に？）

頭の隅で正直な恐怖感がふと克行の心にささやく。

（殺れるさ、俺にだって人を殺すことくらい出来る。麻美のためだ、彼女の命を守るためだ。ためらうことなんかない。この二人も特権者として平気で人を殺すんだ。いや、もうすでに殺しているかもしれない。ここでこの二人を殺すことが多くの人の命を救うことになるんだ）

二人は書類に見入っている。

克行はそつと右手をポケットへ向けて動かした。ポケットの外から拳銃に触れる。

それはしっかりとそこに存在していた。

わかつてはいるものの実際に触れるとびくりと指がびくつく。克行は二人に気づかれないようにポケットのなかに手を滑り込ませ、拳銃を握った。

（気づくな、最後まで気づくな）

祈るような気持ちで二人を見定める。波川、坂本の二人が特権者としてお互いを知っている可能性だってある。そうすれば当然、二人の意識のなかに特権者優遇計画があるはずだ。そして、それにともなう危険性というものも二人とも心得ているだろう。

克行は最後まで二人が気づかないように祈った。

人を殺す。麻美を守るためとはいえあまりにも生々しい殺人は行いたくなかった。

克行は思いきって立ち上がろうとした。だが、その瞬間ドアをノックする音が克行の行動を止めた。

波川も坂本もその音に顔をあげる。

「失礼します」

事務員の吉村智子がコーヒーを運んできた。何度も来ているため、克行の好みも坂本の好みも彼女にはわかっていた。彼女はゆっくりとした足取りで入ってくると軽くおじぎをしてからコーヒーを配りはじめた。おそらく波川が彼女にこの時間になったら持つてくるように指示していたのだろう。

（早く行ってくれ！ 今だ、今しかないんだ。今を逃したら俺の気持ちも揺らいでしまう。頼む！ 早く行ってくれ！）

克行は無表情を装いながら懸命に彼女の緩慢な動作を呪った。しかし、吉村は克行の気持ちなど知るわけもなく相変わらずゆっくりとした動作で坂本、克行、波川の順にコーヒーカップをテーブルにのせてゆくとやっと背を向けた。

だが、次の瞬間彼女は振り返り不思議そうな視線を克行に向けた。
「どうかしましたか？」

「え？」

背筋がぞつとするのを克行は感じた。

「顔色が悪いわ」

「そ、そうですか……」

克行は両手で顔を軽く擦った。

「具合でも悪いんですか？」

坂本も顔をあげ克行を見ている。その坂本の声に波川も顔をあげる。

「……風邪かな、昨夜から少し熱っぽいんですよ。でも、たいしたことないから大丈夫です」

克行は無理に笑って見せた。

「そうですか……、もし具合が悪いようなら言ってください。薬ならありますから」

吉村は優しい笑顔でそう言うと、やっとドアへ向かって歩き出した。それに合わせるように波川、坂本の視線も再び書類に戻ってゆく。

彼女は再び一礼してドアを閉めた。

克行の鼓動が再び高く鳴り始める。

波川、坂本の二人も彼女の言葉を忘れ再び書類へと目を戻している。

テーブルの上にのせてある左手が微妙に震えている。

（何を怖がっているんだ。落ち着け、落ち着くんだ！）

もう邪魔にはいるものはない。もしあったとしてもそれでも行動してしまえばいい。しょせん、ここで起こることを隠し通すことは出来ないのだ。

克行は右手をポケットのなかの拳銃を握るとゆっくりと立ち上がった。

影が坂本にかかり、坂本がゆっくりと顔を上げる。その坂本の顔面に狙いをつけ、克行は拳銃を向けた。まるで拳銃を握ったその手が自分のものではないように感じられた。なぜ、俺はこんなものを握っている？ 自分自身に問いかけたくなった。もっと不思議そうな顔をしているのが坂本だった。実際に何が起こったのか把握していない。波川はまだ書類に目を落としている。

坂本の顔が現実を掴み、急激に歪む。

（殺せるのか？）

（殺す！）

（殺らなきゃ——）

（望みは……）

（「死」）

（でも——）

（殺せ！）

（「メリークリスマス」）

サンタの声が聞こえた。

それは引き金を引くというよりもギュッと右手を強く握りしめたというほうが近かっただろう。

しかし、それでも拳銃はしっかりと克行のなかで小さく跳ね上がり火を吹いた。

克行の頭のなかが一瞬空白になった。音という音が跡絶え、銃声さえもまるつきり聞こえなかった。ただ、握っていた拳銃がやけに熱く感じ、その瞬間に椅子から坂本の体が頭から転げ落ちてゆくだけのしつかりと見えていた。

（俺はついに殺したんだ）

転げ落ちた坂本の足が長机を蹴り上げ、跳ね上げられたコーヒークップが宙を舞って床に落ちて割れるまで、克行はまるで夢を見ているような気分浸っていた。市役所の職員が拳銃の説明をした時の人形の首が吹き飛ぶ場面が頭に思い出された。

「か、風間……さん！」

波川は椅子から立ち上がることも出来ず、目を丸くして克行を見つめた。声がうわずり、口が意味もなくぱくぱくと動いている。

我に返ると克行は、すぐに震える右手を波川へと向けた。そして、そうしながらもちらりと横目で倒れた坂本の状態をうかがった。今にも坂本が立ち上がり、襲いかかってくるようなそんな錯覚を覚えた。

坂本の……いや、坂本であつた肉体は椅子から投げ出され、力をなくしている。顔はさっき撃たれる瞬間に克行を見つめたままで、違うところといえばその額の中心に赤い穴が空き、後頭部から流れ

た血がカーペットを濡らしているということぐらいだろう。

（間違いない。死んでる）

克行は改めて人を殺したことを実感した。

「ど、どうということなんだ？」

波川は相変わらず、克行の行動が理解出来ないらしく震え続けている。

「あんただってわかってるはずだ」

急がなければいけない。そう思いながらも克行は波川に答えた。まるで酔っているかのように視界がぐるぐると回って感じる。

微かに吐き気がしていた。

「何を言ってるんだ？」

「あんただって本当はわかっているんだろう。今がどういう時期かを！」

そうすることによって吐き気を押さえようとするかのように克行は声をあげた。その言葉に波川の表情が変わる。だが、それは恐怖へではなく安心へのものに見えた。

「そ、そうか……風間さんも特権者に選ばれたんだね。だが、私を殺すのは間違ってる。実は私もあんたと同じ特権者なんだ」

「……」

「さあ、拳銃をしまってくれ。そんなもの日常から持ち歩くものじゃないだろう。そうか……坂本さんは特命者だったのか」

波川は恐怖から救われた喜びからか、微笑みながら立ち上がった。そして楽しい表情で坂本の死体を覗き込んだ。

「だがねえ、いくら特命者だといってもこんな殺し方はまずいんじゃないかね。お互い顔を知っているし、仕事の付き合いもあるわけでしょう」

その微笑みが克行には許せなかった。怒りが吐き気とともに沸き上がってくる。

「何か勘違いしているんじゃないですか？ 坂本さんは特命者じゃありませんでした」

「特命者じゃなかった？ それじゃどうして？ そりゃ特命者でなくとも殺すことは出来るけど——」

「逆だよ。坂本さんは特権者だったんだ」

「なんだって？」

「特権者だからこそ殺したんだ」

「……」

「あんたも同じだ」

波川の顔に再び恐怖の表情が戻る。

「馬鹿な、特権者が特権者を殺すなんて……殺されるのは特命者なはずだ」

「特権者を殺していけないなんていう規則だってないだろう」

右手が震える。克行は拳銃にそつと左手をそえた。震えていることを波川に知られなくなかった。

「君はいつたい何を考えているんだ！ 特命者は殺されても当然の奴らなんだ。わかってているのか？ 我々とは違うんだ！」

「誰が決めた？ 役所が勝手に決めつけたただけだ。特権者だろうと特命者だろうと同じ人間だ。俺に言わせれば、きさまみたいな奴こそがクズだ。きさまのような奴こそ死ねばいいんだ」

「それじゃ君はどうだ！」

波川が言い返す。「君だって特権者なんだろう！ 坂本さんだって殺したじゃないか！ 偉そうなことを言って、君も人殺しだ！」
「そうさ、俺も人殺しだ。けど、他の人ならともかくきさまたちなら殺せる。人殺しを喜ぶようなきさまたちならな！」

心臓に狙いをつける。

「や……やめろ！ 頼む！ いったい何が要求なんだ？ 金か？」
逃げ出すことも出来ず波川はその場に崩れ落ちた。坂本の死体のすぐ側で祈るように手を合わせ、ちらちらとドアのほうを盗み見ている。

「頼む！ 金が欲しいならいくらでもやる。だから助けてくれ。私はまだ死にたくないんだ」

組んだ手で心臓が見えなくなり、克行は狙いを額へと移した。

「金なんかはいらん。欲しいのはきさまの命だ」

「ひいひい！ やめろ！ やめろ！ やめろおおおおお！」

克行の気が変わらないのを悟り、波川は這いながら逃げ出した。その背後から克行は波川の頭のあたりへ狙いをつけ、引き金を絞った。

再び克行の手のなかで拳銃が跳ねた。弾丸は後頭部から脳を突き抜け、波川の体はうつ伏せに床に落ちていった。今度もまた克行には拳銃の爆発音は聞こえなかった。その代わりに弾丸が頭蓋骨を貫く音と、ぐちゃりと脳を通過する音が聞こえてきたような気がした。

（や……やった……）

克行は拳銃を下ろすと波川へ近づいた。

（よし、死んでる）

波川の死を確認めると克行は火薬の匂いのする拳銃をポケットのなかへ押しこんだ。

今は四階に他に人もいないらしく、拳銃の音も誰にも聞こえずに済んだ。そのことに克行はほっとした。もちろんこの後二人の死体が発見されれば誰が犯人かすぐにわかることだろう。坂本にしても会社に今日の打合せのことは伝えてあるだろうし、何より事務員の吉村に克行がここに来たことを見られている。だが、それでも克行は全てが済むまでは他人に介入されたくはなかった。

波川の死とともに不思議なことに吐き気はすっかり納まり、今ではむしろ完全に落ち着いていることが自分でも感じられた。

克行は坂本の死体まで戻ると坂本のポケットを探った。けれど目的の拳銃も弾丸も見つけることは出来なかった。ここで拳銃を奪っておけば、今後なおさら有利になると思ったのだ。すでに弾丸は二発使い、残りは四発になっている。予想以上に順調に二発の弾丸だけで二人を消すことが出来たものの、それでも弾丸は多いほどいいに決まっている。何よりまだあの立花をはじめ三人が残っている。ふと、坂本の体に触れ、克行はびくりと手を引っ込めた。まだ生暖

かい。

克行は諦めるとテーブルにのっている自分の書類を片付け始めた。少しでも早く部屋を出て行きたかったが、自分がいたという跡を残したくはなかった。

ふいにドアが開けられ、克行は驚いて顔を上げた。

吉村智子だった。逃げることも出来ずに恐怖に顔を歪ませながら床に倒れている二つの死体を凝視している。

コップが落ちて粉々になった。薬の瓶が転がり白い錠剤がばらまかれている。その吉村の姿が再び克行の落ち着きを取り去った。

（落ち着け、落ち着くんた）

克行は書類を鞆にしまうと、ゆっくりとドアに向かって歩き始めた。

「あ……あの……くす…薬を」

吉村が身をすくめるようにしてたどたどしく弁解するのを、克行は冷たい目で見つめながら近づいて行った。

自分が何をしようとしているのか自分でもわからなかった。

（殺すのか？ この人のことも……）

（なぜ？）

（殺しておいたほうが……）

錯乱状態になっていることが自分でもわかった。

「……あの……あたし……」

まるで蛇に睨まれた蛙のように動くことも出来ずにいる。その体は小刻みに、そして激しく震えている。

克行は吉村の前に立つと再びポケットのなかから拳銃を出し、彼女の顔の前に持っていた。

「た……助けて……」

視線が拳銃を見つめ、細かいかすれた声で吉村は訴えた。目が涙で潤んでいる。その顔がやけに美しく感じられた。

「僕は特権者です。わかりますね。特権者優遇計画を知っていますね。今はその特権者優遇計画が実行されているんです。だから、こ

れは犯罪なんかじゃありません」

「は……はい」

「あなたを殺そうとは思いません。別に黙っているとも言いません。僕が出て行ったあと、騒ごうと警察に連絡しようとそれはあなたの勝手です。ただ、出来るなら僕が出て行くまでは騒がないで下さい。僕自身、今、自分が押さえられずにいます。あまり騒ぎ立てられると……わかりますね」

「……はい」

吉村はコクリとうなずいた。

克行は拳銃をポケットにしまうとゆっくりと部屋を出た。

満足感が心の奥に潜んでいることに自分自信気づいていなかった。

死のクリスマスイブ・15

十五

電話が部屋に鳴り響く。

だが克行はただじつと電話を見つめ、動こうとはしなかった。誰なのか、どんな電話なのかそれはわかっていた。

五回、びたり五回コールされた後、留守番電話が答える。

——はい、風間です。ただ今出かけています。用のある方は発信音の後メッセージを入れて下さい。

しかし、メッセージは入れられずに電話は切れた。そして、次に携帯電話が鳴り出した。これがもう十回以上繰り返されている。

それでも克行は取るうとはしなかった。それが会社からの電話だということを見抜いていた。

いい加減にしてくれ。それだけコールすれば十分だろう。いなのか、それとも出るのを拒否している、そのどちらかと考えるのが普通だろう。

部屋が夕陽で真っ赤に染まっている。

ふと克行は今日の出来事を思い出した。床に崩れ落ちた二人の姿。あの二人の体から溢れ出る真っ赤な血。

あの後、克行は会社に戻ることも出来ず、自宅に戻ると拳銃をテーブルに投げ捨てばんやりと考えこんでいた。拳銃は夕陽をあびて満足そうにますます光り輝いて見えた。

今、克行が待っているのは会社からの電話などではない。

再び五回のコールのあと留守番電話が答えると、ついに相手も諦めたように喋り始めた。やはりそれは克行の想像していたように会社からだった。

——克行。俺だ、西崎だ。本当にいないのか？ もし、いるのなら電話をとってくれ。

声はそう言うとして一度言葉を切り、間をおいてまた喋り始めた。

——いないのか……まあ、いい。もしこのメッセージを受け取ることがあったらすぐに電話をくれ。桜川部長も田辺課長も、もちろん俺も会社で待つてる。……何のことはわかってるだろう。それじゃ……電話を待つてる。

ぷつりと電話が切れた。無論、会社に電話をいれるつもりなどはなかった。言い訳するつもりもない、説教されたくもない。奴らに何がわかるというんだ。会社で何が起きているのか、それは容易に想像することが出来た。

それでもふと悲しくなった。

法的には犯罪人にはならない。けれど、人の目は違う。ただの人殺しとしか見られないことを克行は知っていた。相手が特権者だということとは誰一人として知らないはずだ。彼らが知っているのは克行が特権者で、その権利を利用して坂本、波川の二人を殺したということだけだ。

（俺は人殺しになった）

あの時の感触が手に蘇る。

（違う……）

克行はぞつとした。人を殺すのはもつともつと恐ろしいもののはずだった。

（それなのに……）

あまりに簡単に彼らは死んでいった。実行する前には拳銃に詰まった弾丸全てを撃ちつくしてもやりとげられないような気がしていたのに。それが実際には一人に一発。たった二発の弾丸で成し遂げられてしまった。

なんて優秀なんだ！ そいつを特命者に向けてみる。特権者ランクAがもらえる。

しかもあの時克行が感じたものは恐怖などではない。それは……思いを断ち切るように克行は立ち上がった。克行の待つ電話はまだ来るはずがない。あの市役所の職員からかかってくる嫌な電話は

毎晩十二時過ぎと決まっている。

今日はやけにその電話を聞いたかった。

彼らがどんなふうに克行に対して特権者の死を伝えるのかそれが聞きたかった。狼狽しているだろうか、克行に対して警告をするだろうか。特権者優遇計画に対する反逆だと思っただろうか。彼らが悔しがる姿を心のどこかで望んでいた。

だが今、権利を取り上げられることが克行には一番恐ろしかった。権利無しでは法に背くことなく麻美を守ることが出来ない。

（まさか、権利をすぐさま取り上げようとは思わないだろう）

一瞬、自分のそんな思いが権利に対する未練のようにも感じられ克行は身震いした。

俺は人殺しを楽しみかけている。

それに気づかないように克行は頭を思いっきりシャッフルした。

克行は拳銃をテーブルからとり上着のポケットにいれると、その上からコートを着こんで部屋を出た。

麻美に会いたかった。

会って抱きしめたかった。危険が減ったことを伝えてやりたかった。

だが、麻美がそれを喜ぶだろうか。

そう思っただけは思わず足を止めた。

それを麻美が喜ぶはずはなかった。いかに自分の命が助かるとしても彼女は人殺しを望みはしない。

——どうやって私を守ってくれるの？

じゃああの言葉は？

違う、あの言葉は俺に殺人を強要したわけじゃない。

全てが悪い方向へ向かって考えてしまうことに克行は自分自身の弱さを呪った。

（そうだ、彼女はそんな女じゃない。ただの俺の思い過ごしだ）

麻美に会おう。もちろん今の時間ではまだ仕事から帰ってきてはいないだろうが。

再び足を動かす。

「やあ、出かけるのかい？」

マンシヨンを出る克行を見て、管理人の杉本は病院の受付さながらガラス窓の向こうからにつこり笑って声をかけた。

マンシヨンの出入り口は一つで、出入りする人は皆管理人室の前を通ることになる。

管理人である杉本はすでに八十歳を越えている。若い頃、事故で家族を無くし身寄りが無いという話を聞いたことがある。老人自身も右足を痛めており、常に黒い杖をついている。

「高齢」、特命者リストにはそう書かれていた。あのリストを見て以来、いつもこの場所を通るたびに胸が痛む。そして逆に毎日杉本の姿が見えることでほっとしていた。

出来ることならこの哀れな老人の「死」に立ち合いたくはなかった。

（本当に？ ほんの少し前におまえは人を二人も殺したんだぞ。それを忘れたか？）

押し隠そうとする感情をかくぐってもう一つの心が姿を現そうとする。

えい、黙れ！

「具合はどうだい？」

杉浦の問いに、克行は自分が気分が悪かったため早退してきたと嘘をついたことを思い出した。

「もう大丈夫ですよ」

「そうかい、最近やけに寒くなってきたからねえ。体には気をつけなさいよ」

「——はい」

あんたも体に気をつけなさい。あんたの命は俺よりも危ないところにあるんだ——そう告げた時、老人はどんな顔をするだろう。だが、もちろん克行はそんなことを杉本に伝える気はなかった。西崎、桜川、そしてこの杉本たちの命を守るほどの力は克行にはありはしない。今はただ麻美を守ることだけで精一杯だ。鬱陶しい、不安気

な顔など見たくもなかった。

克行は笑顔を返すとマンションを出た。

風がやけに冷たい。

今にも雪が降りだしそんな気配すらしている。きっとクリスマス・イブに雪が降るという気象庁の予報はきつと当たることだろう。そして、その雪のなかにいくつもの死体が転がることだろう。

（ざまあ見やがれ！ きさまの頭のなかは死体だらけだ！）

克行はコートのポケットに手を突っ込むと、街に流れるジングルベルの音楽のなかを歩き出した。

死のクリスマスイブ・16

十六

麻美のマンションまで約三十分、夕陽は落ち街灯の明かりや店先に飾られたクリスマスのイルミネーションがやけに眩しく見えている。

まだ五時をまわったばかりで、さすがに麻美もまだ会社から帰ってはいないだろう。克行は時間を少しでも潰そうとするように、街に輝くイルミネーションを眺めながらゆっくりと歩いて行った。

なぜだか、ぼんやりと田舎の家族を思い出していた。実家には兄夫婦が両親とともに暮らしている。もう三年も帰ってはいない。今頃はもう真っ白な雪が降り積もっていることだろう。あそこには何も無い。何も無いからこそ若者たちは高校を卒業するとすぐに田舎をあとにする。だが、あの小さな町にも「特権者優遇計画」は存在しているのだろうか。町の人間全てが顔なじみであるにもかかわらず、特権者と特命者とにわかれて殺しあうことになるのだろうか。（やめろ。そんなことを考えるな！）

克行はすぐにその思いを振り切った。そんなことを考えたところでどうなるものでもない。それぞれ自分なりに解決するほかないことなのだ。全ての人達を救えるほどの力を自分にはもっていないし、そんなことが可能なほど特権者優遇計画という政策は小さな存在ではない。

楽しげな笑い声を響かせながら女子高生の一団が通りすぎる。こうして何も知らずに街を行き交う人々のほうが利口なのかもしれない。

ふいに道行く人々のなかに克行は一つの大きな恐怖をかいま見たような錯覚を覚えた。道路を挟んで一人の黒づくめの男の姿がちらりと見えたからだ。

立花？

一瞬だった。一瞬、そこにあの立花の姿があったような気がした。振り向き、目を凝らすようにして人込みを見ていたが、すでに立花の姿は見つけられなかった。

気のせいかな？ いや、違う。なぜこんなところにあの男が？

ふと足を止め麻美の住むマンションを見上げた。そこからはいくつもの部屋の明かりが見ることが出来た。

いるはずのない麻美の部屋に明かりが灯っている。

一瞬、嫌な予感が頭をかすめ、克行は足を早めた。

（まさか……まさか……）

「殺人者リスト」のなかの立花の名前が脳裏をよぎる。

今日見たあの景色が再び頭に広がる。

床にしだいに流れ出すどす黒い血。イメージが麻美に重なり克行は頭を振った。

そんな馬鹿なことがあるはずがない。昨夜電話した時には何もなかった。

そう自分の心に言い聞かせた。それなのに不安はますます大きくなっていく。

立花？

頭のなかに作られるイメージはますます広がりついにはあの立花の姿を登場させた。あの気味の悪いにやにや笑いをさせながら立花が拳銃をまっすぐに麻美に向けている。

（やめろ！ やめろ！）

空想のなかの立花に怒鳴りながら、麻美の部屋のある三階まで克行はいつきに階段を駆け上がった。

そんなことがあるはずがない。そうともそんなに簡単に殺されるものか！ 人を殺すのはそんなに簡単なことじゃない。

（簡単に？ おまえは簡単に二人も殺してきたじゃないか？ それとも他人は殺されても自分の恋人は殺されないとでも？ まったく自己中心的じゃないか）

頭のなかでさまざまな考えが浮かび消えていった。

神に祈る気持ちだった。いや、神であろうと悪魔であろうとなんだったてよかった。麻美を守ってくれるものならどんなものでも信じられる。そうだ、あの立花にしたって麻美のことさえ狙わなければどんなことをしたって許せる。今度、克行のもとへ協力を求めてきたならば進んで協力してやろう。

息を切らせ麻美の部屋の前に立ち、チャイムを押した。その指が震えていた。

（麻美……）

目を閉じて、中の様子に耳を澄ます。

微かにドアの向こうで物音が聞こえ、やがてインターホンから聞き慣れた麻美の声が聞こえてきた。

「はい、どちらさまでしょう」

その声に克行はほっと大きく息を吐いた。馬鹿げた考えが一気に消え去る。

「俺だよ」

「克行？」

すぐにチェーンを外す音が聞こえ、ドアが開かれた。

「どうしたの？」

驚いた顔で麻美は克行を見つめた。トレーナーとジーンズという軽装はとても会社帰りには見えない。

「おまえこそどうして家にいるんだ？ 仕事は？」

冷たい空気を遮断するように玄関まで入りドアを閉めると克行は彼女に尋ねた。いくぶん疲れたような顔をしていることが気になった。

「うん……ちょっと……」

「気にしてるのか？ あのこと」

馬鹿な質問だと我ながら思った。自分の命がかかっているというのに気にしていないはずがない。伝えないほうがよかったのだろうか。

「うん……まだ有休残ってるし……」

「まさか今週ずっと？」

「ううん、今日だけ。今日はちょっと気分が悪かったから」

「気分って——」

「ううん、たいしたことないの。もう良くなったわ。明日からはちゃんと仕事に行く。いくら派遣社員っていつてもいつまでも休んでたらクビになっちゃう。あ、入って」

玄関に立っている克行に気づいて、麻美はなかへ誘った。

「いや、もう帰るよ。麻美が無事ならそれでいいんだ」

本当はこのままずつと麻美のそばにいてあげたかった。けれど、今日自分の犯したことを、そして二人が置かれた立場を思うとあまりにもつらかった。それに週末までは危険も少ないだろう。

「心配してくれたんだね。ありがとう」

ふつと笑顔が漏れる。

「本当に良かった。こんな時間にいると思わなかったからかえって驚いたよ」

「……うん、ちょっと怖かったの」

「……」

「本当はずつと休んでいたい。部屋に閉じ籠もって鍵かけて……。でも、そんなこと出来ないしね」

「なぜ？ 出来ることなら俺もそうやってもらいたいよ」

「だめよ、今仕事だって忙しいもの」

「命には替えられないだろう」

「他人に言いたくないのよ。そりゃあ、特命者だから克行みたいに怖がられることはないかもしれないけど……でも、そんな人間がそばにいるとわかったら嫌がられるでしょう。言えないわ」

その気持ちは克行にもよくわかった。特権者、特命者に関わらず「特権者優遇計画」に少しでも関わっていると知れば警戒するに決まっている。

麻美は克行の顔を見て言った。

「でも本当に克行どうしてこんな時間に？　いつもだったら克行まだ仕事してる頃でしょう。克行も休んだの？　まさかね」

「まさか……」

笑った直後に突然悲しみに襲われた。

俺は今日いつもの通りちゃんと会社に行った。その後、仕事のついでに人まで殺したんだぜ。

それなのに今、こうして麻美と会って平然と笑っている。そのことがやけに怖かった。自分が感情のない殺人鬼に思えた。

「どうしたの？　何かあったの？」

「……」

（話すべきだろうか……）

克行は迷った。自分のために人が死ぬことを彼女が喜ぶはずはなかった。それでも今、二人の置かれた立場のことを考えると一切の秘密を作りたくはなかった。ほんの小さな秘密がこれまでの二人の関係を壊してしまうような気がした。

「克行」

「……君の危険が減ったよ」

やっとの思いで言葉を絞り出した。やはり麻美にだけは嘘をつきたくなかった。

「え？」

「ほんの少しかもしれないけど君の危険が少し減ったんだ」

（さあ、どんな顔をする？　まずは困ったような顔をしてそれがどんな意味を持つのかわからないように聞き返すんだろう）

克行は麻美の反応を予想した。

「……どうということなの？」

麻美は決して馬鹿ではなかった。克行の言葉からその意味を悟ったようだった。それでもやはり克行の予想通り彼女は聞き返した。その震えた声に克行は密かに安心した。

——どうやって私を守ってくれるの？

やはり麻美は殺人を強要していたわけじゃない。克行は心底彼女

を信頼した。

「君の名前の入った特命者リストを持つ人間が今日、二人死んだ」

「……克行……それは――」

「頼む……何も言わないでくれ。俺が言いたかったのはあいつらがどうなったかなんてことじゃない。おまえの危険が減ったってことなんだ」

麻美は何も言わずただうつむきながら克行の手をぎゅっときつく握りしめた。彼女の目に涙がうかび、頼をこぼれ落ちた。その涙の本当の意味を克行は知らなかった。

死のクリスマスイブ・17

十七

すでに日は落ち、すっかり暗くなった街中を帰路に急ぐ人々が忙しなく歩いて行く。そのなかに混じって克行の姿があった。

比較的ゆつくりとした足取りで、克行はマンションに向かって歩いていった。買い物帰りの主婦やサラリーマンたちがすたすたと克行を追い抜いて行く。その姿があまりに忙しく見え、いつもならこのなかに自分の姿があるのだらうと考えると可笑しくなり、克行はふと苦笑をもらした。他人のことには一切興味を持とうとしない自己中心的なその姿は今の克行にとって怒りを通り越して喜劇にすら思えていた。

「死」が「殺意」が人々を包んでいることに誰も気づいてはいない。皆、自分の生活のことだけを考えている。

死んでしまえばいい。皆、殺意の存在にすら気づかぬうちに死んでしまえばいい。

麻美の手のぬくもりが、彼女の優しさがまだ残っている。さつきまでの暗い気持ち麻美に会ったことで少しやわらいでいた。いや、逆に自分のやったことに自信が持てたといってもいい。

自分のやったことは間違っていない。麻美がわかってくれる。誰もわかってくれなくても麻美だけはわかってくれる。それだけで十分だった。

今やまるで神を崇拝するかのように克行は麻美を思っていた。いや、そうでもないやりきれない思いがあった。どんなことをしても殺しを隠すことなど出来やしない。それならいっそ自分自身を騙しきるしかない。麻美のためにだけに行動すればいい。

麻美のためなら誰のことを敵にまわしたっていい。それに坂本にしても、波川にしてもあいつらは特権者だったのだ。人を殺す特権

者だったんだ。彼らを殺すことは間違つてなどいなかったはずだ。
(やってやるうじやないか)

自分に暗示をかけるように克行は何度もそのことを心のなかで繰り返した。そうすることで自分のなかにある罪の意識を振り払おうとしていた。

駅から十分、克行の住む薄いブルーのマンションが月の光を浴びてうつすらと白く見えている。すでにいくつもの部屋に明かりが灯り、克行の部屋の両側も明かりがついている。

克行はマンションに向かって歩いて行った。早く帰って眠ってしまいたかった。全てを過去のことと変えてしまいたかった。もちろんそんなことが出来るはずのないことを克行は知っていた。何よりも今夜、またあの男の声を聞かねばならない。特命者の死を伝えるあの声を。

昨夜までに克行のリストから削除された特命者の合計は八名となっていた。その中にはありがたいことにまだ克行の知る人間は入っていない。今夜、あの男の口から克行の知る人間の名前が出るかどうかそれはわからない。だが、今日克行がやったことについて何等かの忠告があるのではないかと克行は考えていた。あの二人は他市の指定ではあるが、それでも元をたどれば皆特権者は国の指定といえる。克行はその特権者を二人も殺している。忠告がないはずがなかった。

克行がマンションに近づくと、ふいに入口からジーンズに黒いジヤンバー姿の若者が飛び出してくるのが見えた。何かに脅えているように何度も後ろを振り返り、どこかおどおどしている。克行は怪訝に思いながらも、それでもたいして気にも止めずにそのままマンションへ歩いて行った。若者はどうしていいかわからないように入口で少しの間うろろろしていたが、突然、回りを確かめることもなく走り出し、あやうく克行にぶつかりそうになった。

その瞬間、克行はその若者の顔に見覚えがあることに気づいた。若者のほうも驚いたように克行のことを一瞬ちらりと見たが、何の

反応もしめそうとはしなかった。ただ、真つ青な若者の顔だけがやけに印象的に克行の頭にこびりついた。以前にどこかで見た記憶があった。

（誰だ？）

走り去る若者の背を眺めながら克行は思い出そうとした。思い出さなければいけないという意識が働いていた。

マンションの住人？ いや、違う。彼を見たのはもっと別の場所だ。……どこで？

もっと何か大事な……

（そうだ！）

克行の心のなかに火花が散った。

あの若者の別の姿が克行の頭のなかにはつきりと蘇ってくる。

――みなさんは選ばれたのです！

市長の声が聞こえてくる。

あの部屋……。

そうだ、あの煙草の煙の充満したような部屋のなかだ！

あの若者を見たのがあの殺人者の群れのなかでだということが、今はつきりと思い出された。

若者の背中が人込みに消えて行く。

（いったいなぜあいつが？）

疑問の答えはすぐに克行自身で見つけることが出来た。今日見た二つの死体が頭のなかにくつきりと蘇っていた。そしてさらにもう一つの死体が予想出来た。

克行は走り出した。

「おじさん！」

克行はマンションに走り込むとすぐさま管理人室のドアを激しくノックした。予想した通り窓口には管理人の杉本の顔は見えない。部屋も暗く、中の様子を伺うことは出来ない。

「おじさん！」

窓口からもう一度呼んでみたが返事はなかった。だが、間違いな

く誰かがいる、いや、いたような気配がしていた。

「おじさん？」

克行はドアノブをそっと回した。鍵は閉まっておらず、克行はドアを開くとゆっくりとなかへと入っていった。暗い部屋のなかに嫌な匂いがしていた。

——本日、除名者が記録されました。

早くもあの声が頭に響いている。

そつとざらつく壁に手を這わせ、電気のスวิตチを搜した。そして、明かりが部屋に満ちた時、克行は思わず息を飲んだ。

部屋はぐちゃぐちゃに荒らされ、誰かが揉み合った形跡があつた。窓ガラスは割れ、冷たい風が吹きこんでいる。とてつもない何かがそこで起こったことを克行は知った。そして、何よりも部屋の片隅に転がっている老人の姿がそれを物語っていた。

「お……おじさん！」

走りよつて抱き起こした。

老人の顔からはいつもの微笑みは消え去り、恐怖の表情で固まっていた。皺だらけの顔からは生氣は消え失せ、光のせいか青白く染まっただけに見える。

——あなたのリストからの削除をお願いします。

うるさい！　ちくしょう！

老人を抱える手にべつとりとした感触が伝わってくる。胸と背中ほどす黒い血で染まっている。すでに息はなく、その体から急激に温もりが失われていくのが感じられた。

（こんな……）

急激に恐怖が襲ってきた。

今日、二人を殺した時にはこんな感じは受けなかった。それなのに、今自分が殺したわけでもないのに、なぜだか自分がこの哀れな老人を死に追いやったような気がしてならなかった。老人の体はやけに軽く、その軽さはまるで老人の命のようにさえ思えた。おそらくこの老人が死んだからといって悲しむ者などどこにもいないだろう。

う。年齢から考えても死んでもおかしくはない。だからといってこんな死に方が許されるのか？

血に染まった老人の杖がむなく転がっている。

部屋のなかは恐怖に包まれている。昼間とは違う襲われる側の恐怖。

克行はそつと老人の臉をおろすと床に下ろした。自分の姿が老人の瞳に映っているような気がして嫌だった。

「……ちきしょう」

小さな呻き声が克行の口から漏れた。

今、克行の心にあるのは床に倒れている老人に対する哀れみなどではなかった。それ以上にさつき見た若者の姿が頭にちらついていて離れなかった。なぜだかあの若者が自分にとって大きな意味を持っているように感じていた。

死のクリスマスイブ・18

十八

携帯電話はいつものように十二時を少し回った時間に鳴り出した。克行は電話が鳴り出すと同時に電話に出た。

「——はい」

誰からかはわかっていた。むしろその電話を心から待っていた。

——特権者優遇計画委員会の者です。あなたのリストからの削除をお願いします。本日の削除者は三名です。特命者ナンバー0032・杉本真一郎、0105・山下美由紀、0622・藤川和也、以上です。

声はいつものように機械的に特命者の死を伝えた。今日初めて知っている人間の名が出てきたことに克行は知っていながらも心が痛んだ。今日、何人の特権者に杉本の死が伝わるのだろう。だが、今はそんなことよりももっと大事なことが待ち構えている。

克行はじつと電話に耳を傾けた。しかし、電話の声はそれ以上のことを告げる事なくそのまま切れそうになった。

「待ってください！」

克行は切れそうになる電話にすがった。

——なんでしょうか？

「今日、特権者である二人が死んだはずですが……」
緊張感が体中にみなぎる。

——……はい、確かに特権者二名が本日死亡されました。それが何か？

（それが何か？ 何かだつて？）

「その二人を殺したのが誰なのかわかっているんですか？」
挑戦するように克行は言った。

克行の問いに一瞬間があいた。だが、すぐにまたきっぱりとした

口調に変わった。

——はい。誰が殺したのかはすでに連絡が届いています。

職員はあくまで第三者的な言い方を崩そうとはしなかった。その口調は感情を持たないコンピュータの電子音のようだった。

「なら、なぜそのことについて何も言わないんですか？」

——その二人の死についてあなたに言うことなど何もありません。「どういうことですか？」

——また、彼らは特権者で特命者リストに載っているわけではありません。よって特権者の皆さんに彼らの死を伝える必要もありません。もし、あなたが彼ら二人を殺したことによって罪を犯したことになるのではないかと危惧しているのであれば安心してください。別段、規則違反になるわけではありません。特権者が特権者を殺してはいけないという規則もあります。あなたが「特権者優遇計画」の間に誰を殺そうと自由です。法的にもあなたは無実です。では失礼します。

その声はどこか克行の心を見通してあざ笑っているように聞こえた。電話はそのままぷつりと切れた。

死というものがやけに軽ろんじられているようで悔しかった。

（俺は何を望んでいた？）

ゆっくりと受話器をおろし自分が何を考えていたかを思い直した。もつと慌てふためき克行の殺人を問いつめる、そんな様子を描いていた。そうすることによって特権者優遇計画に対してほんの少しでも抵抗をしたかった。

それが克行の気持ちだった。だが、あまりにも現実には克行の思いとは違っていた。

（当たり前のことじゃないか……）

克行は改めて特権者優遇計画を恐ろしく感じた。

特権者であろうと特命者だろうとただ死人が出ればいい。政治家たちが考え出した人口削減計画なのだ。それが特権者優遇計画だった。わかっているつもりだった。どんなことが起きても計画を揺る

がすことなど出来るはずがないのだ。

——あなたが誰を殺そうと自由です。

それなら……それならきさまがいったい何者なのかはつきりと教えてくれ！　そうしたらきさまの鼻先に拳銃を突きつけてやる！　それでもまだ自由だと、無実だと言っていられるか試してやるうじやないか！

あの職員の顔が脳裏をちらついた。

特権者優遇計画に対する怒りと、恐怖と、苛立ちと、寂しさともなしさが心に渦を巻いていた。

決死の覚悟の抵抗までも、全て計画のなかに組みこまれているようにさえ感じられた。

たった二発の弾丸で二つの命を消し去ったのだ。なんと優秀なことだろう。これこそ市役所の望む最高の特権者じゃないか。おまえは国の役に立つ立派な特権者になっちまったんだ。さあ、国民栄誉賞だ。

奴らの嘲りの笑い声と拍手が聞こえる。

今まで必死に押さえてきた感情が狂喜へ向かって走って行く。

麻美の声が聞きたかった。自分自身の感情を押さえるためにも麻美の声が聞きたかった。夕方会った時の麻美の姿が頭に浮かんた。克行の言葉に微かな驚きを見せ、悲しそうに克行の腕のなかで涙を流した麻美の姿を思い出した。

携帯電話のボタンを押す指が震えていた。

数回のコールの後、ほんの少し眠たげな麻美の声が聞こえてきた。

——もしもし、克己？

「……麻美」

こみあげる気持ちを押さえながら克行はつぶやいた。

——どうしたの？

「いや……別に。眠ってたのか？」

——ううん、まだ。

気まずい雰囲気が漂う。二人の間には以前のような単なる愛情だ

けが存在しているわけではない。二人の間には「死」が常に漂っている。

「さっき、また電話があつた」

——電話？

「……市役所からの」

——……。

「今日のこと……俺がやったこと、あいつらちゃんと知っていやがつた」

——何か言われたの？

「いいや、何も。まったく何も言おうとしなかった。だから、かえってこつちから聞いたんだ。どうなっているのかって」

——うん。

「法律的にも規則的にも違反にはならないらしい。俺はあくまで犯罪者にはならないらしい。馬鹿ばかしいだろ。二人も殺しておいて犯罪者じゃないなんて、ありえないだろ」

いくぶん声がうわずっているのが自分でもわかった。

——克行、自分を責めないで。

「責めてるわけじゃない。悔しいんだ。ただ、俺は悔しいんだ。わけもなく、むしように腹がたつてあいつらに腹がたつて……」

——克行、あなたは悪くないわ。全て時の流れが、そうよ、運が悪かつただけなのよ。

「運か……」

自分自身、時の流れに逆らっているような気がしていた。もし自分が特権者などに選ばれなければ、もし麻美が特命者選ばれなければ……どちらにしても今更しようがないことだ。

——だから苦しまないで。

「ありがとう……」

そのまま電話を切った。

麻美の優しさだけを胸に抱いていたかった。それだけが救いだつた。

その夜、克行は一つの悪夢に襲われた。それはベッドに入った時から予想していたことだった。

克行が拳銃を握り、あの場所に立っていた。そして、そこにはやはり坂本、波川の二人の姿があった。二人とも立ったままじっと克行を見つめている。

こいつは夢だ。克行はすぐにそれに気づき、夢から逃れようと試みた。だが、それとは裏腹に恐怖はしつかりと克行に襲いかかっていた。足はがくがくと震え、手は今にも拳銃を取り落としそうになっている。汗が全身を濡らしている。

そう簡単にはこの夢から逃れられそうにもない。

クソッ！ それならもう一度その頭を吹き飛ばしてやる。一度も二度も同じことだ。

思いきって拳銃を二人に向けて撃った。弾丸は狙い通りにしつかりと二人を捕らえ、波川の頭の半分と、坂本の胸元を吹き飛ばした。だが、それでも二人は動じなかった。それどころか克行の顔を見て削り取られた頭と穴の空いた胸を気にする事もなくにんまりと笑みを浮かべ、ゆつくりと克行に向かい歩き出した。

「来るな！」

克行は無我夢中で拳銃を握りしめた。弾丸は尽きる事なく次々と発射され、全て近寄る二人の体に吸いこまれていった。それでも二人の歩みを止めることは出来なかった。耐え難いまでの恐怖が克行の体のなかで膨れ上がり、ついに拳銃を撃つことも出来なくなった。そして、気づいた時には手の中から拳銃そのものが姿を消していた。克行は逃げ出そうとした。恐怖のために夢だということも意識の外に消えていた。しかし、足を動かすことも出来なかった。見ると頭から血を流して倒れている杉本老人の手がしつかりと克行の足を握りしめている。『逃がすものか！』その目はそう語っている。

やがて、坂本と波川は克行の目の前に立ち、その血で濡れた手でぎゅっと彼の肩を握りしめた。

「さあ、今度はあんたの番だ」

突然、二人の背後に麻美の姿があつた。彼女の手には拳銃が握られている。彼女は悲しげな眼差しで克行を見つめ、それから拳銃を克行に向け、そいつをきつく握りしめた。

死のクリスマスイブ・19

十九

十二月 二十一日 (木)

一夜明けた朝もやけに気が重かった。

たとえそれが法に背いてはいなかったとしても、それでも殺人には変わりないのだ。

すでに十時を回っている。

エレベーターのなか、克行の頭のなかに会社の人々の顔が浮かんできた。彼らが自分のことをどんな目で見るのかそれが想像出来た。そして、それが決して暖かいものでないことを克行は知っていた。

「おはようございます」

オフィスに入って行った克行を待っていたのは、想像した通りに同僚たちの戸惑い表情だった。

（そうびくついた顔をするな、何もこんなところで拳銃をぶっぱなしたりするもんか）

驚いた顔で見つめる同僚たちを無視して克行は自分の席へ歩いて行った。

「風間！」

西崎が真剣な眼差しで克行に声をかけた。その声は緊張のせいはいくぶん震えているように思えた。

「おはよう」

「おまえ、どういことなんだ？」

「どういことって？」

出来るかぎり心のなかを隠し、平然を装った。それが周りの人々にどんなふうに見られるかは予想出来た。

「わかつているんだろ！ 昨日、おまえがやったことだ！」

「ああ、あのことが……」

わざと惚けたように答える。

「なぜなんだ？ なぜあんなことを――」

「べつにおまえに非難されることじゃないだろう」

「なんだって？」

「おまえだつて特権者優遇計画のことくらい知っているはずだろ。

俺は特権者になった。そういうことだ」

西崎は茫然と克行を見つめた。その瞳に失意の色があった。やがて、がくりと膝を落とすと椅子に倒れ込むように座り、それからぽつりとつぶやいた。

「部長が呼んでる……おまえが来たら会議室に来るように言われた」

「そうか」

克行はすぐに席を立った。西崎の辛そうな表情を見ていたくなかった。西崎の様子に克行は友人の信頼を失ったことを感じ取っていた。

会議室の前、ずっと深呼吸してからドアをノックするとすぐに返事がかえってきた。

「どうぞ」

課長の田辺のものだ。声はすでに怒りに満ちていた。

克行はすつと深呼吸してからドアを開いた。だが、そのなかの様子は克行の想像したものとは少し違っていた。多くの上司たちが待ち受けているものと考えていたのだが、実際にそこにいるのは部長の桜川と田辺の二人だけだった。田辺はかなり険しい表情で克行を睨んでいるが、桜川のほうはそれほどではないように見受けられた。

「座りなさい」

克行はテーブルのそばにいき、席を三つばかりあけて椅子についた。

「いったいどういうことかね」

田辺は怒りを押さえるように努めているような声で尋ねた。

「……はあ」

「はあ、じゃないだろう。昨日、I M Mから連絡があった。君はなぜあんなことをやったんだね！」

まだ課長としては若い田辺は感情をうまくコントロール出来ないらしく、その声から克行に対する腹立たしさがひしひしと伝わってくる。

「なぜと言われても……」

「理由がなく二人を殺したというのか？ I M MもK I N I Cもお客様だということがわかってるのか？」

この男は理由もなく俺が人を殺したと思っっているのだろうか。常日頃から人を見下したような態度をとる田辺の言葉に克行はしだいに腹をたてはじめていた。

「そんなことは関係ないと思います」

「関係ないだと？」

「今は特権者優遇計画の実施期間です。特権者優遇計画は国家行事です。私のやったことは犯罪じゃありません」

その克行の言葉に田辺は一瞬ぎくりと言葉を切った。その田辺の様子に克行は田辺もまた、自分のことを恐れているということを知った。もちろん、それは当然のことといえる。殺人の権利を与えられたものが自分の目の前にいるのだ。相手の気分次第では自分もまたターゲットになる可能性すらあるのだ。

田辺は再び感情を押さえるように声のトーンを落とした。

「……た、確かに君が特権者だということは警察からも連絡がはいって知っている。君がやったことは犯罪なんかじゃない。だ、だが、彼ら二人を……殺す……ということがこれから我が社にとってどういう意味があるのかは君にもわかるだろ」

答える気にはなれなかった。そんな一般的な考えで乗り越えることが出来るなら、克行もそうしただろう。だが、それが出来なかったからこそ殺人という最後の手段をとることになったのだ。それが田辺にはわかっていない。また、麻美のことを説明する気にもなら

なかった。田辺を納得させるためにはもつと別な方法を取らなければならぬだろう。例えば拳銃を突きつけるとか。いや、それともそのまま撃ち殺してしまうか？ おそらくこの男ならば何のためらいもなく殺すことが出来るだろう。

「風間君！」

「待ちなさい。彼にも彼なりの理由があつたのだろう」

さっきまで黙って聞いていた桜川が怒鳴ろうとする田辺を制してやつと口を開いた。

「は、はあ……」

「風間君と少し話をしたい。悪いが少しの間席を外してくれないかね」

「は？ しかし——」

ちらりと田辺が犯罪者を見るような目で克行を盗み見た。克行と二人では危険だと言いたいのだろう。克行もそれに気づき、わざと視線をそらすことなく田辺を睨み返した。

「構わない。さあ」

桜川も田辺の言いたいことに気づいたようだったが、それでも気にならないようで田辺を追い払った。

「やはり、特権者に選ばれたのか……」

田辺がいなくなると自分の考えを記すように桜川はぼつりとつぶやいた。

「やはり？ どういうことですか？」

「先週の月曜だったかな、あの時なんだろう？ 特権者の指定を受けたのは」

「なぜ部長はそんなことを知っているんですか？」

「この歳になるといろいろなところからいろいろな情報が入ってくる。なかにはただの噂だったりするものも多いからそれほど役にたつものばかりじゃないがね。ただ、特権者の指定が近々特権者に発表されたという話はニュースでも聞いていたし、少し考えればわかることだよ。それに今年は私の名前が特命者のリストに入ってい

るという噂も友人から聞かされていたんで気になってたんだよ」

「……」

「噂を聞いたとき初めはそれこそ動転してしまっただけ。よく考えてみたらもう八十に手が届くんだ。君たち若い人から見れば十分に生きたと言える年齢だ」

「なぜそれほどまで怖がるんですか？ その噂がどこから出たのかわりませんが、特命者に指定される覚えでもあるんですか？」

「反逆罪」、特命者リストの桜川の欄にはそう書かれていた。

「覚えか……、確かにないこともない。なぜ私がこの歳になつてまだ働いていると思う？ 十年前ならもうとつくに退職している身だ。それなのに今だに働いてる。好きで働いてるわけじゃない。働かなきゃならないから働いているんだ。もう体も十分には動かなくなつてもきている。それなのに政府はまだ年金の支給年齢をあげようとする。それに納得出来なくてね、いつも休みになると抗議グループに参加してデモをやったりしているんだ。国から嫌われても仕方無い」

「そうですか」

「それにしても特権者優遇計画か。まったく嫌なことを始めたものだ。仕事上これまでもまったく関係なかったわけではないが、自分の部下がお客さんを殺すとはな……。彼らも特命者だったのかね？」

何と答えていいかわからなかった。ただ、今まで知らなかった桜川の人柄や特権者優遇計画の背景がさらに見えたようん気がしていた。そして、その背景を桜川にさらしていいものかどうか、それすら判断することも出来なかった。

桜川はさらに続けた。

「まあ、彼らが特命者であろうとなかろうとそれはもうしょうがない。君、これからどうするつもりだね？」

「これからですか？」

「そうだ。特権者優遇計画が終わるまであと四日ある。それまで君は特権者として人を殺す権利を持っているんだ。正直言つて社の人

間は皆多少君に対して恐怖感を抱いている。田辺君も、そして、正直に言えばこの私もだ」

「どうしろと？」

「今週は休みを取ったかどうかね。坂本さんや波川さんがああいうことになってしまつては、しばらくは仕事にならんだろう。正直いえば君が会社にいることのほうがトラブルになる」

「はい……けれど会社のほうは……」

「今さら社内のことについて言つても仕方無いだろう。君がやったことは犯罪じゃない。会社としても別段君を裁くつもりはない」
桜川の言葉が優しさなのか、それとも克行に対する恐怖から出たものののかそれは克行にもわからなかった。ただ、もし優しさだとしたら――

克行の心のなかに迷いが生まれた。桜川の名前が特命者リストのなかにあることを、そして立花という警察官が桜川を狙っていることを言うべきかどうか克行は混乱した。

「あの――」

言葉が溢れそうになり、克行は慌ててそれを押さえた。

「なんだね？」

「いいえ、何でもありません」

（今はもう何も考えるのはよそう。麻美のことだけ考えればいい）
克行は桜川に伝えないことに決めた。桜川は自らの立場を既にわかっている。今さら警告したところで意味はない。

「それじゃ、今日はもう帰つていいよ」

桜川は相変わらず穏やかだった。

そして、それは克行が桜川を見る最後となった。

死のクリスマスイブ・20

二十

築二十年といったところだろうか。

二階建てのアパートの手摺りは真つ赤に錆び、あちらこちらに蜘蛛の巣が見受けられる。隣には真新しい白いおしゃれなマンションが建ち、なおさらみすばらしく見える。

（ここだな）

克行はそのアパートの一室の前を用心深く伺った。

表札は出ていないが、通路に郵便受けからこぼれ落ちたハガキによつてその部屋の住人の名前が読み取れた。

<磯井正隆>

その名前を見ながら克行は自分の勘が正しかったことを改めて感じた。

昨夜、マンションの管理人杉本の死を発見したあと、克行はすぐに警察に連絡をいれた。それが特権者による殺人であることは克行にも当然わかつていた。だが、克行はそれでもあえて一般の殺人を目撃したかのように警察に連絡をいれた。杉本を殺した若者の姿がやけに頭にちらついて離れなかったからだ。あの若者が自分にとって大きな意味を持つているようなそんな気がした。

連絡するとすぐに警察は現れ、克行も事情聴取を受けた。だが、その場で弾丸が発見され、すぐに現場検証は打ち切りとなった。弾丸には特権者優遇計画のコードが彫られており、その弾丸で殺された場合それは殺人ではなくなるからだ。克行もまたそういった展開を予想していた。予想というよりもそうなることを期待していたのだ。克行が知リたかったのはその弾丸のコードだった。弾丸のコードは一発づつ違っており、そのコードによつて誰が使用したものかわかるようになっていた。そして、克行が涼子からもらった特権者

のマスターリストにはその特権者の使用する弾丸のコードもまた記されていた。

克行は警察官から何くわぬ顔で弾丸のコードを聞き出した。

TR13 - TX - 6254とTR13 - TX - 6255。

それが弾丸に彫られていたコードだった。それは麻美の名前の入ったリストを持つ磯井正隆のものであった。

そして今、克行は会社の帰りに磯井の住むアパートを訪れている。特権者優遇計画が終わるまで会社へ行く必要はなくなった。つまりそれだけ麻美を守るために動けるということだ。

克行はそつと中の様子を伺うようにドアを左手でノックした。右手はポケットのなかの拳銃を握っている。

返事がない。

（いないのだろうか……）

まだ十一時を回ったばかりで、真面目な学生ならば大学へ行っているはずだ。

克行はもう一度ノックしてみた。

やはり返事はなかった。

克行は軽くドアノブを回してみた。鍵はかかっておらず、ドアは簡単に開いた。鍵がかかっていたとしても簡単に開くのではないかと思うほど傷んだドアだった。

たった四畳半の部屋に物が散乱しているのが目についた。布団は敷いたままになっており、雑誌や服が辺りを足の踏み場もないほどに埋めていた。

そこに磯井はもちろん誰の姿も見えなかった。

（大学へ行っただろうか？）

克行はそう考えながら一步部屋のなかへ足を踏み入れた。

確かに磯井は学生なのだから大学へ行ったと考えるのが一番正しいように思える。しかし、昨夜見た磯井の姿、そして杉本の死がその考えを否定しているように思えた。杉本の部屋はあまりにも荒らされすぎていた。一人暮らしだったため詳しくはわからないが、お

そらく相当の金品が磯井の手によって奪われたことだろう。

磯井は特権者優遇計画で得た権利を金を盗むために利用しているはずだ。今日もまたそのために出かけているのかもしれない。そして、それが麻美のところでないとは限らない。克行はそうでないことを祈った。

克行は後ろ手にドアを閉めると土足のまま部屋のなかへ入りこんで行った。部屋で磯井の帰りを待つつもりだった。

（帰ってきたところを……）

磯井をこのまま放っておくわけにはいかない。昨日の二人に続き磯井にも消えてもらうつもりだった。

部屋の中心に立ち、どこから狙うかそれを考えようとぐるりと部屋を見渡した。だが、その時、克行はぎくりと身を固くした。

カチリという小さな音が克行の背後から聞こえた。それはまぎれもない拳銃の撃鉄を起こす音だった。

（しまった！）

克行は自分の軽率な行動を呪った。

「あんた、誰さ？　こんなボロアパートに泥棒かい？」

すつと押し入れの戸が開く音が聞こえ、若者の声が聞こえた。それこそ克行の狙いである磯井の声だった。

「……」

「誰だよ……答えるよ」

多少、声が震えている気がする。その声から磯井がすぐには克行を殺すつもりのないことを感じとった。

克行は相手を刺激しないように少しづつ体を回し、顔を後ろへ向けた。両手でしっかりと拳銃を握った青ざめた若者の姿が押し入れのなかから覗いている。拳銃に弾丸が装着されているのか、また、装着されているのが何発なのか、それは拳銃の性質上外から見ただけではわからない。だが、昨夜二発は使用しているため最高でも四発のはずだ。

「答える！」

磯井は拳銃を克行の顔面に向けるようにして、答えを強制した。

「……磯井……君だね」

「ああ……おまえは？」

「風間克行」

「風間？」

「君とは以前会ったことがある」

「知らねえな、あんまりいい加減なこと言っなよ」

ゆつくりと身を押し入れのなかから少し出して磯井は怪訝そうな顔をした。

「嘘じゃない。先週の月曜……市役所で会ってる」

言葉を選びながら克行はゆつくりと答えた。ともかく相手の自分に対する殺意を消し去らなければいけない。

「先週の月曜？ それじゃ特権者優遇計画の説明会で？」

「そうだ」

「で、あんた、何なんだ？」

「君と同じ人間だ。俺も特権者なんだ」

その言葉に磯井の目が疑わしそうに克行を観察している。

「あんたが特権者？」

その言葉のなかには自分と同じ種類の人間に対する安心感と、その言葉が嘘であつた時の不安感の二つが入り交じっていた。その様子は克行にとって想像した通りのものだった。昨日の波川もそうだったが、相手が自分と同じ特権者だと知ることでかなりの安心感を得るらしい。特権者が特権者を殺すという図式が彼ら特権者のなかにはないのだ。

「本当だ。特権者ナンバー0042、風間克行。思い出してくれ、君は窓側の席に座っていたはずだ」

「ふうん、どうやら嘘じゃないらしいな。だが、いったい何の用だ？ 同じ特権者だからって他人の家に勝手にあがりこんでいいはずはないだろう」

磯井はある程度克行に対して警戒を解いたようだった。だが、相

変わらず拳銃は克行に向けられている。

「……」

克行は答えに詰まった。何と云えば磯井が自分に対してまるつきり警戒を解くかそれを考えていた。

「何の用だつて聞いてるんだ！」

再び磯井は脅すように拳銃を突き出して見せた。

「よせよ、危ないじゃないか。同じ特権者なんだ」

「うるせえ。そんなの関係ねえよ。勝手に人の家にこのこ土足であがりこんで来やがつて。どうもあんたは信用できねえ。言えよ、何の用だ？」

「……君の特命者リストを見せてもらいたいんだ」

「何だつて？」

「君の特命者リストを見せて欲しい。誰の名前があるかそれを知りたい」

苦し紛れに出た言葉だった。けれど磯井は克行が想像以上に興味を示した。

「特命者リストを見せる？ 俺のか？」

「ああ」

「何するんだ？」

「噂を聞いたんだ。友人の名前が特命者リストに入っているって……」

「……」

「それで？」

「出来たら友人を助けない」

「助ける？ どうやってだ？」

「もし、君のリストに入っていたら——」

「入っていたら？」

「君が友人を狙わなければそれだけ友人の危険が減ることになる」

「で、俺がそいつを狙わないことで、俺にはどんな得があるんだ？」

すでに磯井の興味は取り引きに向いている。そして、当然、磯井の欲しいものは金だろう。

「少しばかり礼はする」

「いくら？」

「いくら欲しいんだ？」

克行の言葉に磯井は思わずにやにやと笑い始めた。その拳銃を持つ手がだらりと下がった。

「そうだな、ま、そんなに高くは言うつもりはないが……百万かな？」

「無茶言わないでくれ。君を含めて友人を狙うことが出来る特権者は五人いるんだ。五人全員に百万づつ払ってたら五百万にもなるだろう。出来たらもう少し値を下げてくれないか？」

磯井の拳銃が狙いを外した今、いつ克行が磯井を狙っても構わなかった。しかし、あえて克行はもう少し待つことにした。もう少し、完全に磯井が克行に警戒を解き、油断しきって拳銃を放すまで。

「ん——」

磯井は難しげな顔をして見せた。その顔は本気で悩んでいるようだった。けれど、その顔には自分が得た立場の利益への喜びも混じっていた。

「なあ」

「だめだ！　いくらかかろうと俺はそいつの命を握っているんだ。少しくらい高くついても生きていたければ払える金額だろう。それにあんただって特権者なんだ。その友達のために金を作るくらい出来るじゃないか」

「……確かにそうだが」

「百万だ、それ以下なら俺は誰だろうと狙うぜ」

「……わかった。だが、まずは君のリストにそいつの名前があるかどうかだ」

克行は諦めたふりをしてみせた。払うつもりなどあるはずがない。そうだな。それにしてもあんたどうやってここを見つけたんだ？　まさかあのあとすぐに俺のあとをつけたわけじゃないだろ」

磯井は克行の言葉にすっかり安心し、押し入れから出ると拳銃を

散らばった床に無造作に置き、再び押し入れのなかに頭を突っ込んで特命者リストを捜し始めた。

「この前偶然その通りで君を見たんだ」

克行はその磯井の姿を見ながら用心深く回り込むと磯井の置いた彼の拳銃を取り上げた。そして、磯井が振り向くのを待った。

やがて、磯井は特命者リストを取り出して振り向いた。

「あつたぜ。で、あんたの友人の名前は何て言うんだ？」

一瞬のうちに磯井の顔が曇った。

今、磯井の顔面には克行の握る拳銃が構えられている。

「おい、何のつもりだよ！　じよ、冗談よせよ！」

「冗談？　俺は本気だ」

「待てよ。そ、そんなのってありかよ」

「おまえがいなくなればおまえは誰を殺すことも出来ない。おまえに金を払う必要もなくなる。違うか？」

「わ、わかった。金はいい。金なんかいらぬ。あんたの友達は殺さないよ」

「信用出来ないな。おまえは金のためなら誰だろうと殺すつもりなんだろう。特命者を殺し、金を奪う。今夜もまたそうするつもりだったんだろう。おまえなど死んだほうが世の中のためだ」

「何言ってるんだ？」

「昨夜、一人の年寄りを殺したろうと言っているんだ」

「昨夜？　おまえ、何なんだ？　なんでそんなことまで知ってるんだ？」

「憶えてないらしいな。おまえはずいぶんと慌てていたからな」

克行は拳銃を磯井の顔面につきつけた。話をしながらも磯井の顔は血の気を失い、青く変わっていく。やけに情けないその姿が克行には心地好かった。

「……あんた見てたのか？」

「おまえがマンションから飛び出して行くのを見かけたんだ。運が良かったよ」

「じゃあ、あんたは昨日の爺さんの親戚なのか？ 爺さんの復讐に来たのか？ さっきの話も嘘なんだな！」

「友達の話か…… あれは本当の話だ。おまえを昨夜見かけたとき、なぜだか気になってな。わざわざ警察を呼んでおまえがどの誰なのか調べたんだ。嬉しかったよ、おまえが俺の捜している奴だとわかった時は」

自分の心のなかで残虐な殺意が目覚めようとしていることに克行は気づいていた。だが、気づいていながらも押さえることが出来なかった。克行はなおも相手の命をもてあそぶように、拳銃を磯井の目の前にちらつかせてみせた。

「よせ…… 頼むから止めてくれ」

目が赤く涙が潤んでいる。足ががくがくと震えているのがはつきりとわかる。

「何人殺した？」

「え？」

「この拳銃で何人殺した？」

磯井は黙って首を振った。すでに死の恐怖に理性を失いかけている。そして、理性を失いかけているのは克行も同じだった。他人の命を握る。その狂喜に理性が消えかかっていた。

「何人殺した？」

なおも克行は強く問いかけた。

「…… 殺してない。昨夜の爺さんだけしか俺はまだ…… 頼む…… やめてくれよ…… なあ、いくらだって払うよ。頼む……」

消え入るような弱々しい声。その声で克行の理性が再び蘇った。死に脅えるそのあまりの人間の弱さに克行はそこまで彼を追いこんだ自分自身が怖くなった。

一瞬、自分のやっていることが間違いではないかという考えが頭をよぎった。その瞬間、磯井もその克行の心を読み取ったのか突如、隙について飛びかかってきた。

「ちきしょう！」

拳銃を握る右手を磯井が両手で掴み、拳銃を奪い返そうと力任せにねじあげようとする。克行もまた懸命にその磯井の体を突き放そうと力を込めた。

ぐあーん

どこか、くもったような爆音が克行と磯井の争う間から響いた。磯井の体が重心を失い、弾かれるように仰むけに倒れた。

（火薬の匂い……）

克行の握る拳銃から一筋の煙がうつすらとのぼっていく。

「……ひ……ひい……」

磯井の白いシャツの腹の部分が紅く染まっていく。全身が麻痺したように磯井は体をひくつかせた。まだ痛みは感じてはいないようだが、体はすでに自由を失いかけ起き上がることも出来ずにいる。

「……お……おい……体が動かねえよ……俺、死ぬのか？」

克行は黙ってじっと見つめた。何も言うことが出来なかった。

「な……なあ、助けてくれよ。お願いだ、びよ、病院連れて……連れてってくれよお……そうだ、救急車……救急車呼んでくれよ……なあ」

哀願する磯井を見つめながら、それを振り切るような思いで克行は拳銃をまつすぐに磯井へ向けた。

「や……やめてくれよお……」

微かに左手を克行へ伸ばし、それを盾にでもするかのように磯井は後ろへとさがり逃げ始めた。

克行はそんな磯井へ狙いを定め、今度はしっかりと自分の意志で引き金を引いた。

弾丸は克行に伸ばされた手のひらをつらぬき、心臓を撃ちぬいた。手のひらから赤い筋が走り、次の瞬間磯井の頭はがくりと落ちた。目だけがやたら悲しげにじっと克行を見つめているように感じられた。

なぜだか途端に怖くなってきた。

どんなホラー映画よりもその部屋のなかは恐怖に満ちているように感じられた。

「違う！ 俺が……俺がおまえを殺したわけじゃない！ こ、こんな……こんなことになったのは俺のせいじゃないんだ！」

それが何に対する恐怖なのか、それは克行にもはつきりとつかみとることは出来なかった。いや、感じ取りたいと思わなかった。それを感じ取ってしまったとき、自分の心がどこか途方もない方向へ向かって進んでいきそうな気がしていた。

「俺は……俺は……」

克行はそのままその場にしゃがみこんだ。頭が痛かった。

多くの人々が克行をなじる声が聞こえていた。

――人殺し！

――おまえこそ人殺しだ！

――いったい何人殺したんだ？ そんなに人を殺すことが楽しいのか？

――わしを殺したのはあんただ！ 誰でもない。あんたが殺したんだ！

――おまえの正義感なんてそんなのは嘘っぱちさ。おまえは楽しんでるんだ！ それを認めたくないだけだ！

坂本が、波川が、磯井が、そして杉本老人までもが叫んでいる。

（そうだ、俺が殺した。俺の心のなかのもう一人の俺が楽しんでいる）心のどこかでそんなふうに思いはじめていることに克行は恐怖していた。それを認め、受け入れてしまうことが怖かった。

「違う！ 違う！ 違う！ 違う！ 違う！ 違うんだ！」

克行は叫び続けた。

パトカーのサイレンの音が微かに聞こえていた。

死のクリスマスイブ・21

二十一

アパートへ帰ると克行はすぐにポケットから「殺人リスト」を取り出した。そして、そのリストの「磯井正隆」の部分を書いたマジックで塗り潰した。何度も何度も完全に読み取れなくなるほどに塗り潰した。坂本、波川の名前も昨日のうちに同じように塗り潰されている。

しかし、どれほど塗り潰してみても克行にはそのマジックのあとを透して消されたはずの名前を読み取ることが出来た。すでに彼ら三人の名前は克行の心のなかにしつかりと刻まれてしまっている。

警察の取り調べは驚くほどあっという間に、昨夜の杉本のもの以上早く終わった。克行が特権者とわかった時の警察官たちの顔が思い出された。横柄な態度で克行に一度手錠をかけた警察官は真っ青になりわずかに震え、そして克行の顔をうかがいながら手錠を外した。銃声を聞き近所の主婦が警察に連絡したらしいが、その主婦も克行が特権者であったことを知り（彼女は「特権者優遇計画」についてよく知らず、警察官に説明されてやっと理解した）犯罪として警察に訴えたことを何度もひたすら謝り続けた。克行は初めて特権者という権利がいかに強いものかということを知った。しかし、その逆に彼らの脅えた瞳の奥に克行をさげすむ光があったことも感じていた。

リストをテーブルの上に投げ出すと、克行は次に拳銃を取り出した。磯井の持っていた拳銃はその場においてきたが装填され残っていた弾丸だけは気づかれぬように抜き取り持ってきた。磯井を殺すことも含めすでに五発は使ってしまったため残っていたのは一発だけだったが、それでも克行にとっては貴重な一発だった。

克行はその貴重な弾丸を自分の拳銃に装填した。

（あと二人……）

極度のストレスのためか微かに頭痛がしていた。

麻美の名前の載るリストを持つ特権者があと二人いる。

高校の教員である富士川、そして警察官であるあの立花。この二人を狙うのは今までの三人以上に難しいように思えた。

あの殺人を何よりの楽しみとし、市役所もまたもつとも高いランクであると認めている立花を殺すことが出来るだろうか。また、富士川にしてもランク・Bであり、どんな人間なのかもまったくわからない。

そんな二人を相手にすることになる。

克行は今日感じた自分自身のなかの狂気さも含め、これから不安を感じた。もしも無事に終わったとしても、これまでとは生き方も考え方もまるで変わってしまったているかもしれない。立花のようになっていることだって考えられる。

けれど、やらなければならぬ。

そうだ、麻美のためにはどんなことでもやらなければいけないんだ。自分の頭がおかしくなろうと、殺人が楽しいとを感じるようなおかしい人間になろうと麻美を守らなきゃいけない。進むべき道がそれしかないことを克行は知っていた。

（くそ！　これが運命なら受け入れてやろうじゃないか！）

克行はおもむろに電話帳を手にとると調べ始めた。

「川越高校」

克行の住む街から電車で一時間近くかかる距離にある私立高校である。そして、富士川の住む境八日町もそのすぐ近くにある。

克行は富士川を次の標的に決めた。

電話番号を調べると克行は電話へ手をのばした。

RRR・RRR……

呼び出し音が鳴っている。六時前、まだ教師たちは残っているは

ずだ。だが、なかなか出ようとしない。ズキズキと頭が痛み出していた。

何やってるんだ！

克行はいらつきを押さえるように指でテーブルをこつこつと叩いた。

——はい、川越高校です。

コール十回目でやっと女性の声が電話に出た。

「すいませんが富士川先生いらっしゃいますでしょうか？」

——富士川先生ですか？ えーとですね。

辺りを見渡しているのか、考えこんでいるのか一瞬間があいた。

——少々お待ちください。

愛想のない声で受話器がガタリと机のうえに置かれるような音がした。頭痛はしだいに酷くなっている。克行は受話器を握りしめながら頭痛薬があつたかどうかを思い出そうとした。

やがて、どこからかパタパタと走るような音が聞こえてきた。

——もしもし、電話変わりました。富士川です。

まだ、若そうな声だ。

——もしもし？

「あ……富士川先生ですか？」

——はい。

「私、矢代受験センターの者ですが——」

つい知っている受験センターの名前が口に出た。

——はあ、なんでしょう。

「大学入試を控え、そちらの学校の受験調査で電話したんですが……」

——受験調査ですか？

「もしよろしければ明日お伺いしてお話を聞かせていただけないでしょうか？」

——明日？ ずいぶん急ですね。

「明日はいらっしゃらないんですか？」

——いや、そういうわけじゃないんですが。ちょっと……昼間お客さんが来ることになってるんですよ。私でなく田口先生ではいけませんか？ 彼も三年の担任ですし。

「構いませんよ。田口先生は今、いらっしゃるんですか？」

——いえ、今日はもう帰られたんですよ。けど、大丈夫ですよ。私のほうから連絡しておきますから。

「そうですか、それではよろしくお願いします」

克行は静かに受話器を置いた。

自分でも比較的うまく嘘をつけたと感心していた。克行は富士川を校内で片付けることに決めた。

これで明日富士川が校内にいることは間違いない。ただ、客が来るというその言葉が妙にひっかった。高校の教師という立場上いろいろな客が訪ねるのはべつにおかしなことでない。しかし、なぜだか克行にはそれが今回の特権者優遇計画と関わりがあるように思えてしかたなかった。

（ノイローゼぎみだな……何でも計画に結びつけて考えてしまう癖がついてる）

しかし、それもあと二人。二人を殺すことで自分の役目は終わる。そう考えることで何とか今の状況から逃れたかった。

克行は立ち上がると頭痛薬を捜すために動き出した。我慢出来ないほど頭痛は酷くなっていた。だが、あいにく頭痛薬は一錠すら見つけることは出来なかった。考えてみれば頭痛薬などもう一年以上使ったことがなかった。あの拳銃乱射事件を目の当りにした時に使ったきりだ。あの時、全て使い切ってしまったのだろう。克行はさらに捜した結果、やっと睡眠薬を捜し出した。

克行は二錠取り出すとからからに乾いた口に押しこむとキッチンで冷蔵庫からビールを取り出して一罐を一気に飲み干した。からっぱの胃袋にビールが流れこむ。おそらくすぐに酔いがまわってくるだろう。

克行はスーツを脱ぎパジャマへと着替え始めた。今夜はもうこれ

で眠ってしまうつもりだった。市役所からの電話など聞きたくもなかった。

（麻美は？）

大丈夫さ。きっと大丈夫だ。

——彼女は大丈夫。

涼子の言葉が思い出された。涼子になぜそんなことを口にしたのかそれはわからなかった。けれど、こうやって毎日を過ごしているうちに克行もそんなふうに思うようになっていた。

そうだ、彼女は大丈夫だ。

克行はベッドへ潜り込み目を閉じた。早くも睡魔が訪れていた。深い眠りはおそらく悪夢も取り去ってくれることだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6197z/>

死のクリスマスイブ

2011年12月31日16時00分発行